第　４　回

新 四 国 創 造 研 究 会

平成１９年９月１４日（金）13:30～15:30
高松サンポート合同庁舎　低層棟アイホール

ー 議　事　次　第 ー

1．開会

2．議事事項

⑴ 新四国創造研究会　提言にむけた議論

・事務局説明

・討　　議

3．閉会

［資料一覧］

<資料－1>　新四国創造研究会の提言に向けた議論のポイント(A3 横)
<資料－2>　新四国創造研究会意見書（素案）概要
<資料－3>　議論のための基礎資料
<参考資料－1>新四国創造研究会　意見書（素案）
<参考資料－2>新四国創造研究会　これまでの意見整理

平成19年9月14日

第4回新四国創造研究会　委員名簿

◎委員長　　(50音順・敬称略)

	氏　　名	所　　属　　先
出席	秋岡　榮子	経済エッセイスト・経済キャスター
	伊藤　宏太郎	西条市市長
	井原　健雄　◎	北九州市立大学大学院教授
	今井　義典	ＮＨＫ解説主幹
	梅原　利之	四国観光立県推進協議会長
	岡村　甫	高知工科大学学長
	小川　全夫	山口県立大学大学院教授
	柏谷　増男	愛媛大学大学院理工学研究科教授
	残間　里江子	㈱ｸﾘｴｲﾃｨﾌﾞ・ｼﾆｱ代表取締役社長
	竹内　麗子	香川県各種女性団体協議会副会長
	西村　幸夫	東京大学大学院工学系研究科教授
	本庄　里恵子	瀬戸内海放送アナウンサー
	望月　秋利	徳島大学大学院ｿｼｵﾃｸﾉｻｲｴﾝｽ研究部教授
欠席	川勝　平太	静岡文化芸術大学学長 (国際日本文化研究センター客員教授)
	丸山　力	徳島県最高情報統括監

新四国創造研究会の提言に向けた議論のポイント

資料－1

四国の特徴

①地形的に、まとまりのある四国に、個性ある多様な地域が存在する
②地域（都市と田舎等）が地理的に近い
　・概ね９０分で県庁所在都市まで交流が可能な地域が多い
③美しい自然（日本の原風景）と、農山漁村など人々の営みがある
④独自の歴史、文化が存在する
　・お遍路やお接待文化などの歴史・文化、ボランティア活動がある

四国の課題

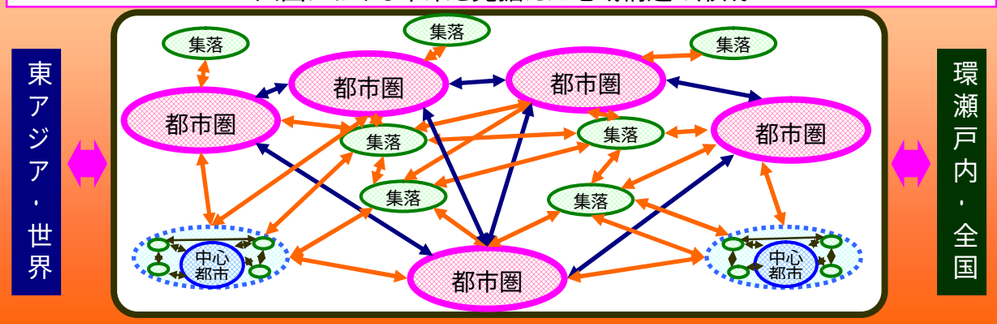
●生活面の安心・安全の確保
●地域資源が活かされていない
●四国内の結びつきの弱さ

四国における一体化の必要性

●集積のメリットを享受
●地域資源の再発見と活用
●心の癒しや、自己鍛錬・人材育成の場としての活用

四国における国土形成のコンセプト

<<交流・連携を活かし、輝く個性の創造>>
～四国における未来を見据えた地域構造の形成～



交流・連携を活かした一体化により、地域の価値を高める

●域内の交流・連携
・高いモビリティ環境の整備
・地域資源の活用
・活力ある企業、地域の創出
・都市サービスの享受

●域外の交流・連携
・ゲートウェー機能の強化
・個性ある企業の情報発信
・四国ブランドの全国展開
・東アジアや世界市場における認知

●四国の価値を高める
・交流・連携により認知度を高める
・交流により活力を創出
・四国ブランドの強化

国土形成に向けての目標

●安全・安心の実現
●中山間地域の魅力の保持・創造
●特色ある地域を活かした四国の独自性の創出

目標の実現に向けて

目標の実現に向けた提言

四国独自の交流・連携に向けた地域施策の展開

(1)安全・安心の確保
・安全・安心を支える社会基盤の確保
・自然との調和
・地域との相互連携

(2)人の交流・連携（開かれた知の創造・人材育成）
・時代を先取りするライフスタイルの創出
・知の創造拠点としての独自色のある開かれた教育の場の展開
・新しい価値観・開かれた考え方を持った「新たな公」の育成

(3)地域資源の交流・連携（地域資源の再発見と活用）
・美しい風土としての自然資源の価値の再発見
・歴史的・文化的な地域資源の価値の再発見
・地域資源を活かした特色ある産業・コミュニティビジネスの展開

(4)域内の交流・連携（多様な地域間の交流・連携の強化）
・都市間連携の強化
・中山間地域における活力の向上
・都市と中山間地域における連携の強化

(5)域外の交流・連携（環瀬戸内や世界との交流の促進）
・環瀬戸内での連携強化
・全国との交流促進
・東アジア・世界との交流促進

資料－2

新四国創造研究会

～意見書（素案）概要～

平成19年9月14日

四国地方整備局

四国の特徴

①地形的にまとまりのある四国に、個性ある多様な地域が存在する

・瀬戸内、山間地域、南四国地域など多様な地域が存在する

②地域（都市と田舎等）が地理的に近い

・概ね９０分で県庁所在都市まで交流が可能な地域が多い

③美しい自然（日本の原風景）と、農山漁村など人々の営みがある

・瀬戸内海の多島美や、古い町並みなど美しい風景が存在する

④独自の歴史、文化が存在する

・お遍路やお接待文化などの歴史・文化、ボランティア活動がある

四国の課題

●生活面の安心・安全の確保

- 急峻な地形、脆い地質
- 台風などによる洪水や、瀬戸内の渇水
- 東南海、南海地震にたいする不安

●地域資源が活かされていない

- 地域資源が豊富に存在するが、知られていない
- 個々の取り組みでは知名度が弱い

●四国内の結びつきの弱さ

- 四国内の移動が少ない
- 四国の人が四国の中を見ていない

四国における一体化の必要性

●集積のメリットを享受

・地域における安全・安心を確保するための一体化
・地域における日常サービスを確保するための一体化
・グローバル化する都市間競争に対応するための一体化
・産業集積を活かすための一体化

●地域資源の再発見と活用

・地域資源の全国的な認知のための一体化
・四国の知名度を高めるための一体化

●心の癒しや、自己鍛錬・人材育成の場としての活用

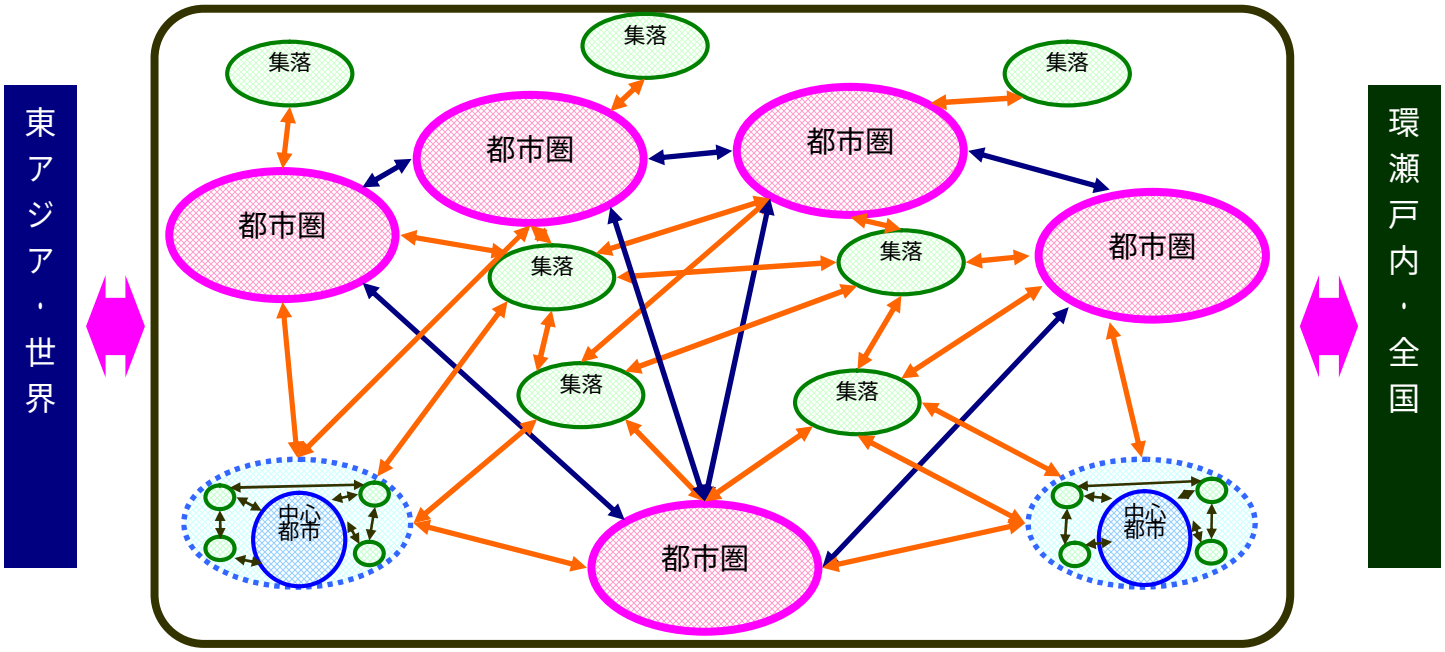
・未来に投資する人材育成
・心の癒し、自己鍛錬、自己再生、道場
・教育の場の機能連携

四国における国土形成のコンセプト

＜＜交流・連携を活かし、輝く個性の創造＞＞

～四国における未来を見据えた地域構造の形成～

・地域間のモビリティの高密な交流・連携
・マルチハビテーションなどのしやすい交流・連携
・地域資源の価値を高める交流連携



交流・連携を活かした一体化により、地域の価値を高める

●域内の交流・連携

・高いモビリティ環境の整備
・地域資源の活用
・活力ある企業、地域の創出
・都市サービスの享受

●域外の交流・連携

・ゲートウェイ機能の強化
・個性ある企業の情報発信
・四国ブランドの全国展開
・東アジアや世界市場における認知

●四国の価値を高める

・交流・連携により認知度を高める
・交流により活力を創出
・四国ブランドの強化

国土形成に向けての目標

●安全･安心の実現

～地形、気候による災害が多発する地域である～

･住民の防災意識を高める地域との連携強化

･災害から財産を守る基盤整備の促進

●中山間地域の魅力の保持･創造

～中山間地域は高齢化により危機的状況にあるが、地域資源の宝庫である～

･モビリティ向上により地域資源の活用･活性化

･四国ブランドとすることで価値を高めていく

●特色ある地域を活かした四国の独自性の創出

～四国は様々な個性を有する地域から形成されている～

･都市集積、産業集積を活かした競争力の向上

･地域資源を活かした特色ある地域づくりの推進

①安全・安心の確保

●安全・安心を支える社会基盤の確保

・東南海、南海地震に対する備え

・治水事業の推進

・災害時のネットワーク強化

●自然との調和

・景観にとけ込んだ整備の推進

・無機質な構造物から自然を修復

・住民が安らぎ、憩える場の創出

●地域との相互連携

・被害を最小限にするために

・ハザードマップ、避難経路図などの整備

・防災意識の啓発、防災教育

②人の交流・連携（開かれた知の創造・人材育成）

●時代を先取りするライフスタイルの創出

・都市圏と中山間地域の近さを活かした連携強化

・地域の担い手を計画的に育成

・マルチハビテーションを支援する環境づくり

●知の創造拠点としての独自色のある開かれた教育の場の展開

・大学による総合的な人間教育を図る場

・地域言語（アジアなど）を重視した教育

・機能連携の充実（単位互換など）

●新しい価値観・開かれた考え方を持った「新たな公」の育成

・行政主導から住民主役の地域づくりへ

・自らの地域のことは地域で取り組む意識の醸成

・個々の活動を下支えするインフラ整備

③地域資源の交流・連携（地域資源の再発見と活用）

●美しい風土としての自然資源の価値の再発見

・森林・棚田などの良好な景観の保全、復元

・中山間地域における森林保全

・河川環境の保全・復元・再生

●歴史的・文化的な地域資源の価値の再発見

・現代のストレス社会の癒しとしての遍路文化

・現代美術の宝庫としての連携強化

・連携・一体による四国外へのアピール

●地域資源を活かした特色ある産業・コミュニティビジネスの展開

・地域資源などの創意工夫による高付加価値化

・住民主体のコミュニティビジネスの創出

・コミュニティビジネスを下支えするインフラ整備

④域内の交流・連携（多様な地域間の交流･連携の強化）

●都市間連携の強化

･個々の都市が連携を深め力を発揮

･経済、観光、暮らしを支えるネットワーク整備

･機能補間による１００万都市並のメリットを享受

●中山間地域における活力の向上

･中山間地域の潜在資源を発掘

･ナショナルミニマムとしてのインフラ整備

･移動に伴う公共サービスの維持向上

●都市と中山間地域における連携の強化

･高規格幹線道路による高次医療の享受

･マルチハビテーションのニーズに応じた空間整備

･地域特性に応じた効率的なインフラ整備

⑤域外の交流・連携（環瀬戸内や世界との交流の促進）

●環瀬戸内での連携強化

・瀬戸内海の環境の維持、保全、活用

・本四架橋を活用した交流の強化

・物流の効率化のための連携強化

●全国との交流促進

・独自性を活かした他地域との差別化

・個性ある企業の育成の推進

・交流を後押しするネットワークの強化

●東アジア・世界との交流促進

・国際ゲートウェー機能の強化

・物流確保のための道路機能の強化

・国際競争に打ち勝つ人材の育成

資料-3

新四国創造研究会

～議論のための基礎資料～

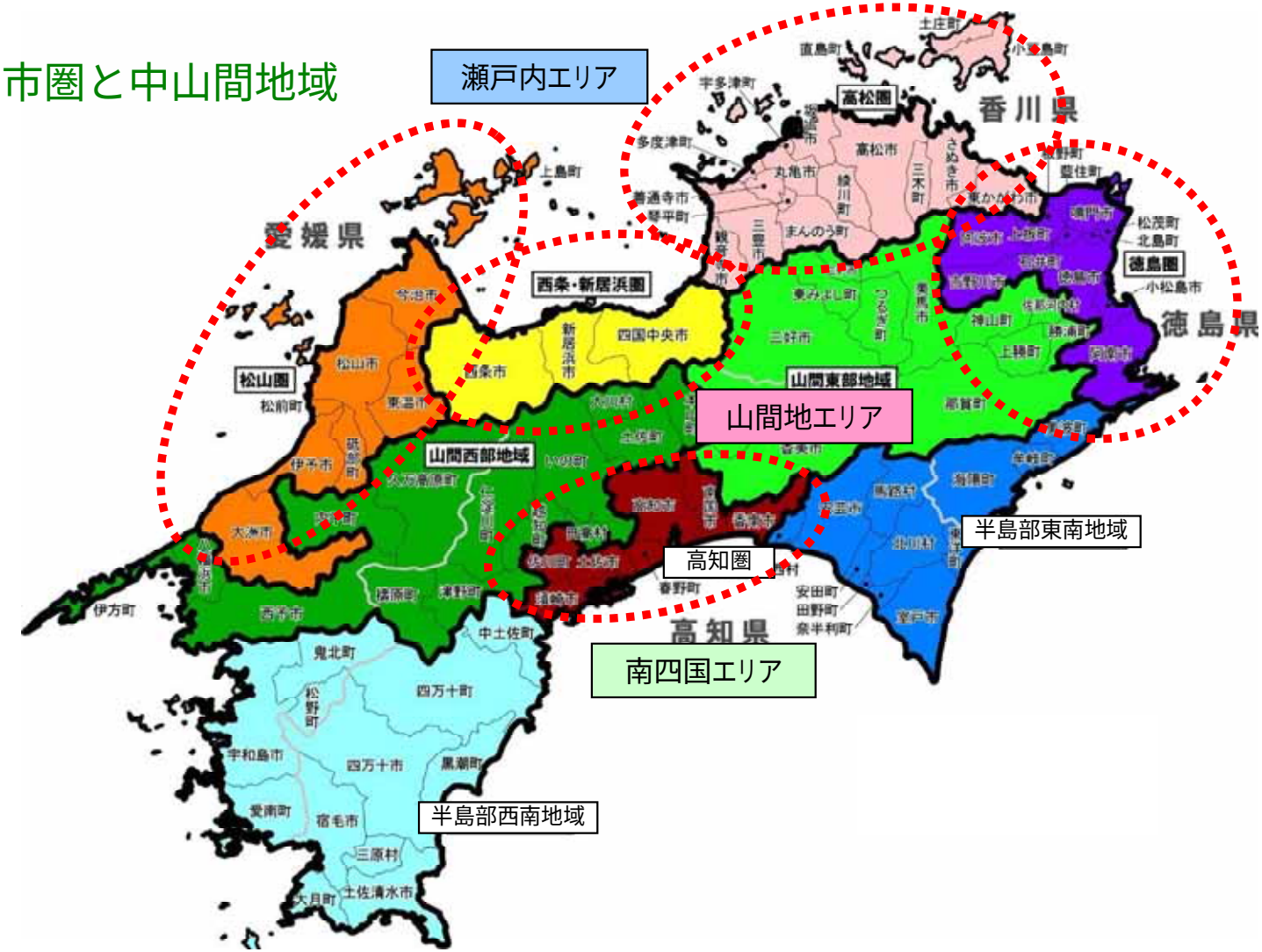
四国地方整備局

1.四国の特徴

●地形的に、まとまりのある四国に、個性ある多様な地域が存在する。

＜“生活”、“経済（産業）”の視点から見たエリア設定＞

5つの都市圏と中山間地域



1.四国の特徴

●地形的に、まとまりのある四国に、個性ある多様な地域が存在する。

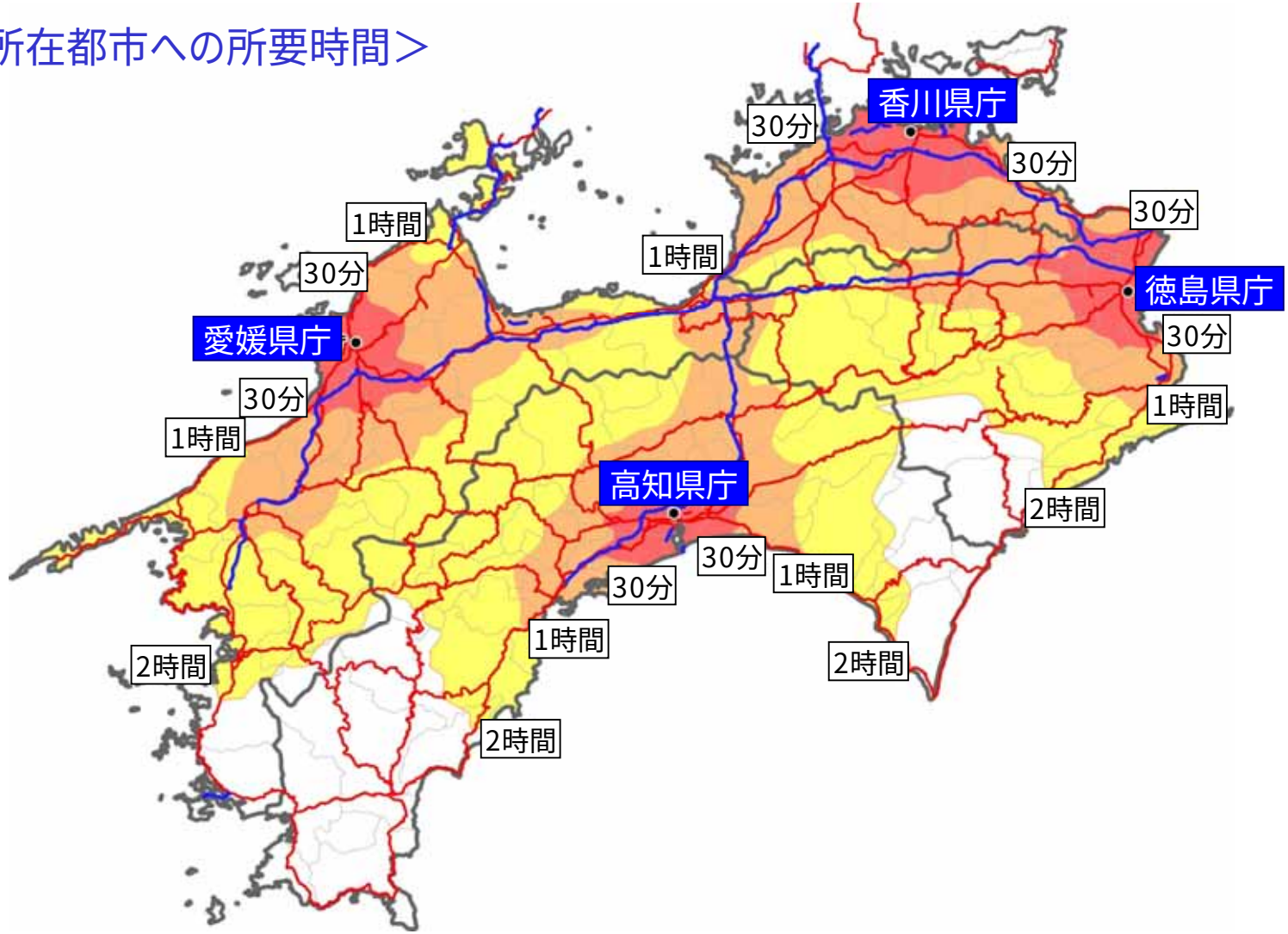
エリアと地域区分		検討対象		地域の今後のあり方
		生活	経済(産業)	
瀬戸内エリア	松山圏 西条・新居浜圏 高松圏 徳島圏	●	●	・4つの30万人都市圏が連たん ・高速道路等のインフラが整備され、都市集積や産業集積が高い。 ・既存ストックを活用した、競争力向上が求められるエリア
山間部エリア	山間東部地域 山間西部地域	●		・急峻な地形により小規模な集落が存在 ・インフラ整備や、人口・産業等の集積が難しい ・集積型ではなく、地域資源を活かした特色ある地域づくりが求められるエリア
南四国エリア	高知圏	●	●	・高知圏（30万人都市圏）と半島部が存在 ・現状では、高速道路等のインフラ整備が遅れ、産業集積が低い。 ・高知圏においては、インフラ整備とそれを最大限に活かした地域活力の向上が求められるエリア ・また、半島部において、地域資源を活かした特色ある地域づくりが求められるエリア
	半島部東南地域 半島部西南地域	●		

1.四国の特徴

●地域（都市と田舎等）が地理的に近い

・中山間地域の集落から、概ね９０分で県庁所在都市まで交流が可能となっている。（ただし、南四国の半島部からは遠くなっている）

＜県庁所在都市への所要時間＞



1.四国の特徴

●美しい自然（日本の原風景）と農山漁村など人々の営みがある
・中山間地域の集落における美しい景観や歴史・文化の存在し、日本の原風景が残されている。

＜美しい自然景観＞

石鎚山（愛媛県西条市）

小豆島エンジェルロード
（天使の散歩道）
（香川県土庄町）

だるま夕日（高知県宿毛市）

四国カルスト（愛媛県）

四万十川（高知県）

＜個性的な歴史・文化の存在＞

防風石垣による集落（愛媛県愛南町外泊地区）

八日市・護国のまち並み
（愛媛県内子町）

遊子の段畑
（愛媛県宇和島）

1.四国の特徴

●独自の歴史、文化が存在する
・お遍路やお接待文化等の四国共通の歴史・文化に加え、ボランティア活動も盛んである。

＜四国伝統の普請やお接待の精神＞

★古来より四国では、満濃池普請など、地域の人々が勤労奉仕により、地域の共有財産の普請活動を行ってきた。

★さらに、１２００年を誇る文化遺産である遍路文化があり、その底流にある“お接待”の精神も“普請”の精神と共通点を持っている。

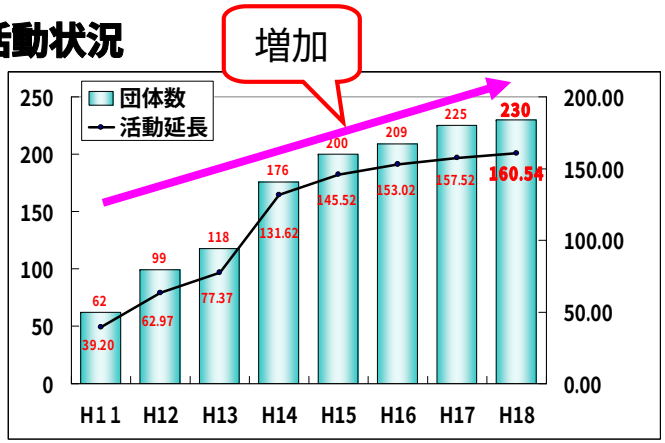
★現在も、地域のボランティアの手で遍路道の修復が行われ、今も“普請”の精神が受け継がれている。

四国伝統のお遍路文化とお接待の精神

遍路道修復のボランティア作業

＜四国ﾎﾞﾗﾝﾃｨｱ活動状況＞

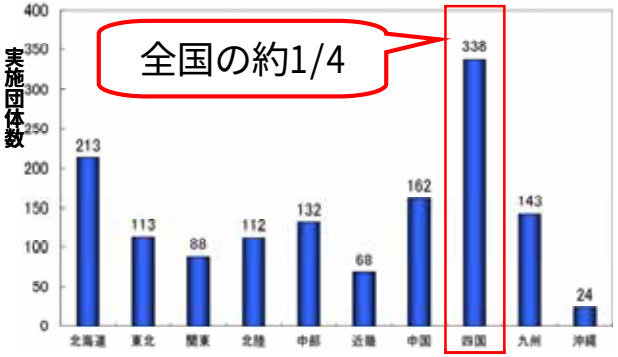
■河川アドプト活動状況



四国地方整備局（H18．12月現在）

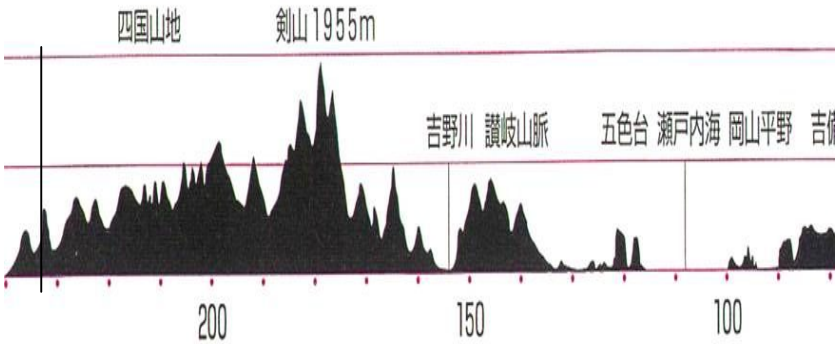
H18の場合＝ 河川アドプト延長（160.54km） / 直轄区間における左右岸延長（570.2km） ＝28.2%

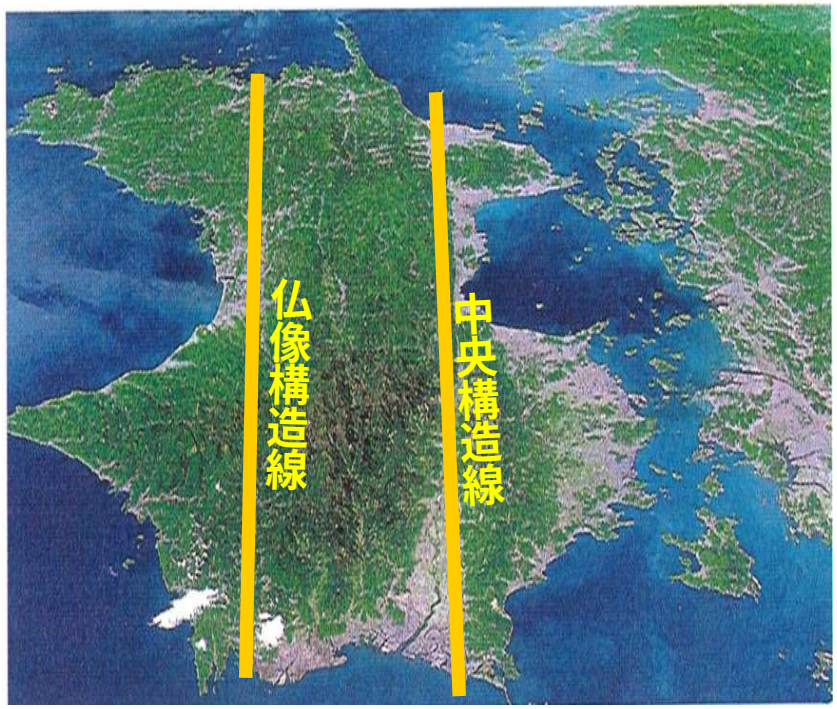
■ボランティア・サポート・プログラム
地方ブロック別の実施団体数



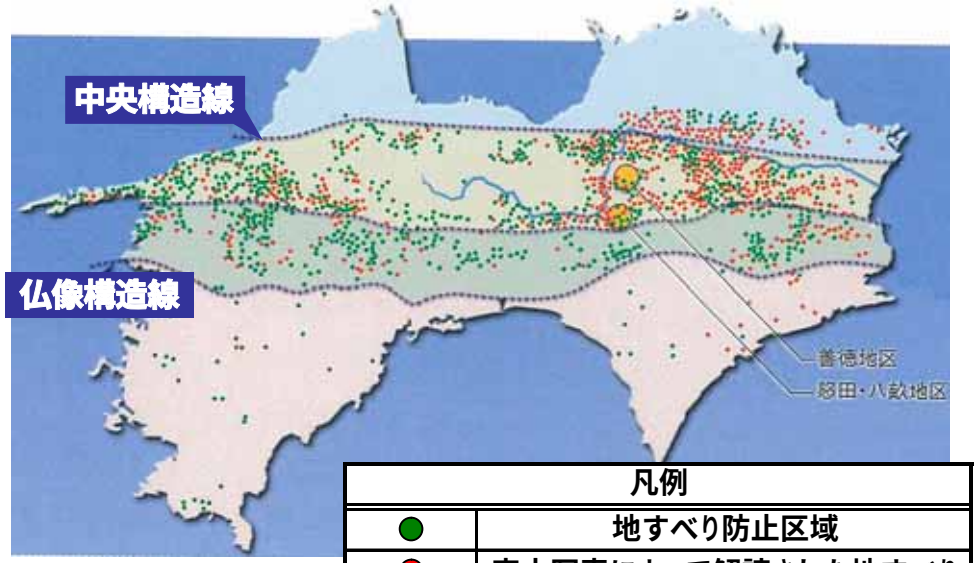
2.四国の課題

●急峻な地形ともろく崩れやすい地質





■地すべり防止区域等の分布

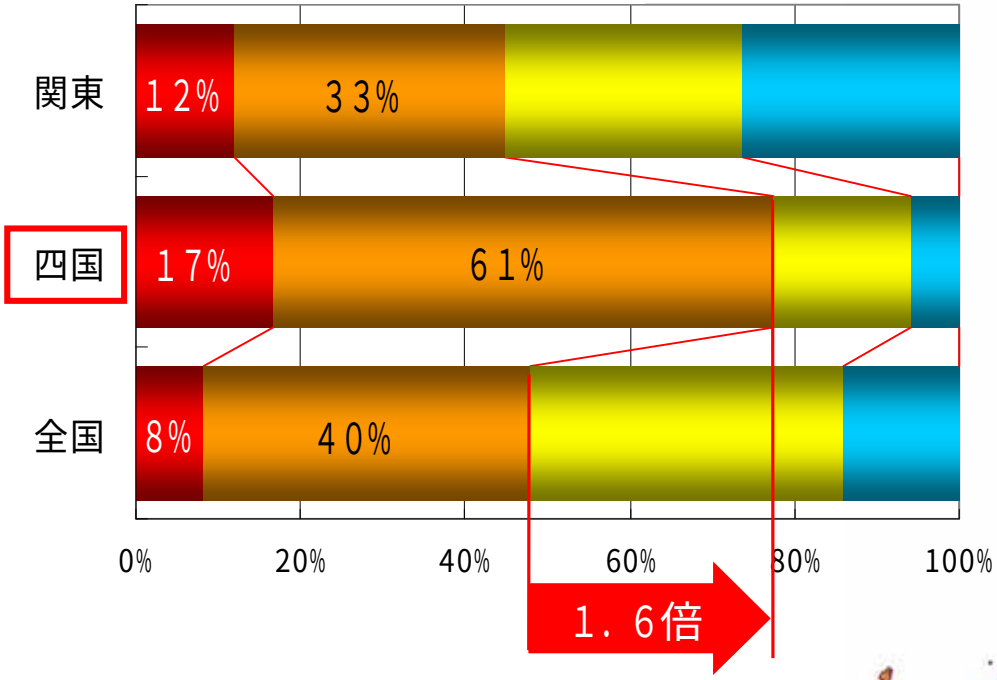


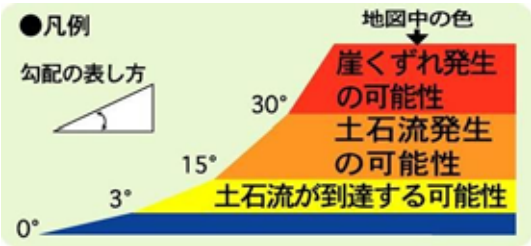
凡例	
●	地すべり防止区域
●	空中写真によって解読された地すべり

2.四国の課題

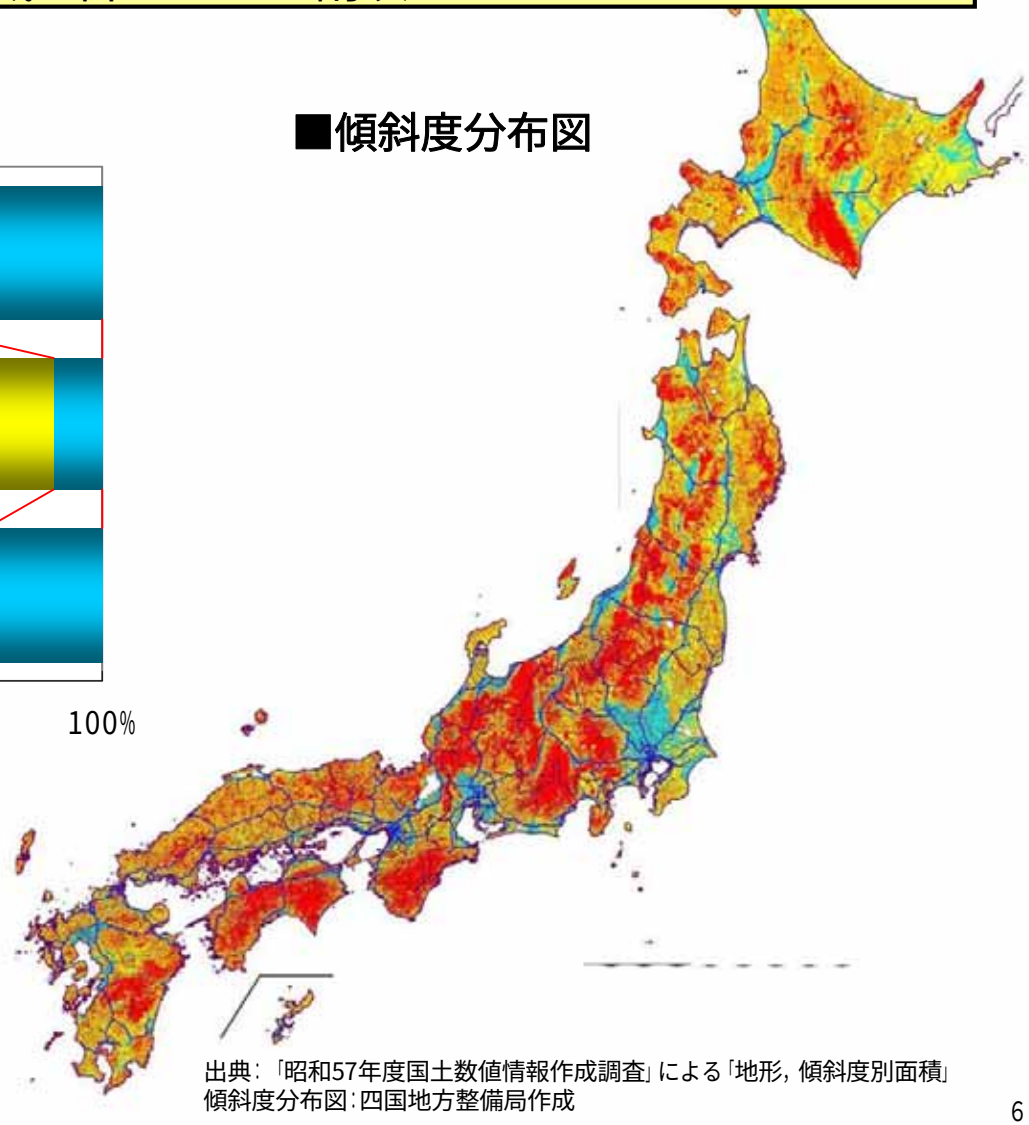
●土石流･崖崩れの発生可能性のある急傾斜地が約８割
・面積は全国平均の１．６倍
・土石流が到達する可能性のある地域を含めると、９割以上

■傾斜度別　面積割合





■傾斜度分布図

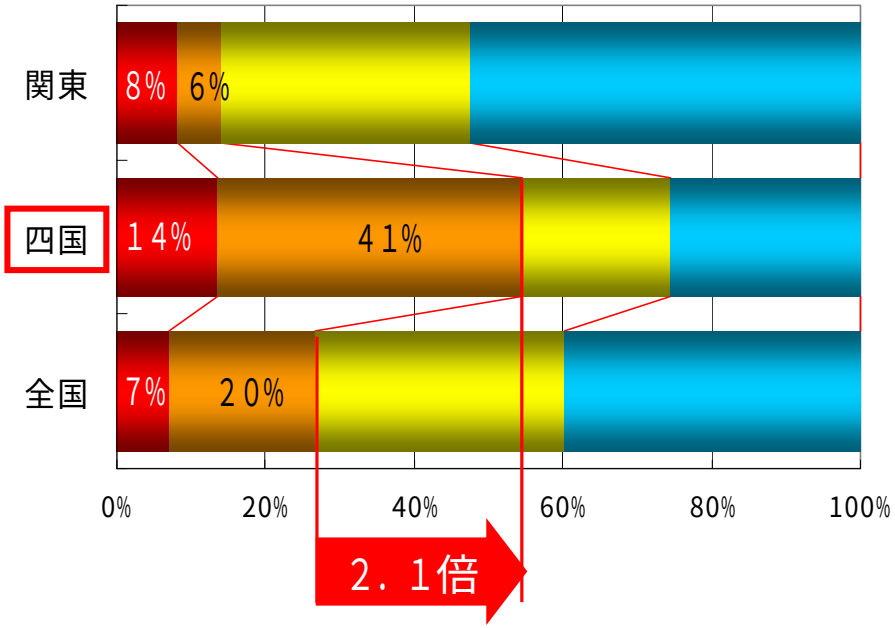


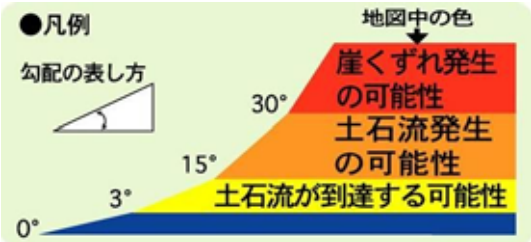
出典：「昭和57年度国土数値情報作成調査」による「地形，傾斜度別面積」
傾斜度分布図：四国地方整備局作成

2.四国の課題

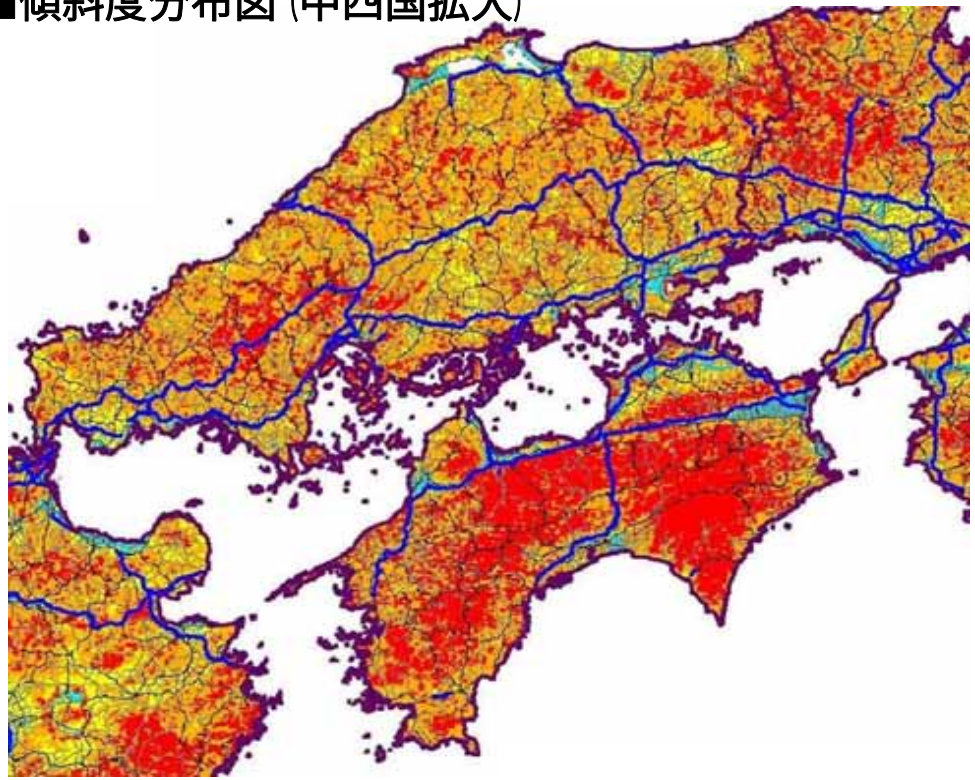
●急峻で危険な地域に暮らす人が半数以上
・人口は全国平均の２倍以上、関東地方の約４倍
・土石流が到達する可能性のある地域を含めると、７割以上

■傾斜度別　人口割合





■傾斜度分布図（中四国拡大）

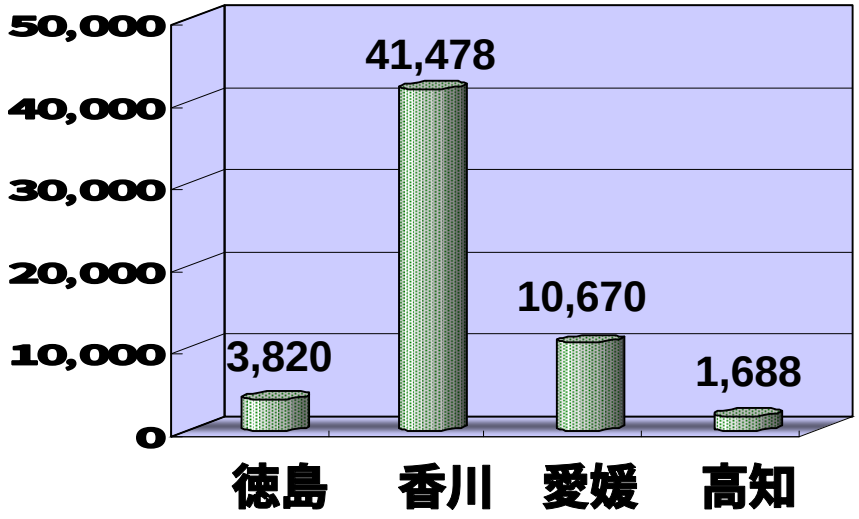


出典：「昭和57年度国土数値情報作成調査」による「地形，傾斜度別面積」
傾斜度分布図：四国地方整備局作成

2.四国の課題

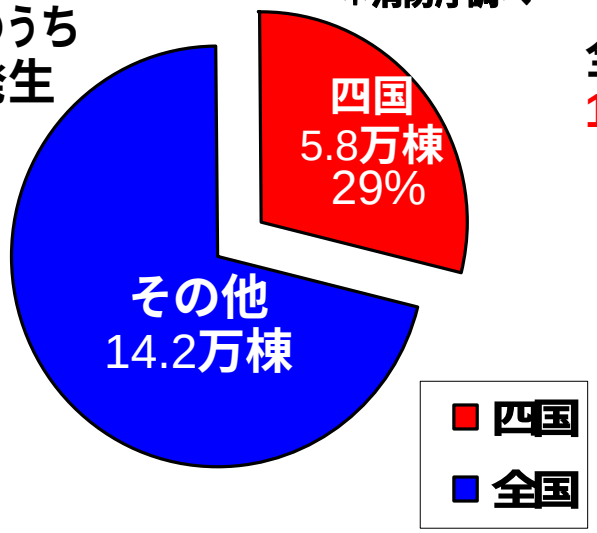
●台風や集中豪雨などによる洪水
・平成１６年：豪雨災害での事例

延べ約5万8千棟が浸水

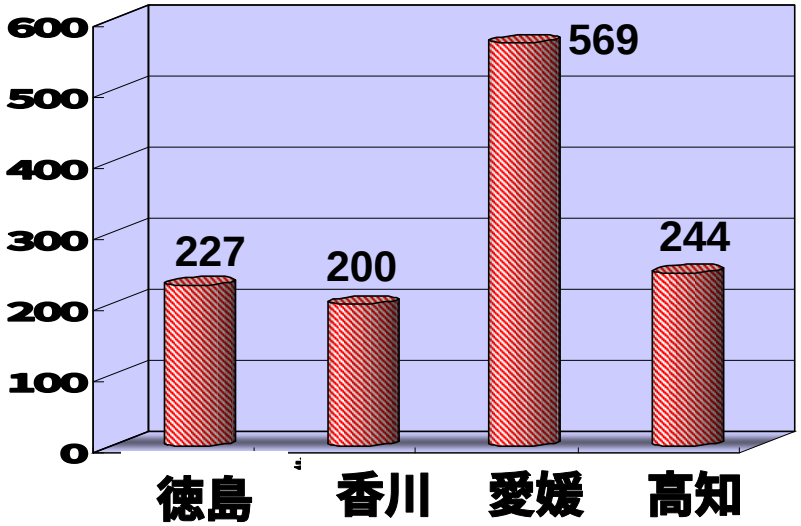


＊消防庁調べ

全国浸水戸数のうち
29%が四国で発生

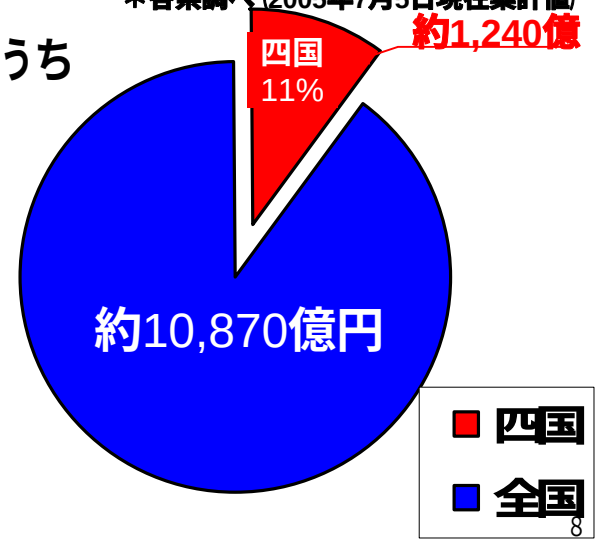


約1,240億円の水害被害額



＊各県調べ（2005年7月5日現在集計値）

全国水害被害額のうち
11%が四国で発生

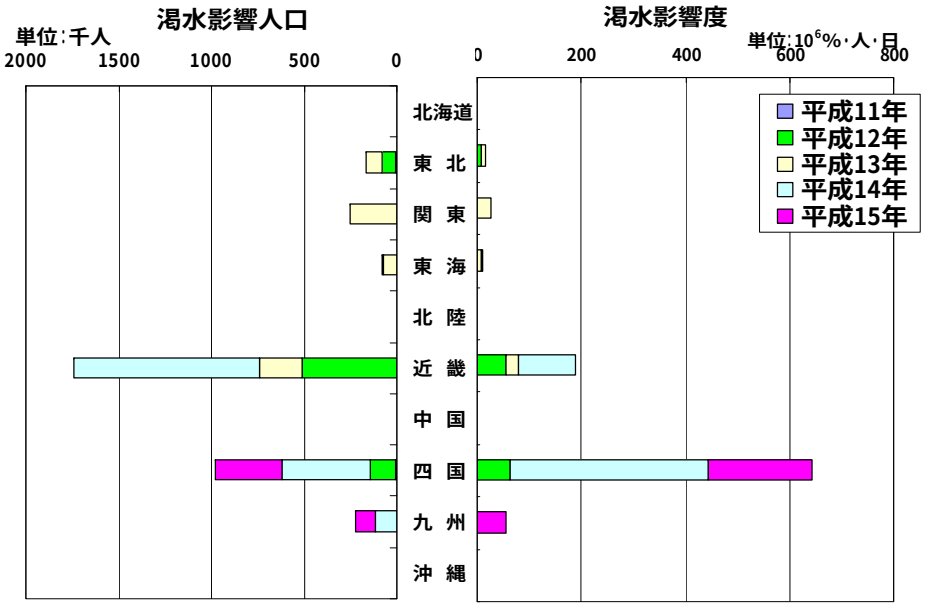


2.四国の課題

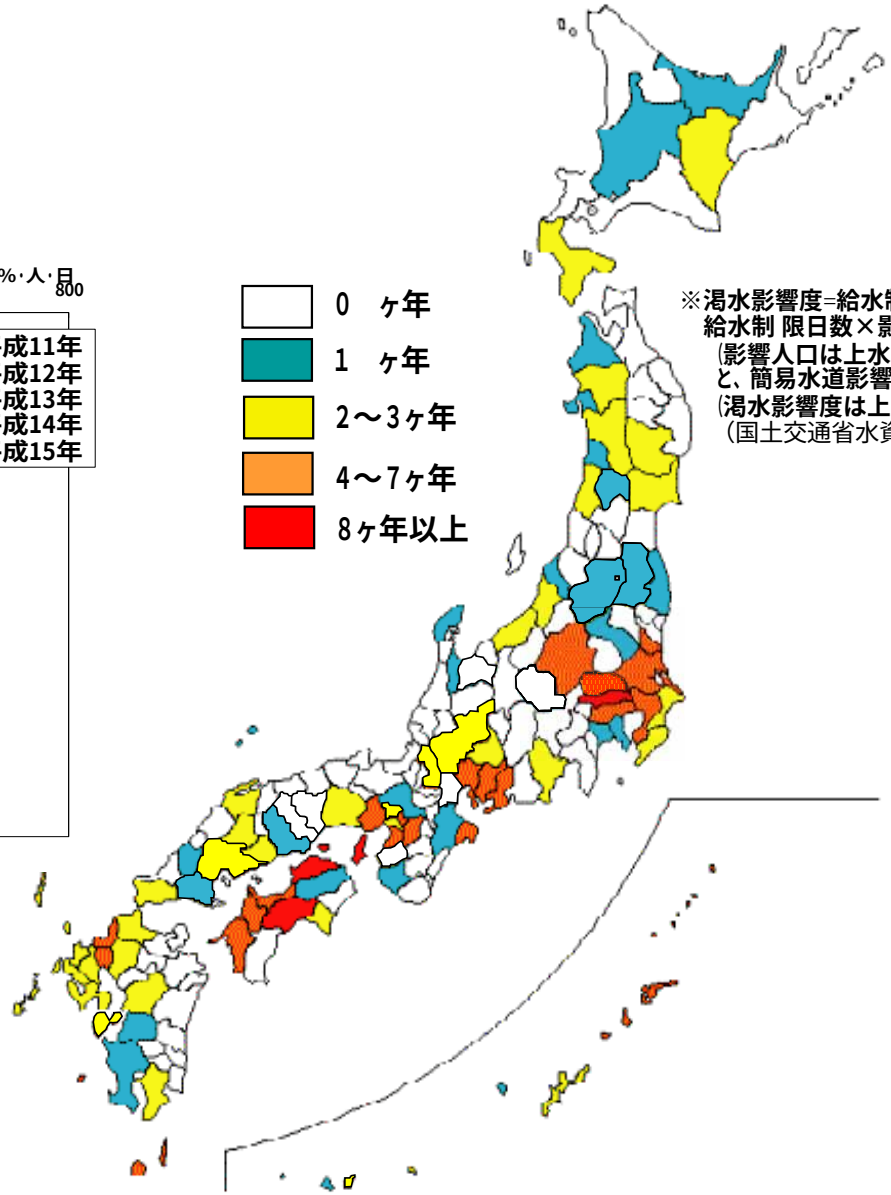
●瀬戸内海側の頻発する渇水

＜渇水被害＞

■過去5年の被害状況



■最近20年で渇水の発生した状況



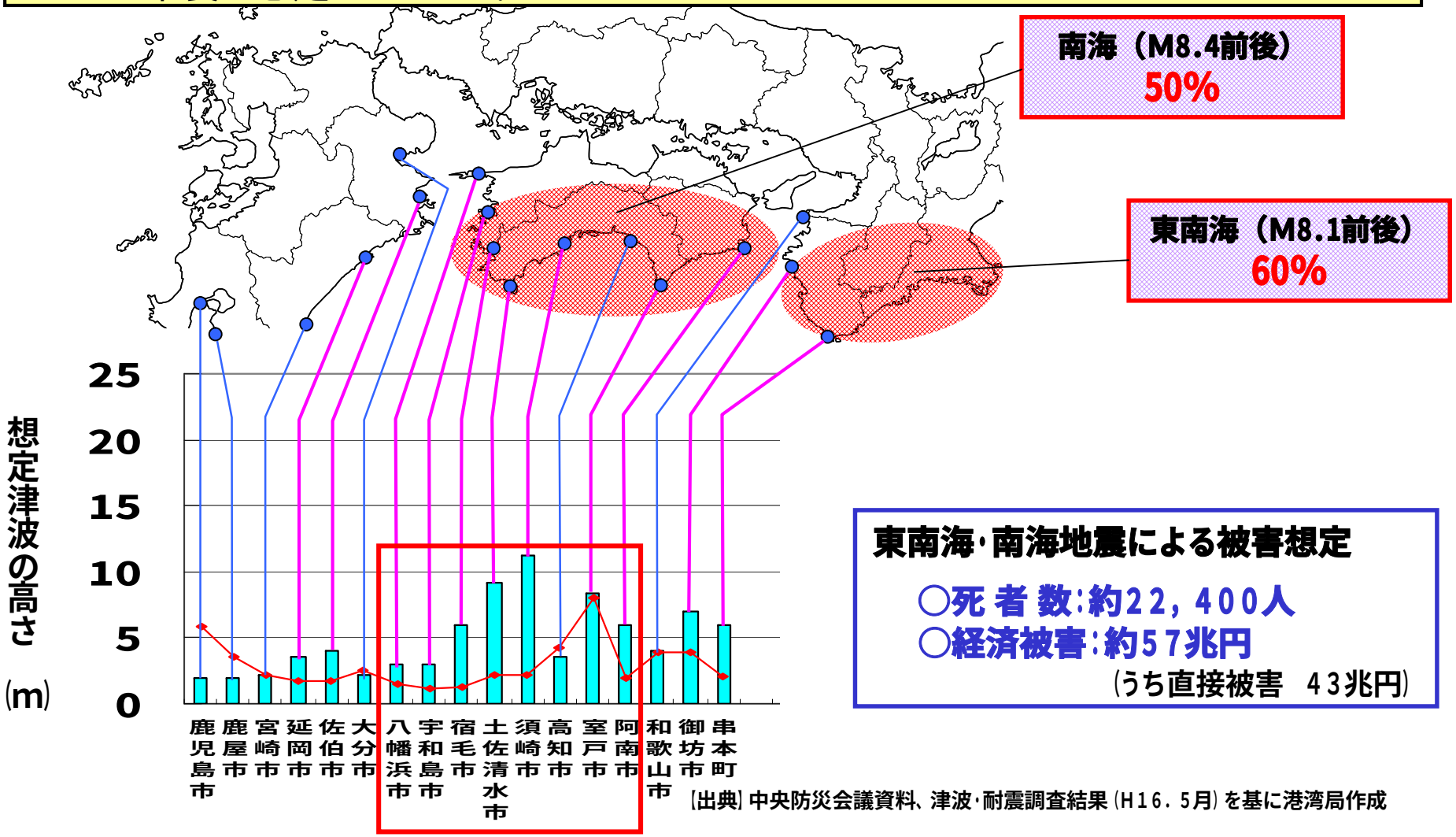
※渇水影響度=給水制限率×給水制 限日数×影響人口の和
(影響人口は上水道影響人口と、簡易水道影響人口の和)
(渇水影響度は上水道のみ)
(国土交通省水資源部調べ)

2.四国の課題

●東南海、南海地震にたいする不安

・今後３０年以内に南海地震が発生する確率は５０％

・東南海･南海地震に伴い、太平洋沿岸において、3m～１１m程度の高さの津波の来襲が想定されている。



東南海･南海地震による被害想定

○死 者 数:約22，400人

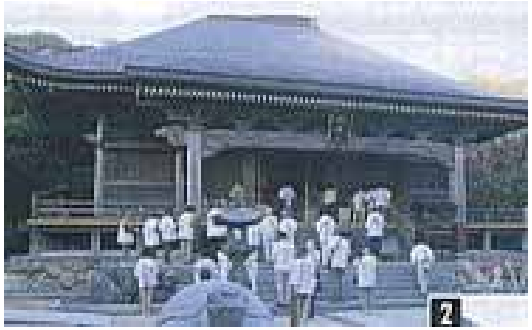
○経済被害:約57兆円

（うち直接被害　43兆円）

【出典】中央防災会議資料、津波･耐震調査結果（H16．5月）を基に港湾局作成

2. 四国の課題

●地域資源が活かされていない
・四国の良さが全国・世界に打ち出しできていない。


四国八十八箇所

松山城（愛媛県）

阿波おどり（徳島県）

よさこい祭り（高知県）

うだつの町並み（徳島県）

宇和海海中公園（愛媛県）

さぬきうどん（香川県）

阿波尾鳥（徳島県）

瀬戸大橋

四万十川（高知県）

ジャコ天（愛媛県）

皿鉢料理（高知県）

2. 四国の課題

●四国が知られていない
・四国の地域資源が十分に知られていない。

＜四国内外住民の認知度＞

四国外でもよく知られているもの

	認知度(%)	
	四国内	四国外
讃岐うどん	100	99.2
阿波おどり	100	99.1
四万十川	99.7	97.9
鳴門の渦潮	99.7	96.9
金比羅宮	100	88.1
道後温泉本館	100	86.2

四国外ではあまり知られていないもの

	認知度(%)	
	四国内	四国外
内子の町並み	87.3	30.2
吉野川のラフティング	74.4	29.0
脇町うだつの町並み	81.0	29.0
イサム・ノグチ庭園美術館	62.7	26.7
大塚国際美術館	77.7	21.3
現代アートの島　直島	69.7	19.1

出典）「四国の観光資源の認知度・体験度並びに四国に対するイメージアンケート」調査結果,四国経済連合会

＜宿泊を伴う国内旅行者意識調査＞

来訪者の満足度 (%)		今後の来訪意向 (%)	
1位　沖縄県	88.7	1位　北海道	42.0
2位　北海道	84.9	2位　沖縄県	24.9
3位　京都府	84.3	3位　京都府	11.0
4位　宮崎県	83.0	4位　東京都	8.7
5位　大分県	82.9	5位　千葉県	8.3
6位　長崎県	82.7	6位　長野県	6.1
7位　石川県	80.9	7位　神奈川県	5.7
8位　熊本県	80.1	8位　青森県	5.5
9位　宮城県	79.8	9位　鹿児島県	5.3
10位　三重県	79.6	10位　大阪府	5.0
16位　愛媛県	77.6		
20位　高知県	76.7		
35位　香川県	71.5	35位　高知県	1.6
41位　徳島県	68.6	39位　香川県	1.0
		39位　愛媛県	1.0
		44位　徳島県	0.8

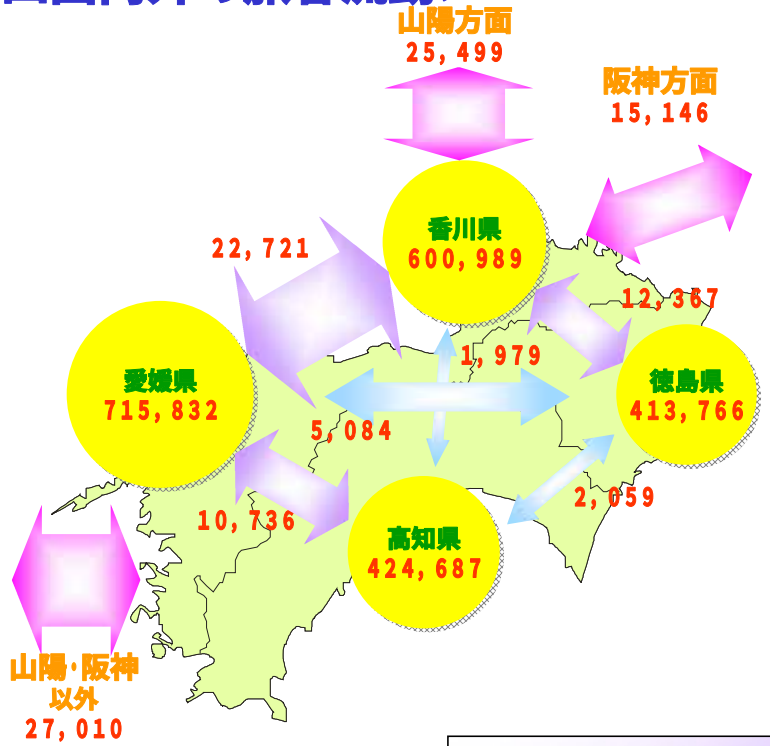
出典）じゃらん宿泊旅行調査2006より

2.四国の課題

● 四国内の結びつきの弱さ

・旅客流動は県内が9割以上を占め、四国内県間よりも四国外流動が多い。
・四国内の移動が少ない
・貨物流動についても、四国内県間よりも四国外流動が多い。

＜四国内外の旅客流動＞



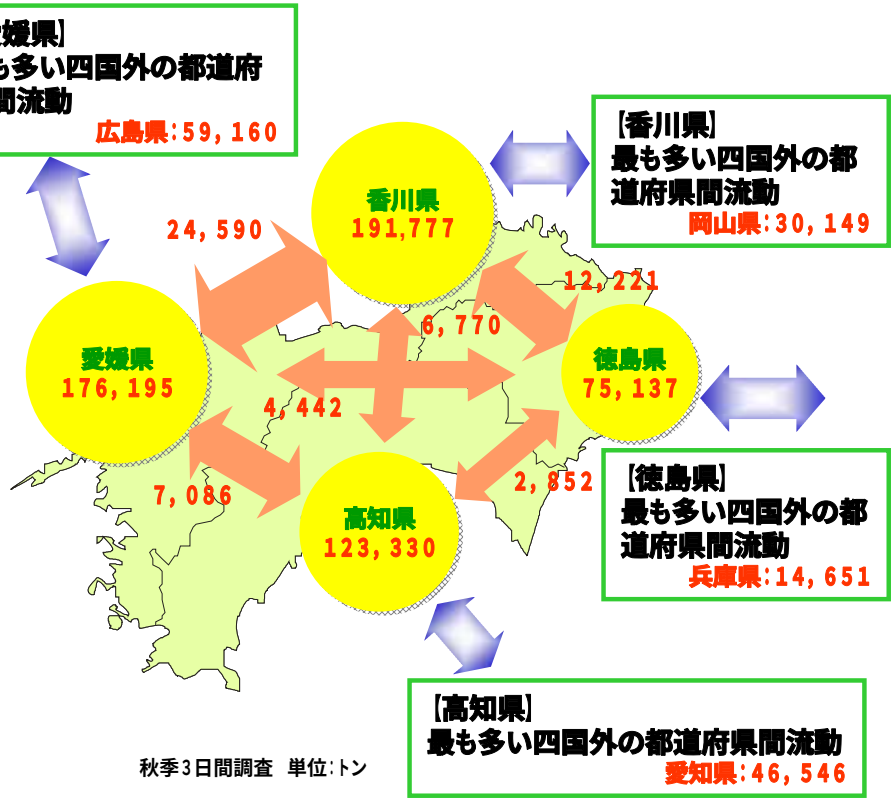
	流動（千人）	割合（%）
県内	2，155，273	94.6
四国内県間	54，945	2.4
四国外流動	67，655	3.0
合計	2，277，873	100.0

①旅客流動の95%が県内流動
②四国4県相互の県間流動よりも四国外との流動の方が大きい（3%）

四国4県は、四国内より四国外を向いている

資料）「旅客地域流動調査（国土交通省／H7～12年度の平均）より作成（単位：千人）

＜四国内外の貨物流動＞



秋季3日間調査　単位：トン

資料）国土交通省　第7回全国貨物純流動調査（物流センサス）（2000年）

2. 四国の課題

●四国内の結びつきの弱さ
・四国内の人も体験が少なく、あまり四国内を見ていない。

うだつの町並み（徳島県）

大塚美術館

吉野川のラフティング

香川県直島

＜四国内住民の認知度・体験度＞

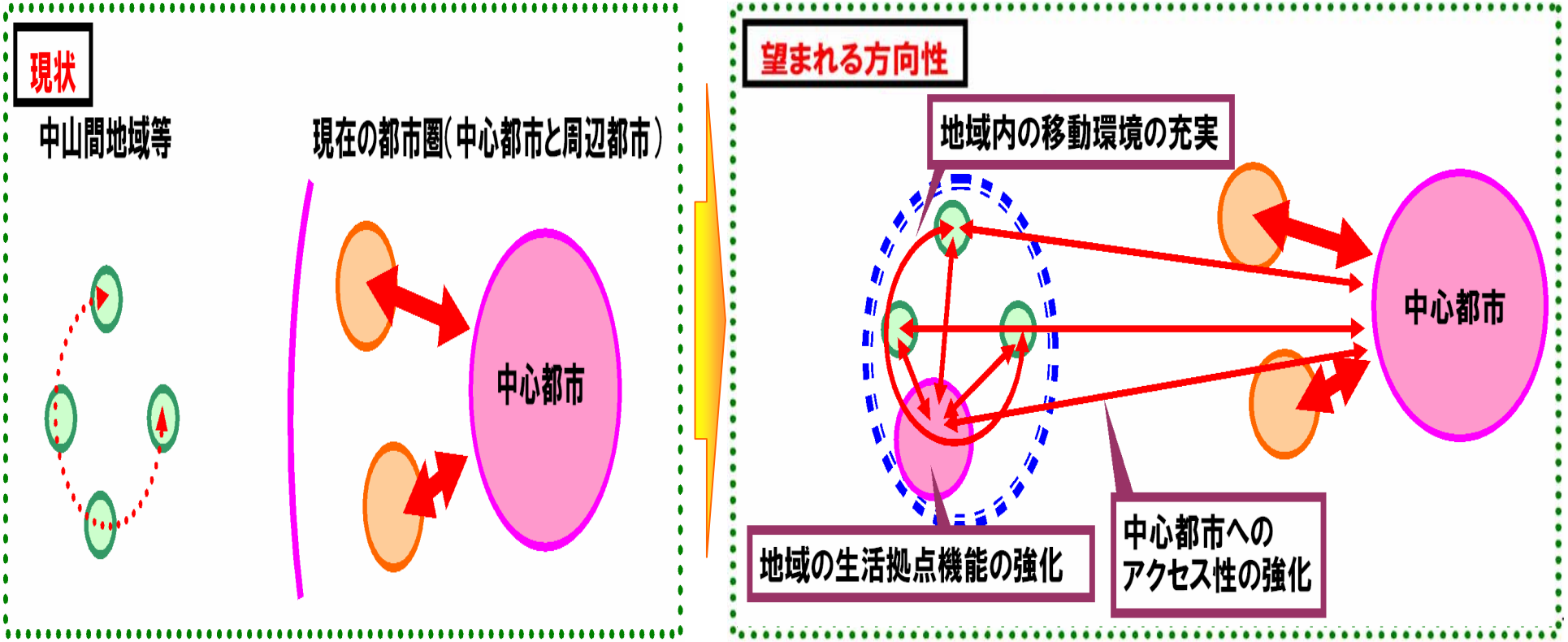
	認知度(%)	体験度(%)
内子の町並み	87.3	47.5
吉野川のラフティング	74.4	5.7
脇町うだつの町並み	81.0	41.1
イサム・ノグチ庭園美術館	62.7	5.7
大塚国際美術館	77.7	23.0
現代アートの島 直島	69.7	13.6

出典）「四国の観光資源の認知度・体験度並びに四国に対するイメージアンケート」調査結果,四国経済連合会

四国における一体性の必要性

●都市部と中山間地域との交流・連携

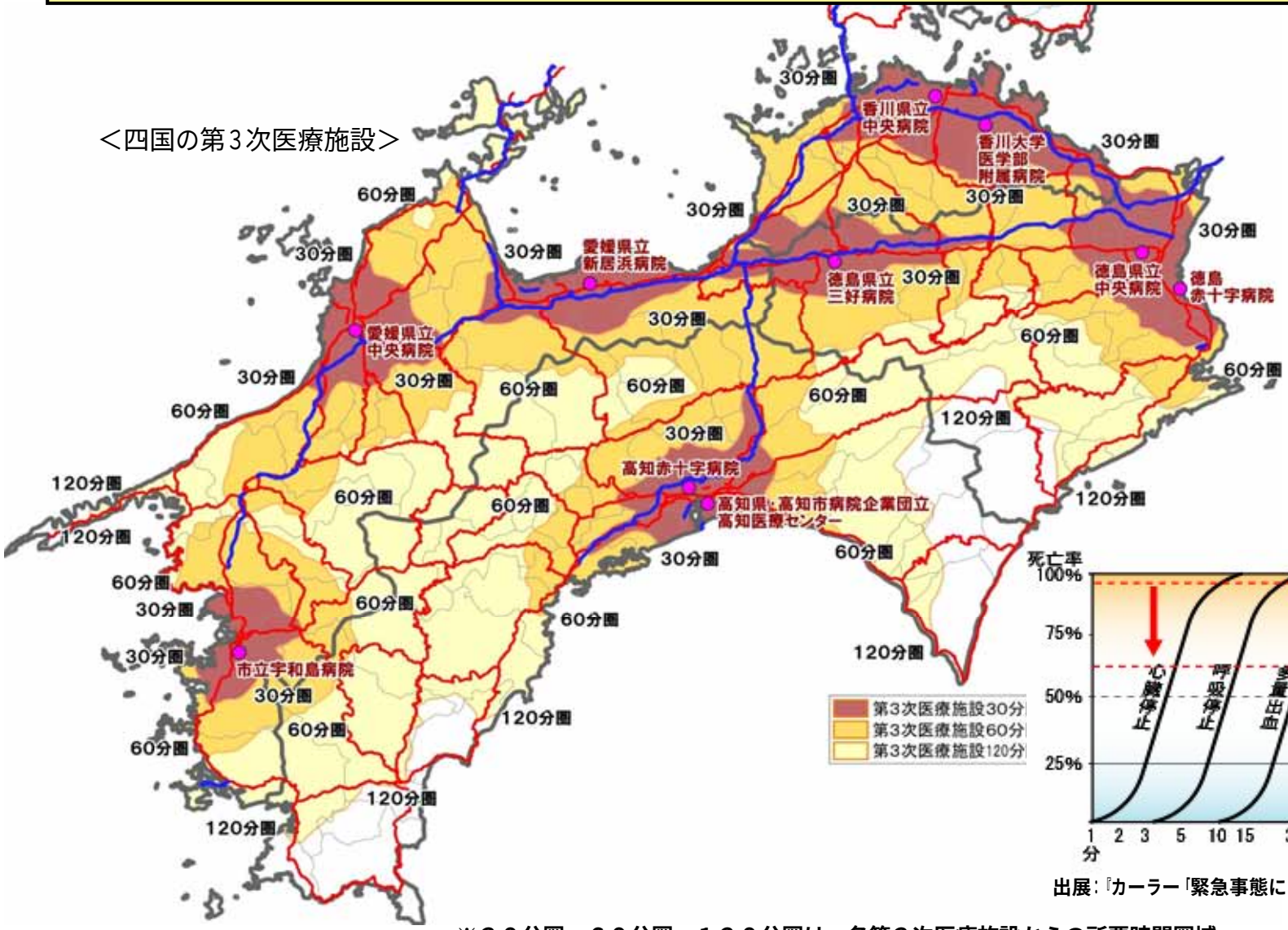
・集積のメリット ⇒ 中山間地域における安心・安全の確保、日常サービスの確保

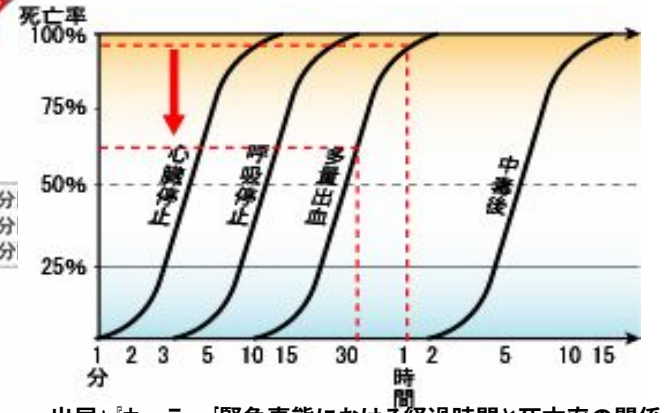


四国における一体性の必要性

●地域における安全･安心の確保
・第３次医療施設へのアクセス性を高める必要がある。

＜四国の第３次医療施設＞





出展:『カーラー「緊急事態における経過時間と死亡率の関係」』

※３０分圏、６０分圏、１２０分圏は、各第３次医療施設からの所要時間圏域

四国における一体化の必要性

●地域における安全･安心の確保
･中山間地域を中心に産婦人科の無い自治体が２３自治体ある。

＜四国における産婦人科の存在しない市町村＞

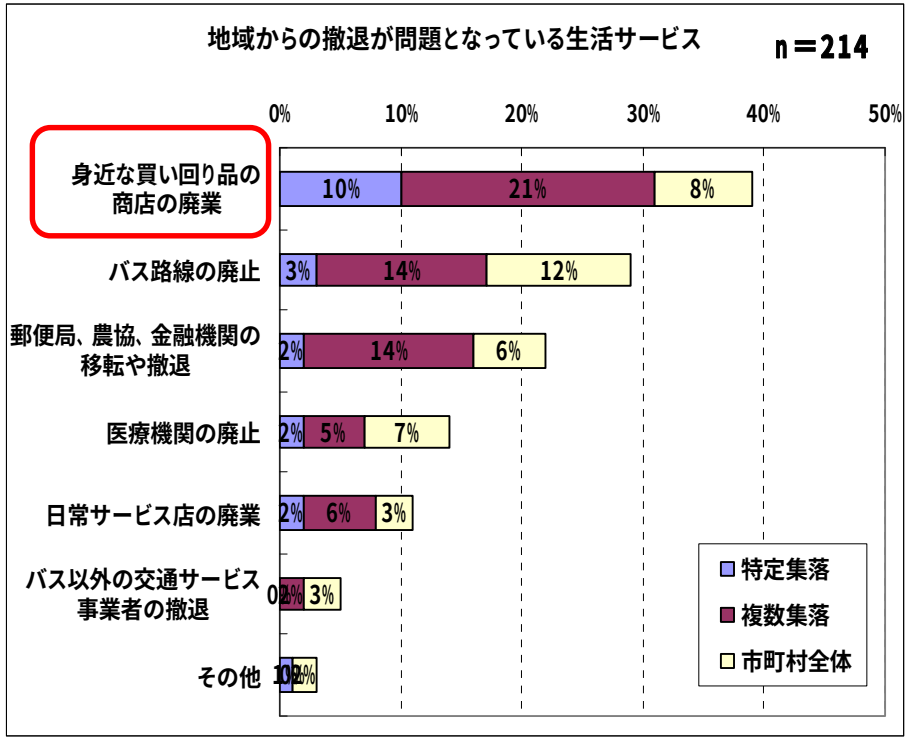
※３０分圏、６０分圏は、各県庁所在地からの所要時間圏域

四国における一体化の必要性

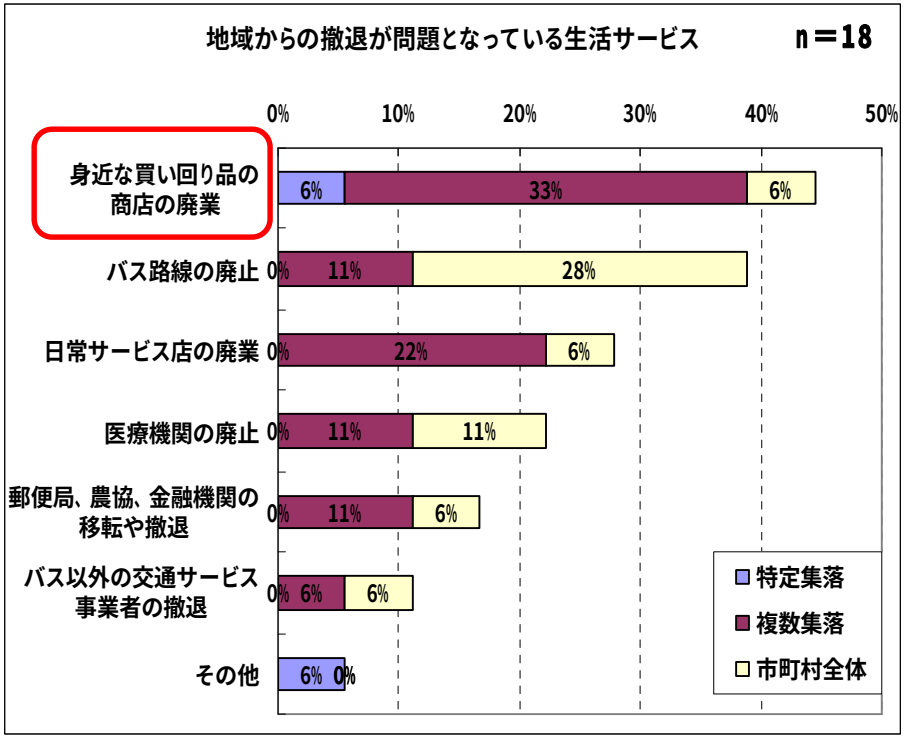
●日常サービスの確保

・全国に比べ、撤退により問題となっている生活サービスの値が各項目ともに高い。生活サービスを受けられず、最低限の暮らしができない危機的な状況がみられる。

【全国】



【四国】



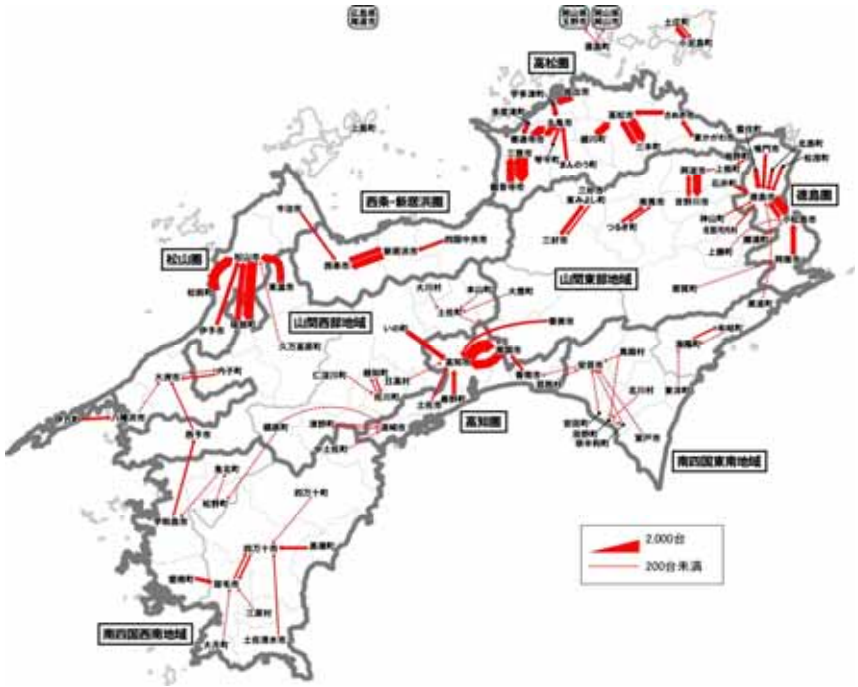
注）
特定集落‥市町村内の特定の集落で問題化
複数集落‥市町村内の複数の集落で問題化
市町村全体‥市町村全域で問題化

出典）「集落消滅の可能性がある」と回答した市町村に対する追加アンケート調査結果（2005年2月）をもとに作成

四国における一体性の必要性

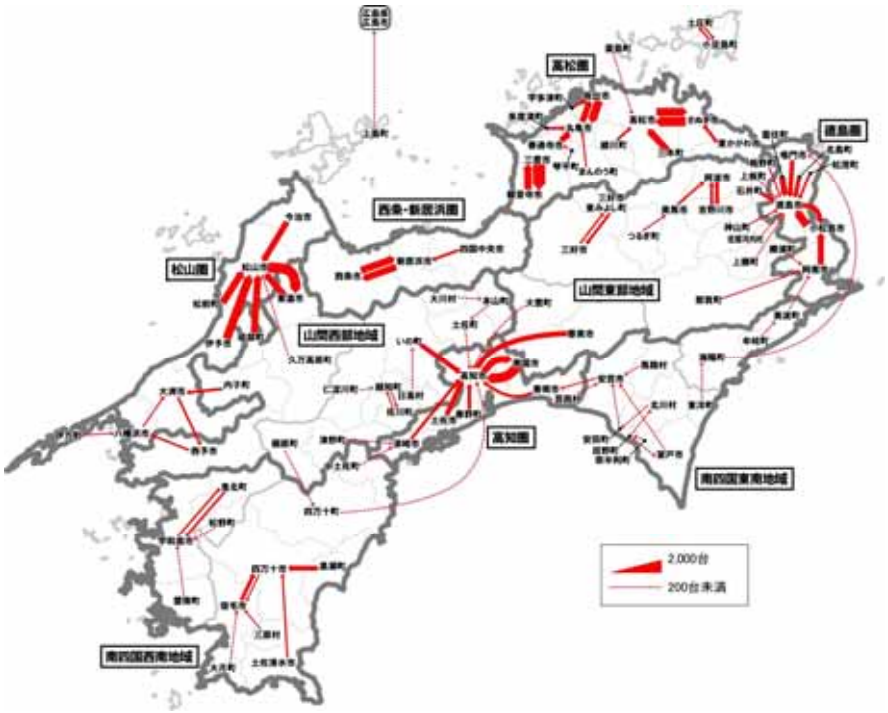
● 日常サービスの確保
・日常生活及び余暇活動では都市圏とその周辺地域との結が強い。

＜家事･買い物目的自動車流動
（市町村別第１位流動）＞



資料）H11道路交通センサス

＜社交･娯楽･観光等目的自動車流動
（市町村別第１位流動）＞

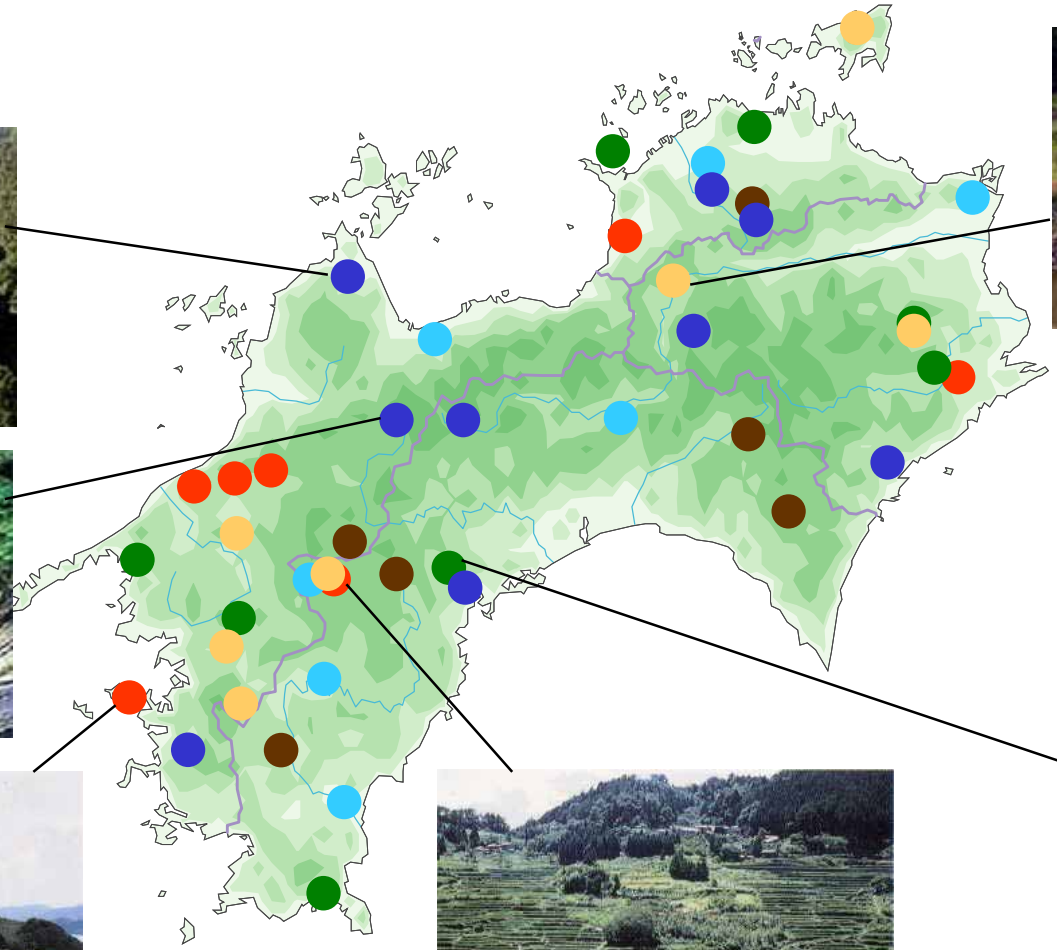


資料）H11道路交通センサス

四国における一体性の必要性

●地域資源が活かされていない

・四国の中山間地域には、多くの地域資源が存在する。



●美しい日本のむら100選

●水の郷100選

●森林浴の森100選

●森の巨人たち100選

●水源の森100選

●日本の棚田100選

四国における一体性の必要性

●地域資源の再発見と活用

・地域資源を活かし、四国外で知名度を高めて全国展開

【事例】ゆずビジネス（徳島県馬路村）

・地元の特産であるゆずを用いた様々な加工品開発と、全国規模での販売展開で売上げを伸ばす。

✓新市場での積極的なマーケティング

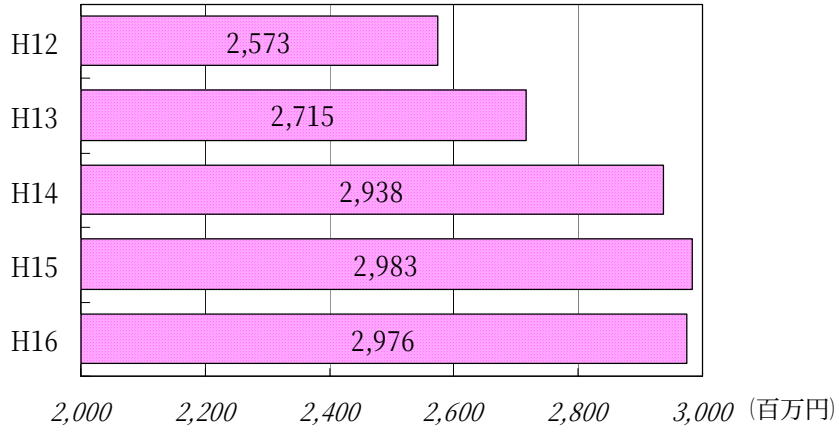
新しい市場を求めて関西や関東の百貨店催事に参加。販売促進へ。

✓直接販売・産地直送

大手宅配業者の参入により、村からの産地直送が可能。

✓ローカル色を生かしたブランド化

ゆずの加工品を商品化。商品企画・デザインは外部の企業に委託。商品イメージを『ローカル色』とした。



JA馬路村の売り上げ推移

出典：農林水産省

ゆずビジネスの商品の一例

地域資源の再発見と活用

●地域資源の再発見と活用

・3つの古い町並みを一体として紹介することにより大きな効果
・高速道路南予延伸との相乗効果により入込客数が増加
四国横断自動車道西予宇和～大洲北只間の開通にあわせ、南予地方を中心として「えひめ町並博2004」が開催。
高速道路の開通により、「南予」地域へのアクセスが向上し、地域の特色を生かしたイベントや古い町並へ、多くの人々が訪れました。

内子町

大洲市

宇和町

3つの古い町並みを「えひめ町並博」として一体的に紹介

えひめ町並博2004の開催結果

町並博イベントへの集客数……約174万人

開催期間中の南予への入込み客の増加数推計……約115万人

入込み客数の対前年同期に対する増加率推計……29.3%増加

経済波及効果……約87億円

（愛媛県町並博2004実行委員会調べ）

四国における一体性の必要性

●心の癒しや、自己鍛錬･人材育成の場としての活用

･遍路によるつながりや歴史上のつながりなど、独自性の高い文化を内包しており、これらの資源を活かした交流･連携により一体性を高める。

･人材育成の場としての活用

遍路道でも四国が一体化

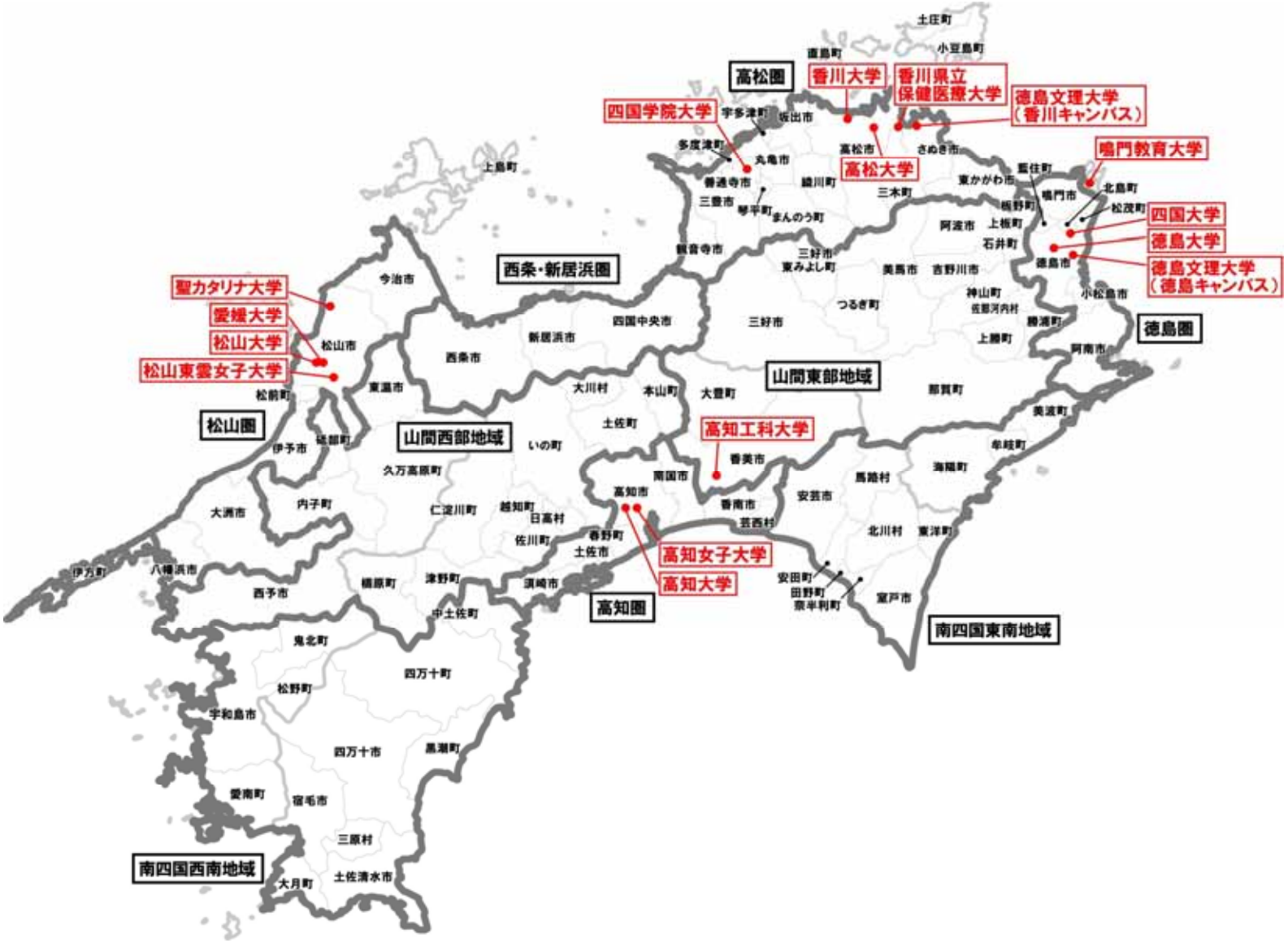
1番霊山寺

88番大窪寺

43番明石寺

四国における一体性の必要性

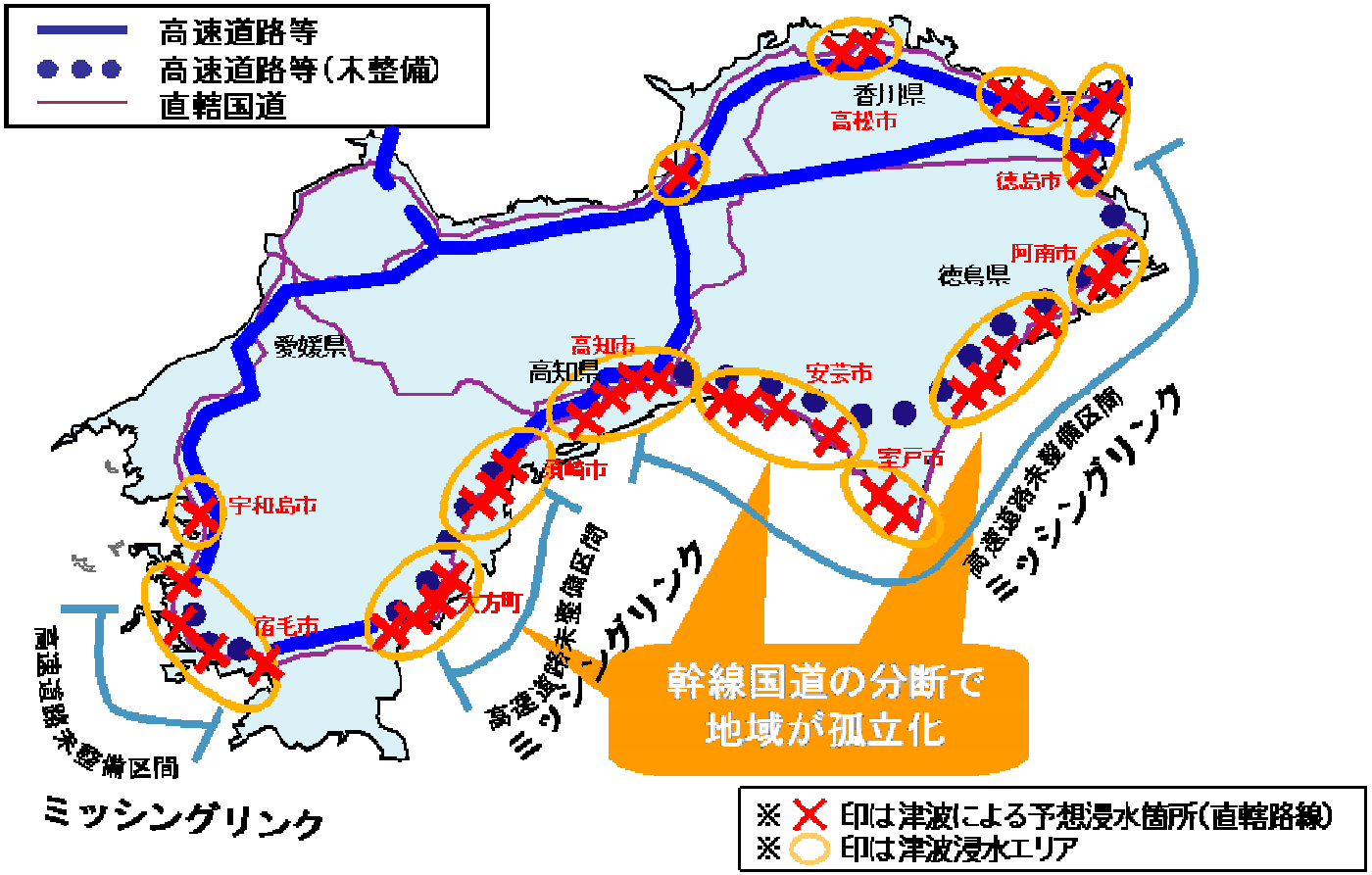
●地域における人材育成
　・大学相互の連携、一体化による教育の展開



①安全安心の確保

安全・安心の確保

・高速道路空白地帯の「安心」と「活力」の両面を支える「四国８の字ネットワーク」の早期形成に向けて重点的な整備を推進。



地震による津波の予想浸水箇所は、ミッシングリンク（高速道路等未整備区間）に集中。

①安全安心の確保

地域との相互連携

・東南海・南海地震や台風・豪雨等による津波、洪水等の水害や土砂災害等の災害頻発箇所の解消、被害の最小限化を図る。

・災害時の道路ネットワークの強化を図る。

・防災訓練の実施や防災関連機関の連携・イベントを開催し、防災に関する知識の普及・啓発を図る。

＜大規模津波防災総合訓練の取り組み＞

▲関係機関が保有する情報を拠点へ集約する訓練

▲トラック協会等と連携した緊急物資の搬入訓練

＜防災関連機関の連携＞

▲四国防災トップセミナー

①安全安心の確保

自然との調和

・これからの四国の社会基盤の整備においては、四国の誇るべき自然環境や景観を重視し、周辺の自然や景観にとけ込んだ整備となるよう配慮。

日本最古のマルチプルアーチダム（多連式）

豊稔池堰堤　（観音寺市）

大洲城をイメージした自然石張り堤防護岸

肱川枡形地区
（ますがたちく）
修景護岸
（大洲市）

②人の交流・連携（開かれた知の創造・人材育成）

● 時代を先取りするライフスタイルの創出

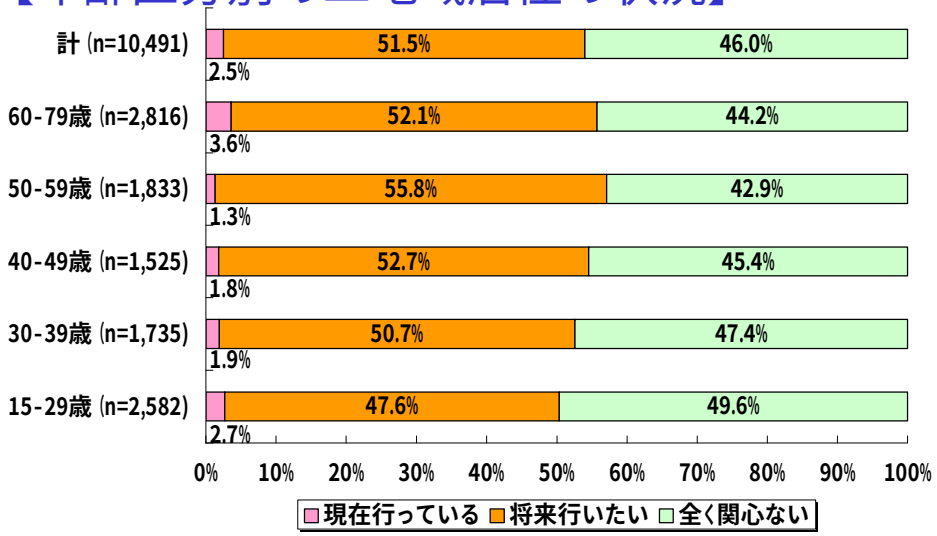
●都市圏と中山間地域の近さを活かした連携強化・相互活性化

・都市と中山間地域の近さを活かした、機能分担と相互交流を推進する。

・団塊の世代などをターゲットとした定住促進、二地域居住（マルチハビテーション）や田舎暮らしなどの様々なライフスタイルニーズへの対応を図る。

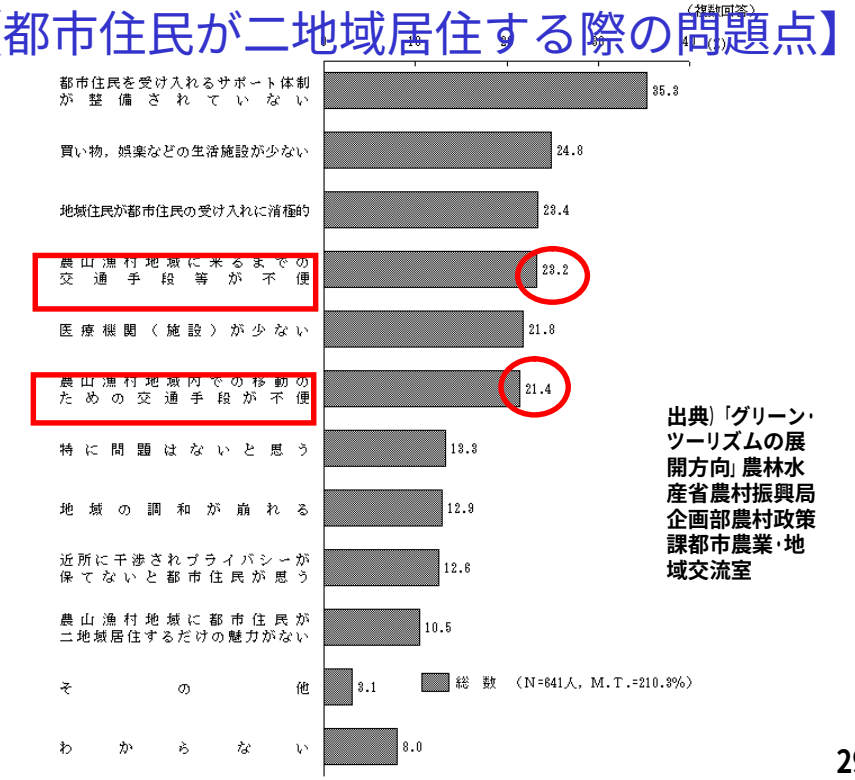
＜「二地域居住」に対する都市住民のニーズ＞

【年齢区分別の二地域居住の状況】



出典）「二地域居住」に対する都市住民アンケート
（国土交通省国土計画局総合計画課：平成１６年１２月実施）
注）都市住民の定義：「人口30万人以上の都市」（2005年の15－79歳人口　約4,250万人）
アンケート有効回答数：10,491人

【都市住民が二地域居住する際の問題点】



出典）「グリーン・ツーリズムの展開方向」農林水産省農村振興局企画部農村政策課都市農業・地域交流室

②人の交流・連携（開かれた知の創造・人材育成）

新しい価値観・開かれた考え方を持った「新たな公」の育成

多様な主体の連携・協働による個性ある地域づくりの推進

・既に活発なボランティア活動などの住民活動をさらに広げ、「自らの地域のことは地域で取り組む意識・姿勢」を醸成し、地域づくりを牽引する人材を育てる。

・多様な主体の活動・連携・協働を支えるインフラ整備や仕組みづくりなどによって、地域の豊かな資源を活用した個性的な地域づくりを推進する。

＜これからの地域づくりの方向性＞

○価値観、生活様式の多様化

★「生産・仕事・会社」から、「生活・趣味・家庭」へ地域づくりのキーワードは、「産業・企業」から「生活・暮らし」へ

★「ものの豊かさ」から、「心の豊かさ」へ

如何にして心の充実した暮らしを実現するか？

↓

○「住んで良し、訪れて良し」の地域づくり（住観調和）

★自分たちが気持ちよく生活できる場所こそ、訪れる人にとっても魅力的

↓

○豊かさの原点

★いかにして心の充実した暮らしを実現するか？

⇒安心して日々を過ごせること、自分の土地を愛し、誇りに思えること

↓

○個性と特色のある地域づくり

★全国一律・画一的な整備から、多様な主体の参加と連携による地域の自発的な取り組みへ

②人の交流・連携（開かれた知の創造・人材育成）

新しい価値観・開かれた考え方を持った「新たな公」の育成

『クリーンアップ神山』

日本初のアドプト・プログラム
（徳島県神山町、１９９８年～）

取組内容

★個人、企業、団体が割当を受けた道路区間 の清掃を定期的に 実施
★行政は活動をサポート
（ゴミ袋、手袋の支給、ゴミの処分等）

取組効果

★住民の環境保護意識の高揚
★神山町の道路から散乱ごみを一掃
★ごみ拾集にかかわる費用（税金）が節約
★清潔で美しい町としてのイメージが観光面でもプラス

・活動団体：１６団体（ﾎﾞﾗﾝﾃｨｱ11、地元企業3、他2）
・登録人数：約４００名　（平成14年7月）

「新町川を守る会」の取り組み

取り組みの特徴

☆徳島市の「ひょうたん島※」を囲む新町川と助任川のほか、吉野川の清掃
☆吉野川の水源地である高知県大川村での山林の植樹活動
☆ひょうたん島周遊船、吉野川クルージングの運行
☆観月演奏会、あじさいライトアップ等観光イベント

※ひょうたん島

市内中心部を流れる新町川と助任川で囲まれた中州。ひょうたんの形に似ている。

③地域資源の交流・連携（地域資源の再発見と活用）

歴史的・文化的な地域資源の価値の再発見

四国固有の精神に基づく「四国ふるさと普請」

活動の交流　「地域での会」開催

ねらい①　継続
⇒これまでの活動、今後の活動をつなぐ

ねらい②　つなぐ
⇒様々な人と人、団体間との交流を促進する

ねらい③　担い手づくり
⇒次代のリーダー発掘、担い手を育成する

地域づくり活動団体が主体の会で、
意見交換、情報交換を実施

H18.10.22開催

神山アーティスト・イン・レジデンス
（オープンアトリエツアー）

H18.12.2開催

四国ふるさと普請　in　直島
（夜なべ談義で活動の悩み解決）

H18.11.26開催

南予はおいしいぞ　in　岩松
（町並み保存活動の中心、酒蔵で交流）

H18.10.21開催

風景を活かした地域づくりフォーラム
（風景から地域の魅力再発見）

情報の交流

四国ふるさと普請ＨＰ

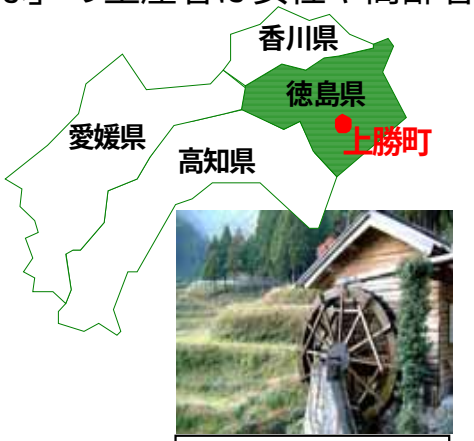
地域づくりの情報発信、情報共有、
意見交換の場を開設

ホームページ　コンテンツ
- ・ネット座談会
- ・最新イベント情報
- ・活動団体のＰＲ
- ・四国の元気人紹介

③地域資源の交流・連携（地域資源の再発見と活用）

地域資源を活かした特色ある産業・コミュニティー

高齢化率４４％、徳島県１位（２０００年時点）、徹底的に地域資源（人、物）を活用しており、地域資源を活用した第三セクター会社が町内に５社あり全て黒字経営で年間の売り上げは３０億円。「葉っぱ」の生産者は女性や高齢者が主体。ＩＴを活用して自ら情報分析することで、高齢者の生き甲斐に。

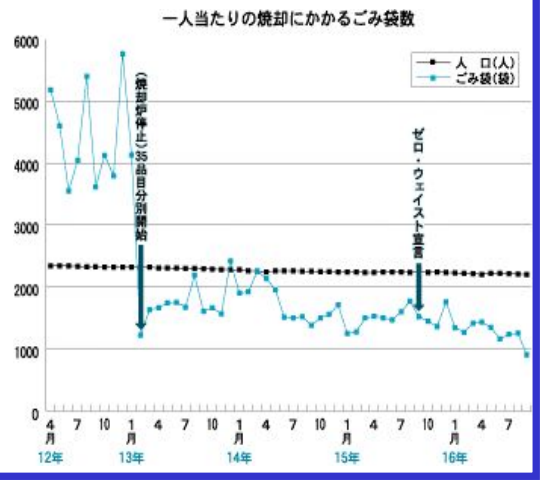


総面積：109.68km²

総人口：2,142人

上勝町ごみゼロ（ゼロ・ウェイスト）宣言

平成13年：焼却炉を停止し35品目分類を開始
平成15年：上勝町ごみゼロ（ゼロ・ウェイスト）を宣言。
2020年までに上勝町のゴミを0に
↓
・上記の取り組みにより、ゴミの量が大幅に減少。
・町のイメージアップや視察者の増加による経済効果を誘発



「株式会社いろどり」の活動

昭和61年より事業化。

上勝町に豊富にある「葉っぱ」を商品化し、料亭などへの販売に成功

農産物の販売に関する業務の他、

・建築土木資材用木材加工品の販売に関する業務
・観光案内に関する業務
・販売・経営合理化に関するコンサルタント業務

等も手がける。

④域内の交流・連携（多様な地域間の交流・連携の強化）

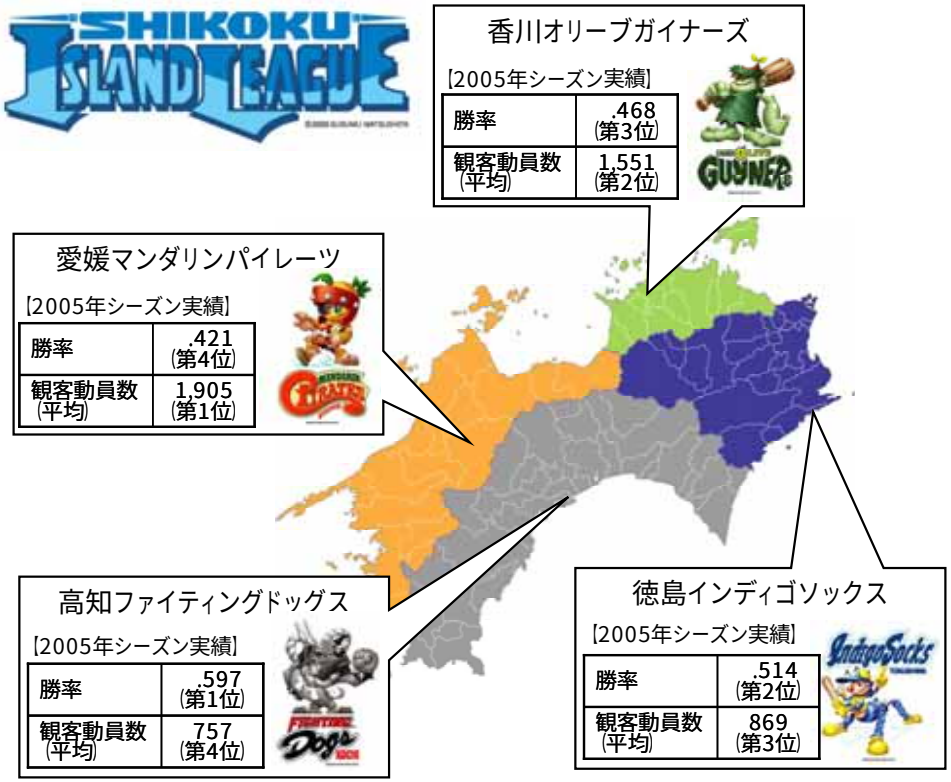
都市間連携の強化

都市相互の近さを活かした地域連携の強化

・隣接都市間における機能分担等による地域レベルでの機能強化を図る。

・都市圏相互の経済・産業面での結びつきを強化するとともに、アイランドリーグなどの新たな文化の創造による交流・連携を促進する。

＜新たな文化による結びつき＞
（アイランドリーグ）



資料）四国アイランドリーグ公式HP
球探・日本プロ野球史探訪倶楽部 HP

＜「四国はひとつ」4県連携施策の取組み＞

分野	平成19年度「四国はひとつ」4県連携施策
観光・PR・イメージアップ	・いやし・遍路の共同PR ・四国観光シンポジウム開催 ・グリーン・ツーリズムのメッカとしての四国のPR ・国際観光の推進 ・“癒しの国・四国”交流・定住促進事業
文化・スポーツ	・四国アイランドリーグ優秀選手表彰 ・発掘へんろ巡回展の開催 ・地域密着型スポーツの振興 ・「四国八十八箇所霊場と遍路道」の世界遺産暫定リスト掲載に向けての調査等
環境・自然保護	・四国山の日推進事業・四国の森づくり連携促進事業 ・環境教育の合同事業 ・四国における循環型社会構築の検討 ・地球温暖化防止活動施策の共同研究
防災・救急	・四国4県による衛生環境研究所の連携 ・防災用資機材の共同整備 ・危機事象発生時の広域応援に関する検討
医療・福祉	・高齢者虐待防止四国共同研究会 ・看護師養成通信制受講の促進 ・育児支援サービスを実施する店舗・企業の登録・PR事業
産業振興	・四国農林水産物等輸出促進海外PR事業 ・四国4県「工業技術センター」の情報の一元化
消費者保護	・悪質商法被害防止広域ネットワーク
社会資本整備	・四国8の字ネットワークの整備と利用促進
連携総合	・県有施設等の広域連携に関する検討 ・四国4県道州制研究会

資料）四県知事会資料

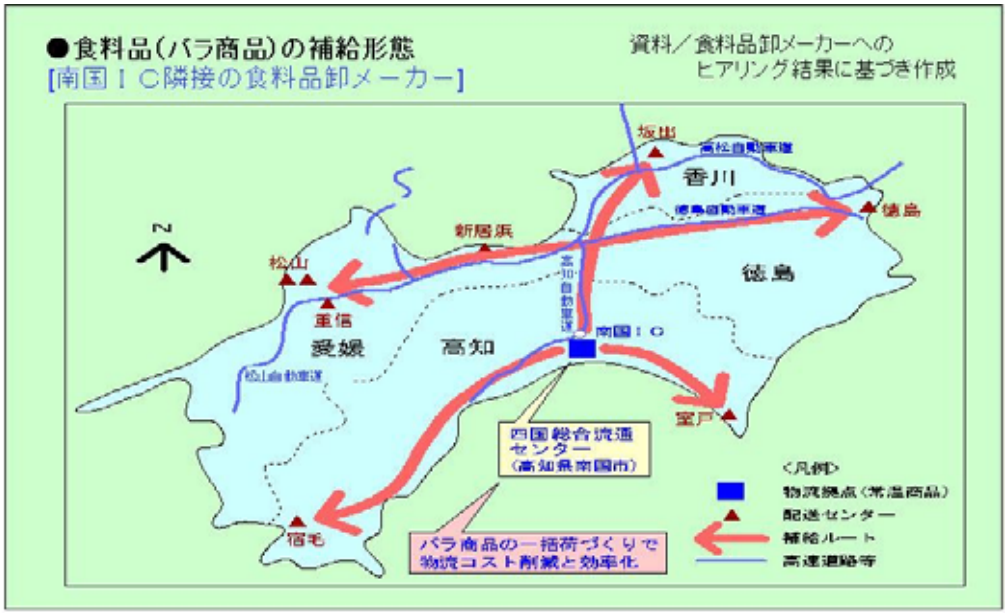
④域内の交流・連携（多様な地域間の交流・連携の強化）

都市間連携の強化

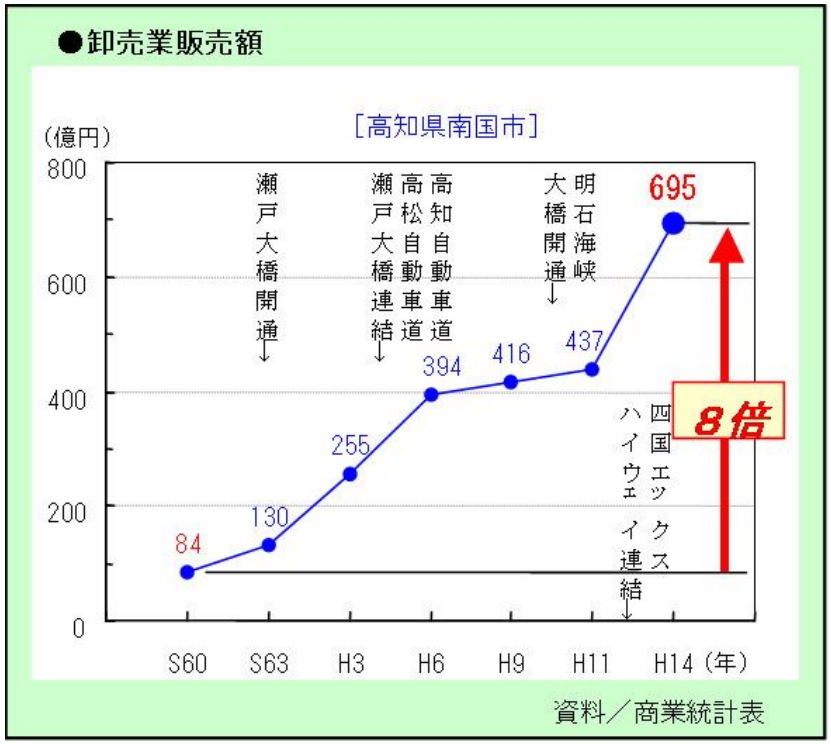
都市相互の近さを活かした地域連携の強化

・物流拠点への連携強化により、経済活動の活性化を図る。

＜経済活動の結びつき＞



【事例】ＩＣ隣接地に流通センターが開設され、卸売業販売額が大幅に増加

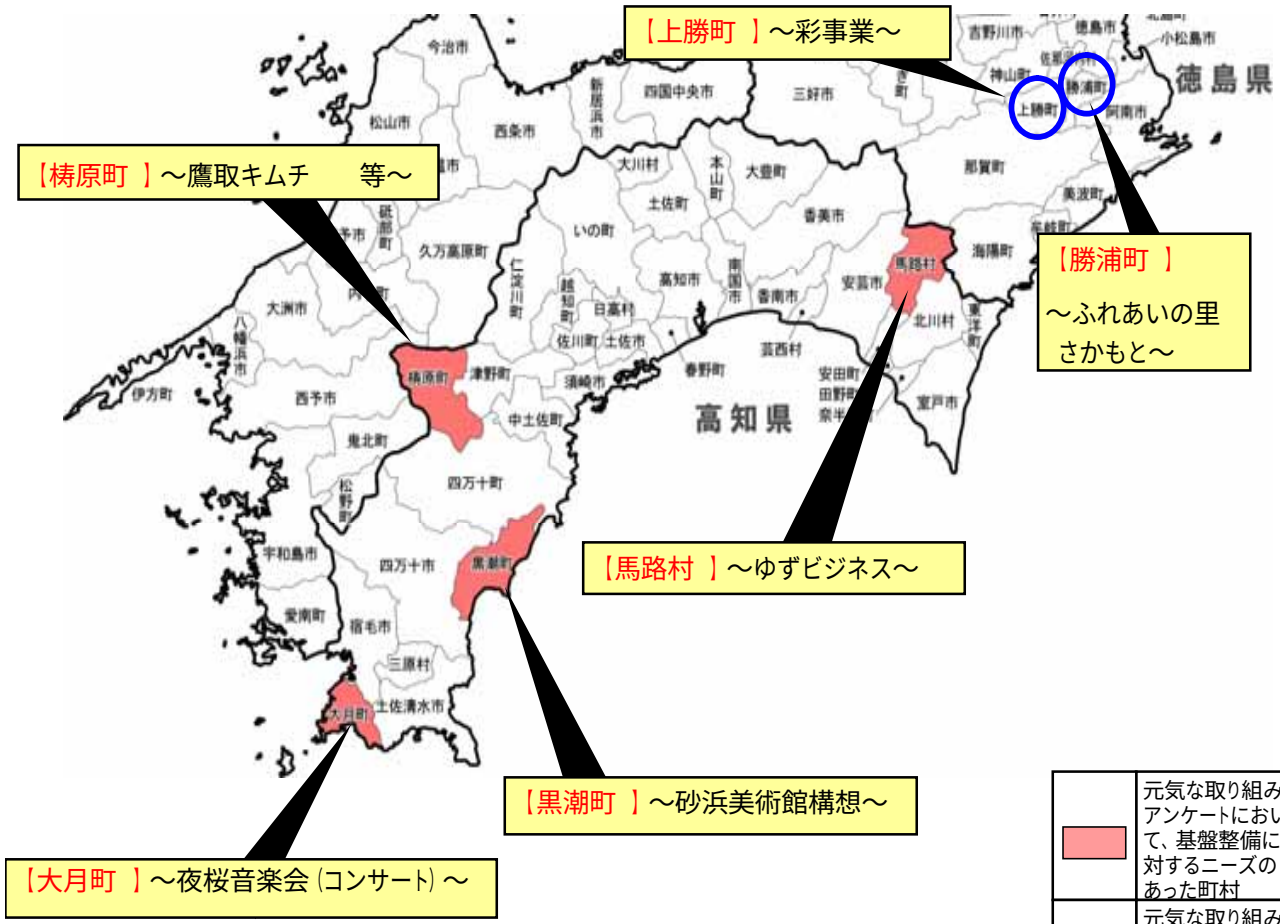


・高知県の総合食料品卸メーカーは、南国IC隣接地に流通センターを開設
・少量注文の「バラ商品」を一括仕入れ・仕分け・荷づくりし、翌早朝までに毎日欠かさず４県内の配送拠点に補給
・IC周辺に各種卸売業が集積し、南国市の卸売販売額も８倍に急増

出典：国土交通省道路局ＨＰ（道路整備効果事例集）

④域内の交流・連携（多様な地域間の交流・連携の強化）

＜四国の「元気活動」とそれを継続・発展させていくための取組＞



資料）元気な取り組みアンケート（四国地方整備局）

≪その他の声≫

【梼原町　中越町長】

・道路と情報網を整備することで、庁内の集落を結んで福祉・経済の活動を支援すべき。

【安芸市の農家】

・道路整備により、農作物の傷みが軽減され、新鮮なまま出荷を行うことで、作物の価値を維持することができる。

中山間地域等では、地域の様々な活動のニーズに対応することにより、道路と情報のインフラ整備が活かされる可能性が高い。

④域内の交流･連携（多様な地域間の交流･連携の強化）

中山間地域における活力の向上

＜望まれる地域像＞

元気な取り組み事例

活用した資源
- 素材をそのまま活性化のツールに
- 発想の転換で、使える資源に

成功の要因
- 地域住民の手による取り組み
- 取り組みのきっかけ、方向性を導く交流・連携
- 内外の協働・連携による取り組みの重要性

（更なる発展に向けた）課題・要望
- インフラ等の整備による支援
- 活動資金の確保
- 将来の担い手の確保

中山間地域の地域像

資源　豊かな資源を新たな発想で活用する

中山間地域の豊かな資源を再認識し、また、潜在資源を発掘し、新たな発想で活用することで、地域の活性化に向けた展開を図る

ひと　地域活動の主役となる人を育てる

自らの地域のことは地域で取組む意識・姿勢を醸成し、地域づくりを牽引する人材の育成を図る

交流　他地域と交流し、地域活動に係る情報を共有･発信する

地域活動に係る新たな発想や課題解決方法等を見出すとともに、活動の周知を図るため、他地域と幅広く交流し、地域活動に係る情報を共有・発信する

支援　地域の取り組みを支える環境をつくる

地域活動の創出及び継続を下支えするインフラ（情報インフラ、道路インフラ等）の充実等を図るなど、地元行政等が取組みを支援する環境づくりを図る

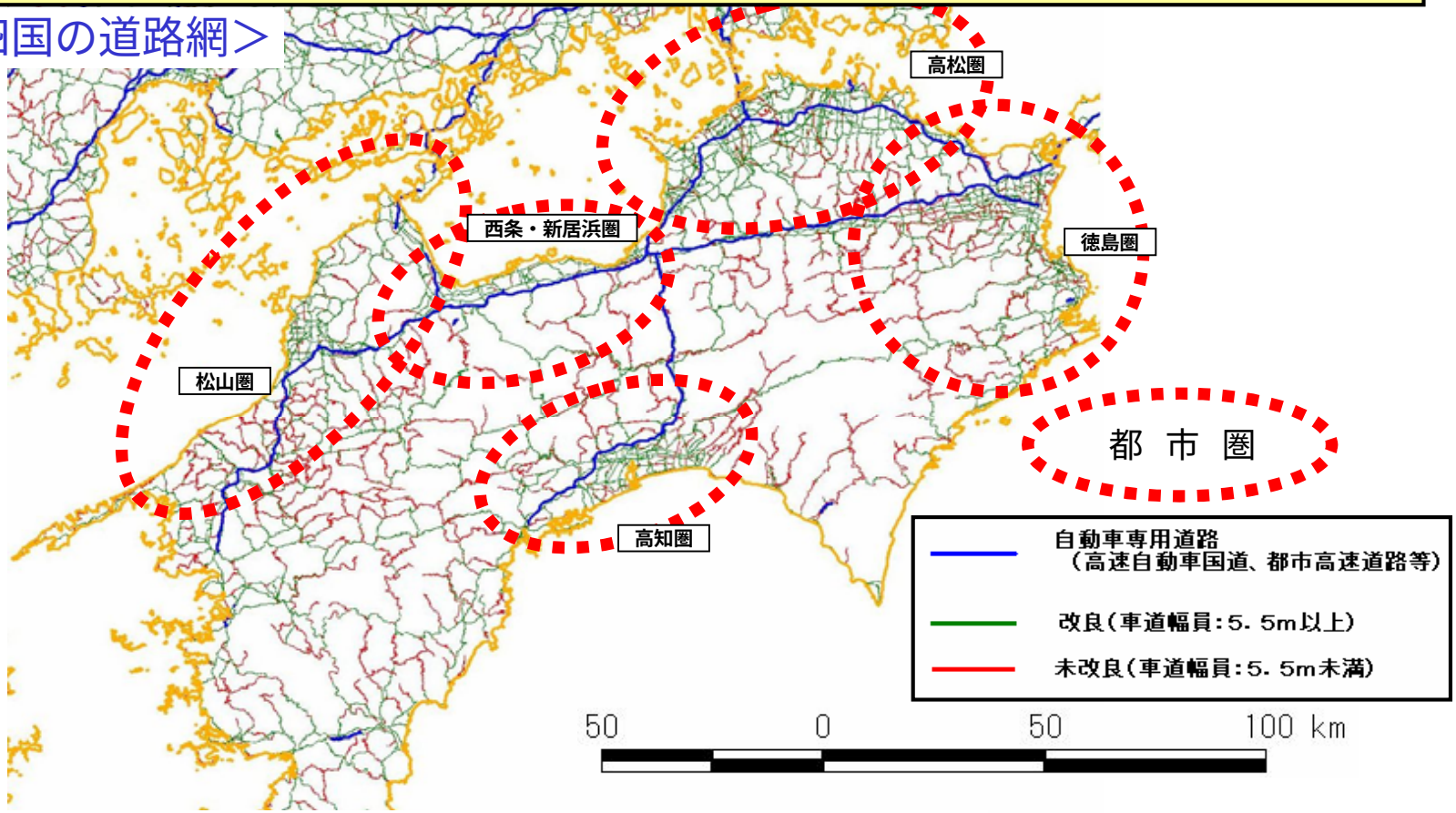
④域内の交流・連携（多様な地域間の交流・連携の強化）

都市と中山間地域における連携の強化

5つの都市圏と中山間地域の近さを活かした連携強化・相互活性化

・5つの都市圏と中山間地域の山村集落とを、高規格幹線道路や国県道等によって結ぶことにより、その交流・連携を促し、一体的な圏域としてのポテンシャルを高める。

＜四国の道路網＞



出典；四国地方整備局（道路整備状況図[県道以上]平成18年4月）

⑤域外との交流・連携（環瀬戸内や世界との交流の促進）

四国外との活発な交流を促す

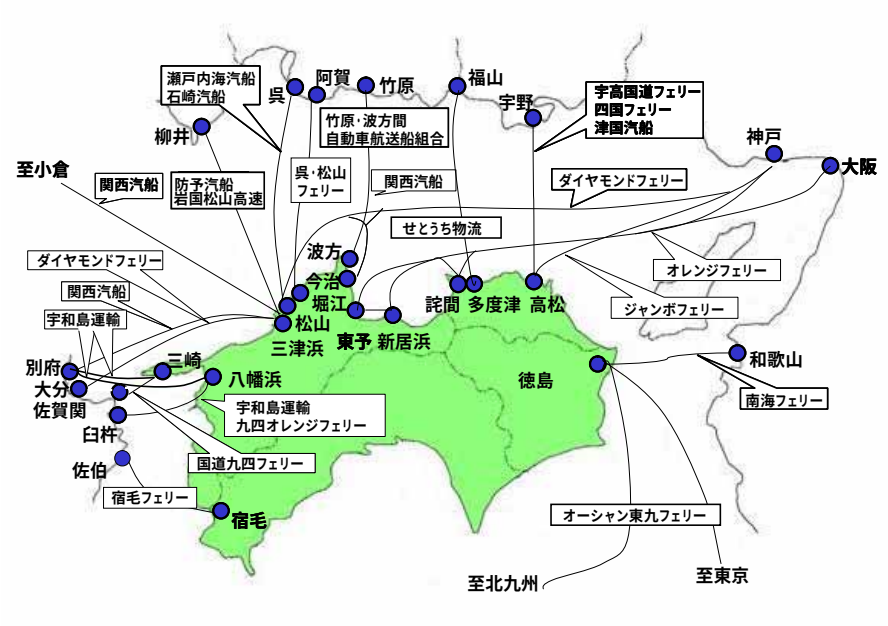
環瀬戸内圏との連携強化

・歴史的、生活・産業などにおける連携を強化する。

・本四架橋を活かした連携強化を図る。

・多島美の景観魅力の維持や水環境の保全、環瀬戸内圏における観光地間ネットワーク強化など、環瀬戸内圏の交流を活用した地域活性化を図る。

＜環瀬戸内を中心としたフェリー航路＞



＜航路の安全確保・海域環境の保全＞

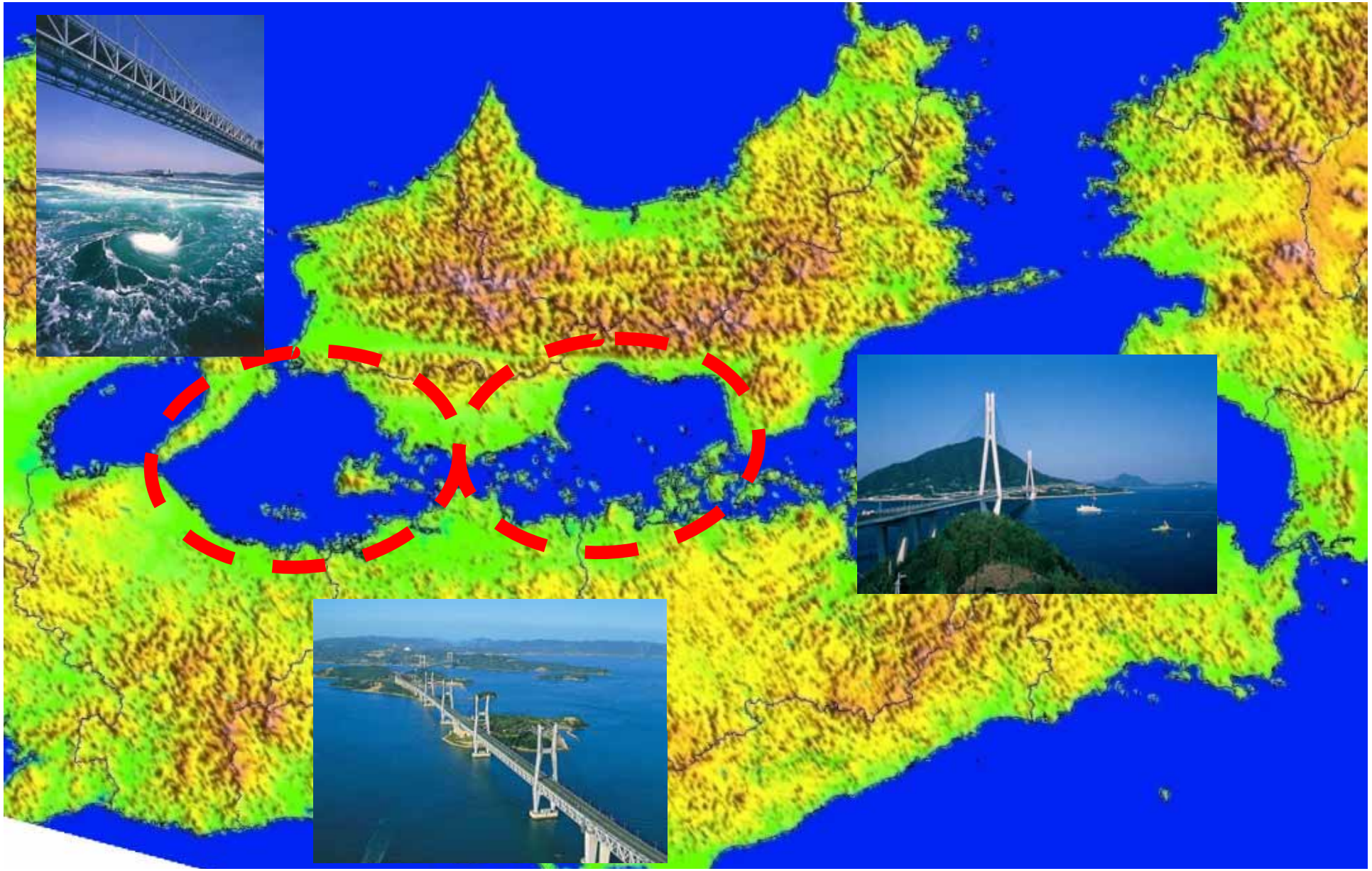
海面清掃船による海洋環境整備事業

船舶航行の安全を確保するとともに、海域環境の保全を図るため、瀬戸内海の海面に浮遊するゴミや油の回収を実施。

出典：四国の港湾・空港ビジョン

⑤域外との交流・連携（環瀬戸内や世界との交流の促進）

海の８の字で交流・連携



⑤域外との交流・連携（環瀬戸内や世界との交流の促進）

四国外との活発な交流を促す

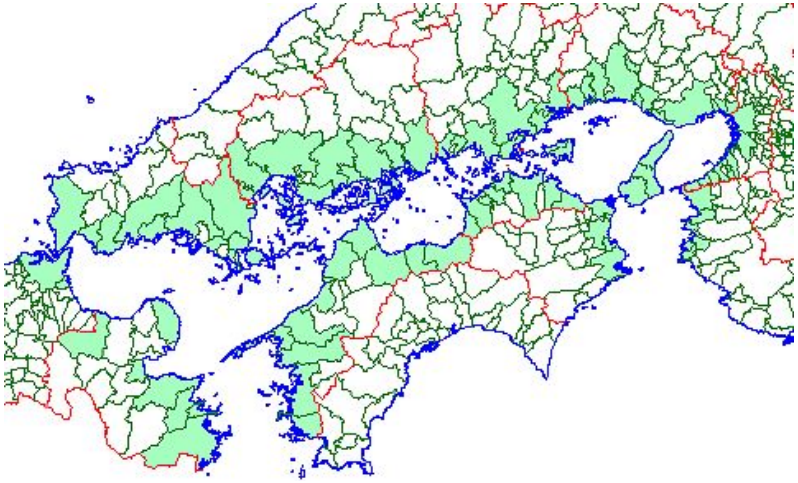
環瀬戸内圏との連携強化

・自治体レベルでの多様な連携・交流活動により、地域活性化を図る。

＜自治体等のネットワーク＞

瀬戸内・海の路ネットワーク推進協議会

瀬戸内海沿岸の107の市町村と11府県の会員に加え、協議会活動をサポートする国土交通省が、あらゆる境を越えて一堂に集まり、様々な交流・連携活動を展開



会員市町村（平成18年11月1日現在）

活動内容（平成18年度の活動を紹介）

魅力検討活動：優れた景観や観光資源のPR、沿岸地域の交流人口増加等を実現するために、アンケート調査の実施

環境事業委員会：瀬戸内海沿岸の美化活動「リフレッシュ瀬戸内」の実施。「海の健康診断」（ゴミの組成調査）事業の実施。

情報発信委員会：瀬戸内の魅力を認識してもらう情報提供を目標に、ホームページの運営

出典：瀬戸内・海の路ネットワーク推進協議会HP

⑤域外との交流・連携（環瀬戸内や世界との交流の促進）

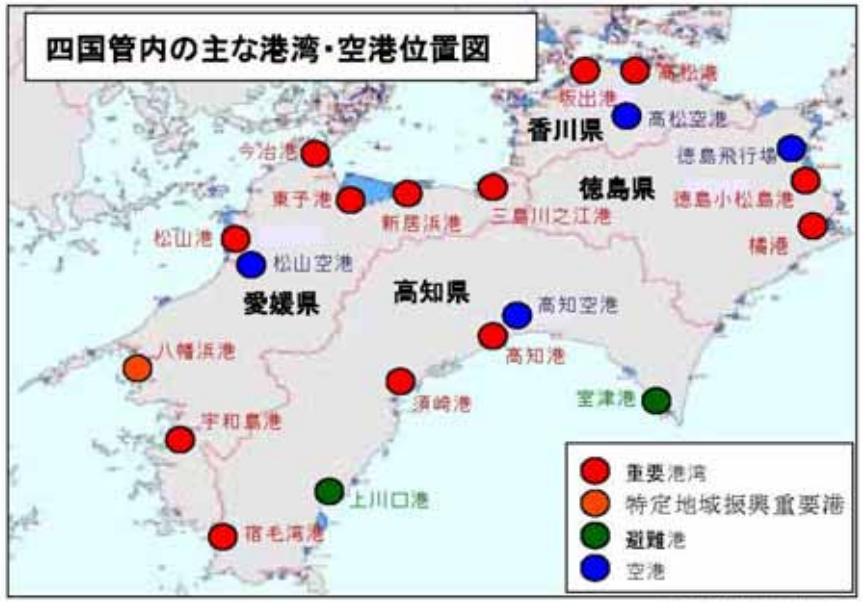
四国外との活発な交流を促す

全国との交流促進

・全国に向けた交流・連携を支える、空港や重要港湾、本四連絡橋等のゲートウエイ機能の強化と相互のアクセス性向上を図る。

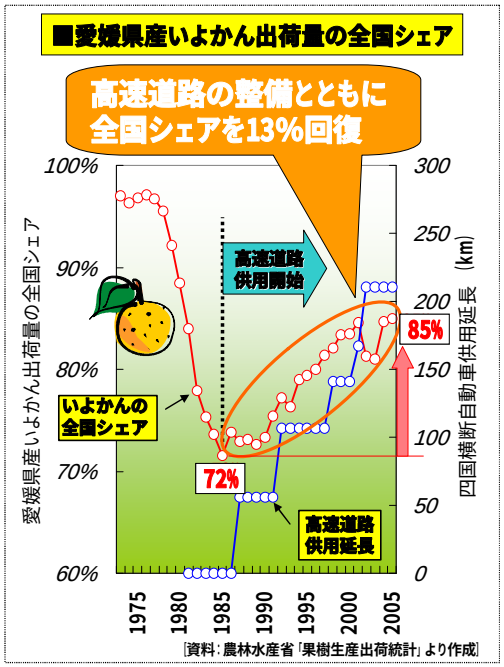
・地域資源を活かした四国ブランドの全国展開を促進する。

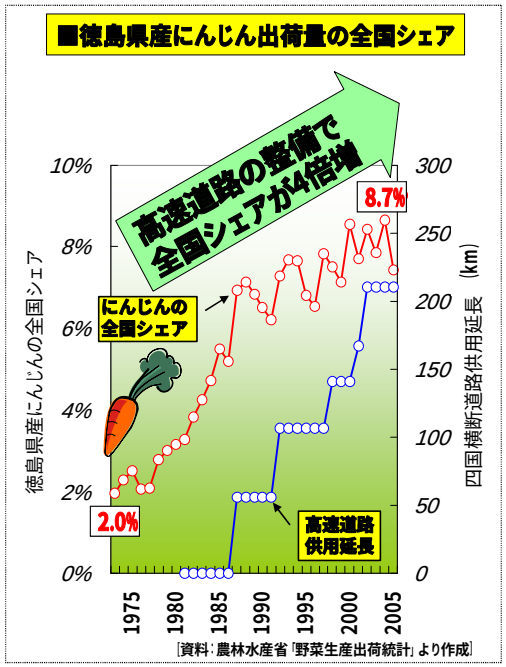
＜４空港と13の重要港湾の存在＞



出典：四国地方整備局

＜高速道路整備による四国ブランド農産品の全国シェア拡大＞





⑤域外との交流・連携（環瀬戸内や世界との交流の促進）

四国外との活発な交流を促す

全国との交流促進

・地域資源を活かした四国ブランドの全国展開を促進する。

【事例】スローフード

・スローフードは1986年に北イタリアの小さな町「ブラ」で誕生した世界規模の運動

＜運動の目的＞

・バラエティ豊かな地域の食を再発見する。

・楽しみながら、人が豊かに、そして平和に生きていくうえで欠かすことのできない「食の喜び」を取り戻す。

＜大きな3つの方針＞

①昔からある食文化を守る

②昔からある価値ある野菜、豆類、穀類、動物や食品を指定

③「味覚」の教育を行う

活動の例

博覧会等の開催

さまざまな食材や加工食品の展示・試食や各種催し物が行い、情報交換の場ともなる世界規模での博覧会の開催等。

食育と食科学大学

試食のノウハウや食品についての知識を消費者への提供や児童教育である「食育」プログラムの推進、持続的な農業・畜産の担い手や調理人など、さまざまな分野でスローな食の専門家を養成する。

味の箱舟(アルカ)

在来の野菜や穀物等、世界的に見ても希少で、地域活性化につながるものを認定。ブランド化して、各種プロモーションを通じて生産・販売の支援を実施。

Slow Food®

ロゴマーク

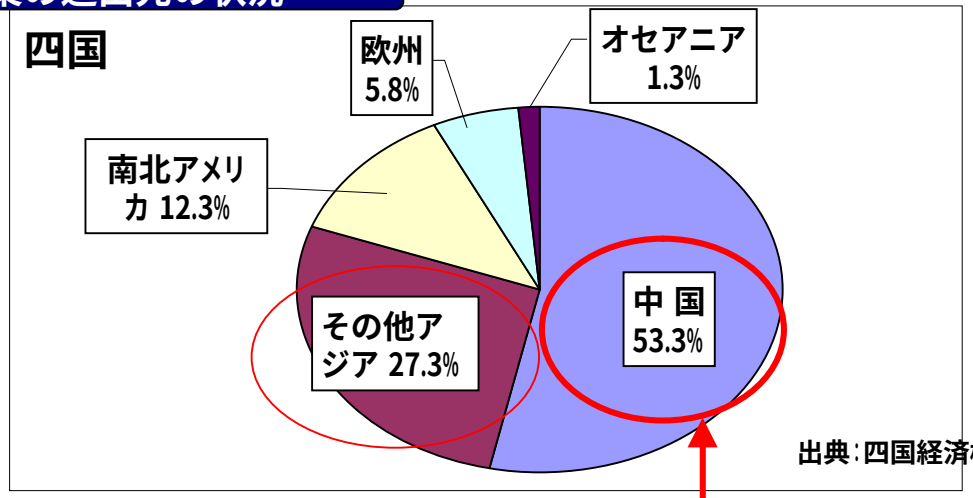
⑤域外との交流・連携（環瀬戸内や世界との交流の促進）

四国外との活発な交流を促す

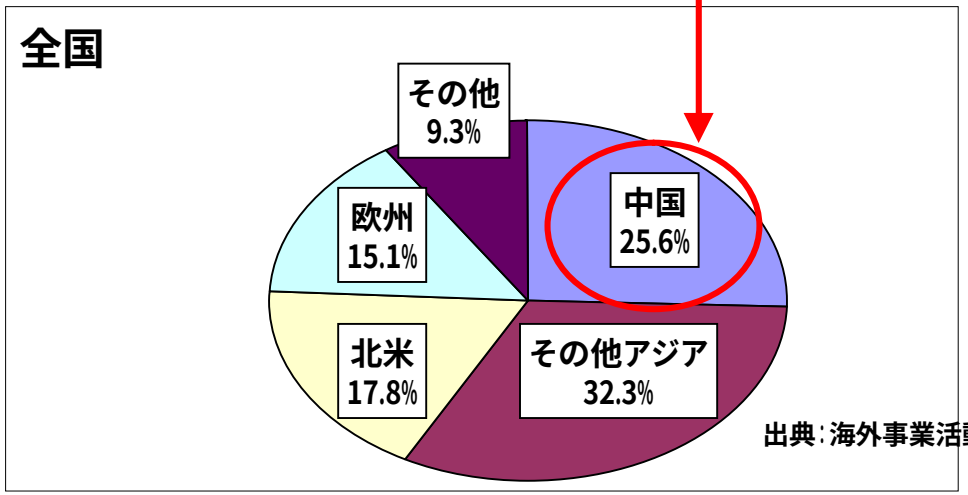
全国との交流促進

・中国を始めとしたアジア諸国に対する投資額が増加。
四国地域においても、中国を始めとしたアジア諸国への企業の進出が顕著。

企業の進出先の状況



出典：四国経済概観



出典：海外事業活動基本調査（経済産業省）

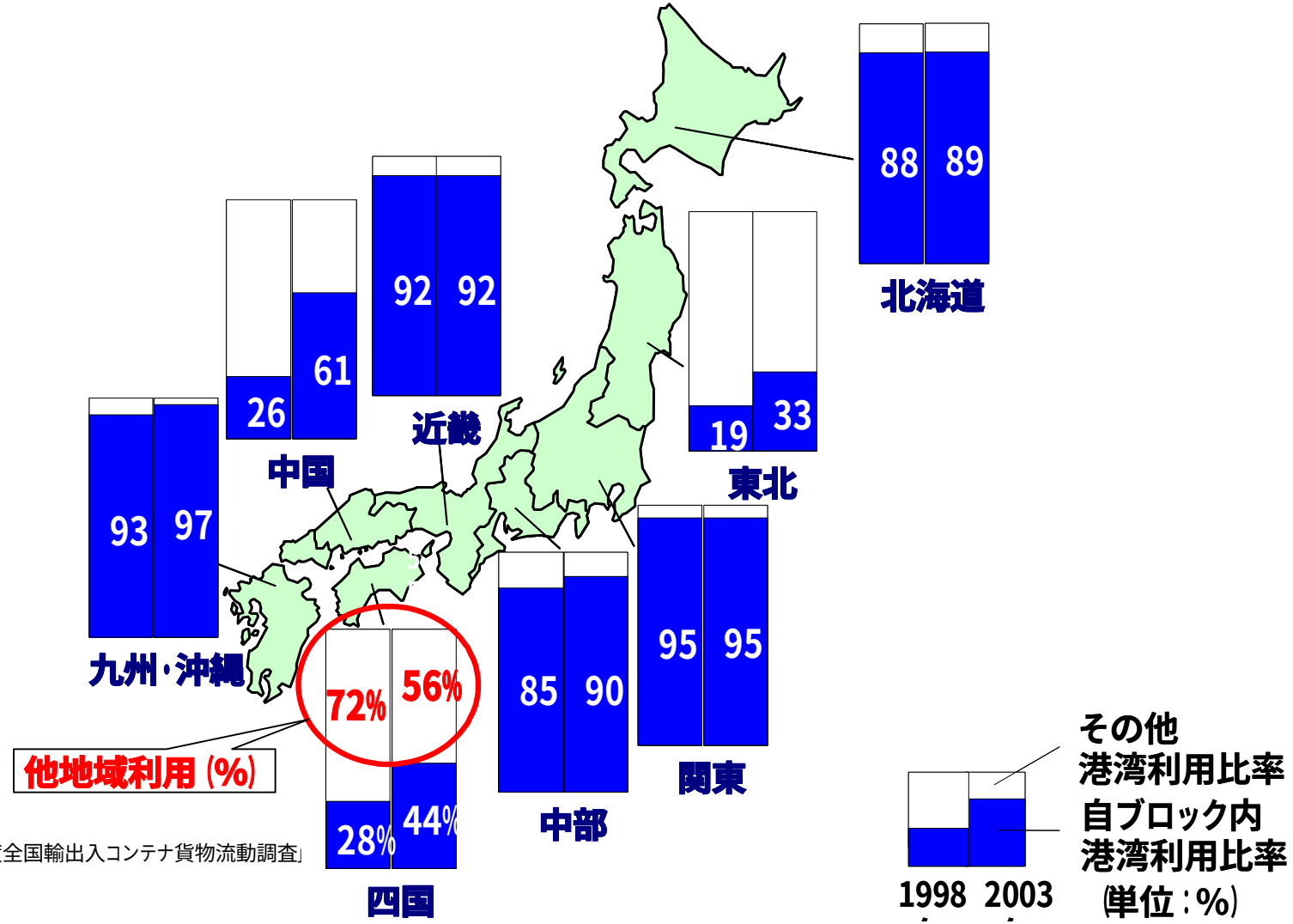
H16.9の四国経済産業局の調査によれば、四国の企業のうち、124社が中国、その他アジアへ進出している。

⑤域外との交流・連携（環瀬戸内や世界との交流の促進）

四国外との活発な交流を促す

全国との交流促進

・四国港湾で取り扱われる外貿コンテナ貨物の56%は、依然として国内他地域を利用している。



出典：「平成１０年度全国輸出入コンテナ貨物流動調査」
国土交通省

⑤域外との交流・連携（環瀬戸内や世界との交流の促進）

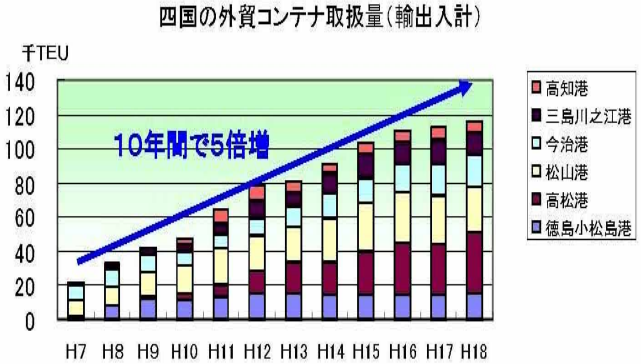
四国外との活発な交流を促す

東アジア、世界との交流促進

・４つの空港と13の重要港湾におけるゲートウエイ機能を強化し、世界との交流を促進する。

・特に、近年、人・モノの交流の高まりの著しい東アジアとの貿易・交流の拡大を重点的に図る。

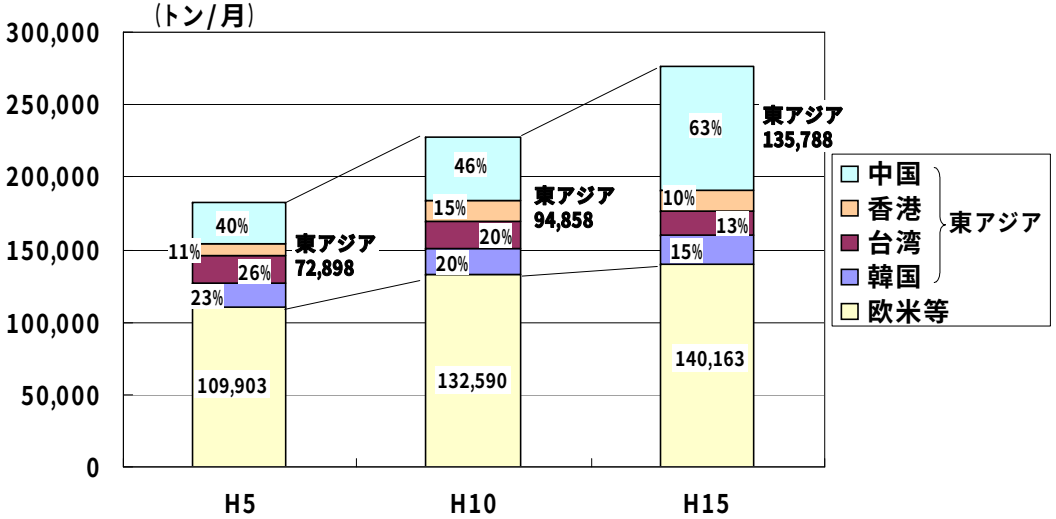
＜外資コンテナの取扱量と東アジア向け貨物＞



出典：港湾統計（平成18年）

＜東アジア行旅客数＞

出典：四国地方整備局



出典；全国輸出入コンテナ貨物流動調査(1ヶ月)

四国の生産消費外貿コンテナ貨物推移

参考資料－１

新 四 国 創 造 研 究 会

意　見　書(素案)

平成１９年9月

目 次

■ 新四国創造研究会 意見書（案）のイメージ ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・1

1．四国の特徴、課題、一体化の必要性 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・2

2．四国における国土形成のコンセプト ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・4

3．国土形成に向けての目標 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・5

（1）安全・安心の実現 ・・5

（2）中山間地域の魅力の保持・創造 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・5

（3）特色ある地域を活かした四国の独自性の創出 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・6

4．目標の実現に向けた提言 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・7

（1）安全・安心の確保 ・・7

（2）人の交流・連携（開かれた知の創造・人材育成） ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・7

（3）地域資源の交流・連携（地域資源の再発見と活用） ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・9

（4）域内の交流・連携（多様な地域間の交流・連携の強化） ・・・・・・・・・・・・・・ 12

（5）域外の交流・連携（環瀬戸内や世界との交流の促進） ・・・・・・・・・・・・・・・・・ 14

新四国創造研究会　意見書（案）のイメージ

四国の特徴

①地形的に、まとまりのある四国に、個性ある多様な地域が存在する
②地域（都市と田舎等）が地理的に近い
　・概ね９０分で県庁所在都市まで交流が可能な地域が多い
③美しい自然（日本の原風景）と、農山漁村など人々の営みがある
④独自の歴史、文化が存在する
　・お遍路やお接待文化などの歴史・文化、ボランティア活動がある

四国の課題

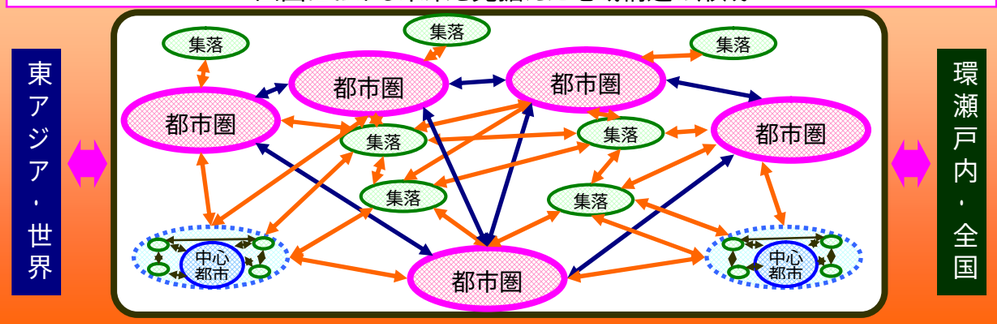
●生活面の安心・安全の確保
●地域資源が活かされていない
●四国内の結びつきの弱さ

四国における一体化の必要性

●集積のメリットを享受
●地域資源の再発見と活用
●心の癒しや、自己鍛錬・人材育成の場としての活用

四国における国土形成のコンセプト

<<交流・連携を活かし、輝く個性の創造>>
～四国における未来を見据えた地域構造の形成～



交流・連携を活かした一体化により、地域の価値を高める

●域内の交流・連携
・高いモビリティ環境の整備
・地域資源の活用
・活力ある企業、地域の創出
・都市サービスの享受

●域外の交流・連携
・ゲートウェー機能の強化
・個性ある企業の情報発信
・四国ブランドの全国展開
・東アジアや世界市場における認知

●四国の価値を高める
・交流・連携により認知度を高める
・交流により活力を創出
・四国ブランドの強化

国土形成に向けての目標

●安全・安心の実現
●中山間地域の魅力の保持・創造
●特色ある地域を活かした四国の独自性の創出

目標の実現に向けて

目標の実現に向けた提言

四国独自の交流・連携に向けた地域施策の展開

（1）安全・安心の確保
・安全・安心を支える社会基盤の確保
・自然との調和
・地域との相互連携

（2）人の交流・連携（開かれた知の創造・人材育成）
・時代を先取りするライフスタイルの創出
・知の創造拠点としての独自色のある開かれた教育の場の展開
・新しい価値観・開かれた考え方を持った「新たな公」の育成

（3）地域資源の交流・連携（地域資源の再発見と活用）
・美しい風土としての自然資源の価値の再発見
・歴史的・文化的な地域資源の価値の再発見
・地域資源を活かした特色ある産業・コミュニティビジネスの展開

（4）域内の交流・連携（多様な地域間の交流・連携の強化）
・都市間連携の強化
・中山間地域における活力の向上
・都市と中山間地域における連携の強化

（5）域外の交流・連携（環瀬戸内や世界との交流の促進）
・環瀬戸内での連携強化
・全国との交流促進
・東アジア・世界との交流促進

１．四国の特徴、課題、一体化の必要性

⑴　四国の特徴

① 四国は、地形的にまとまりのある圏域に、瀬戸内、山間部、南四国など個性ある多様な地域が存在する。

② 地域が地理的に近く、県庁所在都市間が概ね２時間で交流が可能であり、南四国の半島部を除けば、中山間地の集落から概ね９０分で県庁所在都市まで交流が可能である。

③ 美しい自然や農山漁村などの人々の営みがつくり出す美しい景観や歴史･文化が存在し、日本の原風景が残されている。

④ 独自の歴史、文化が存在し、お遍路やお接待な文化など、四国共通の歴史・文化に加え、ボランティア活動も盛んである。

⑵　四国の課題

① 四国は急峻な地形、脆弱な地質により、土石流や崖崩れの発生可能性のある急傾斜地が約８割を占め、このような危険な地域に暮らす人が半数以上になる。また、台風や集中豪雨等による洪水による被害も多く、一方で瀬戸内側では渇水が頻発している。さらに、近い将来発生が予想される東南海・南海地震への備えが必要となっている。

② 四国では、地域資源が豊富に存在するが、個々の取り組みで認知度が弱く、その良さが全国に知られていない。

③ 四国内の人の移動を見ると四国４県の県間より四国の外の移動が多く、四国内の移動が少ない。また、四国の人が四国の中での体験が少なく、四国の中を見ていない。

⑶　四国における一体化の必要性

①集積のメリットを享受

地域における安全、安心の確保、地域における日常サービスの確保を図るために、各地域の間の一体化を進める必要がある。特に都市部と中山間地域との交流連携により、救急医療などについての安心・安全の確保、日常サービスの確保を図ることが重要である。

また、今後、ますますグローバル化する都市間競争に対応するため、産業集積や都市の集積を生かすため、一つひとつの地域が相互かつ高密に交流・連携することで、一体性を保持し、集積のメリットを享受できる空間形成を図ることが必要である。

⑵ 地域資源の再発見と活用

四国においては、美しい自然や人々の営みなど、多様な地域資源が存在するものの、現状では十分に認知されていない状況にある。

一方、四国に暮らす住民自身も地域資源のすばらしさを知らないことが多い。お互いに知り、その良さを共有化することが重要である。

また、上勝町や梼原町、馬路村などで、様々なコミュニティビジネスが行われており、このような地域資源やコミュニティビジネス、地域活動等は、全国や世界に認知されることにより、市場が開拓され、地域の活性化に寄与するものと期待される。

このため、四国においては、個々の地域で特色ある地域資源を見出すとともに、

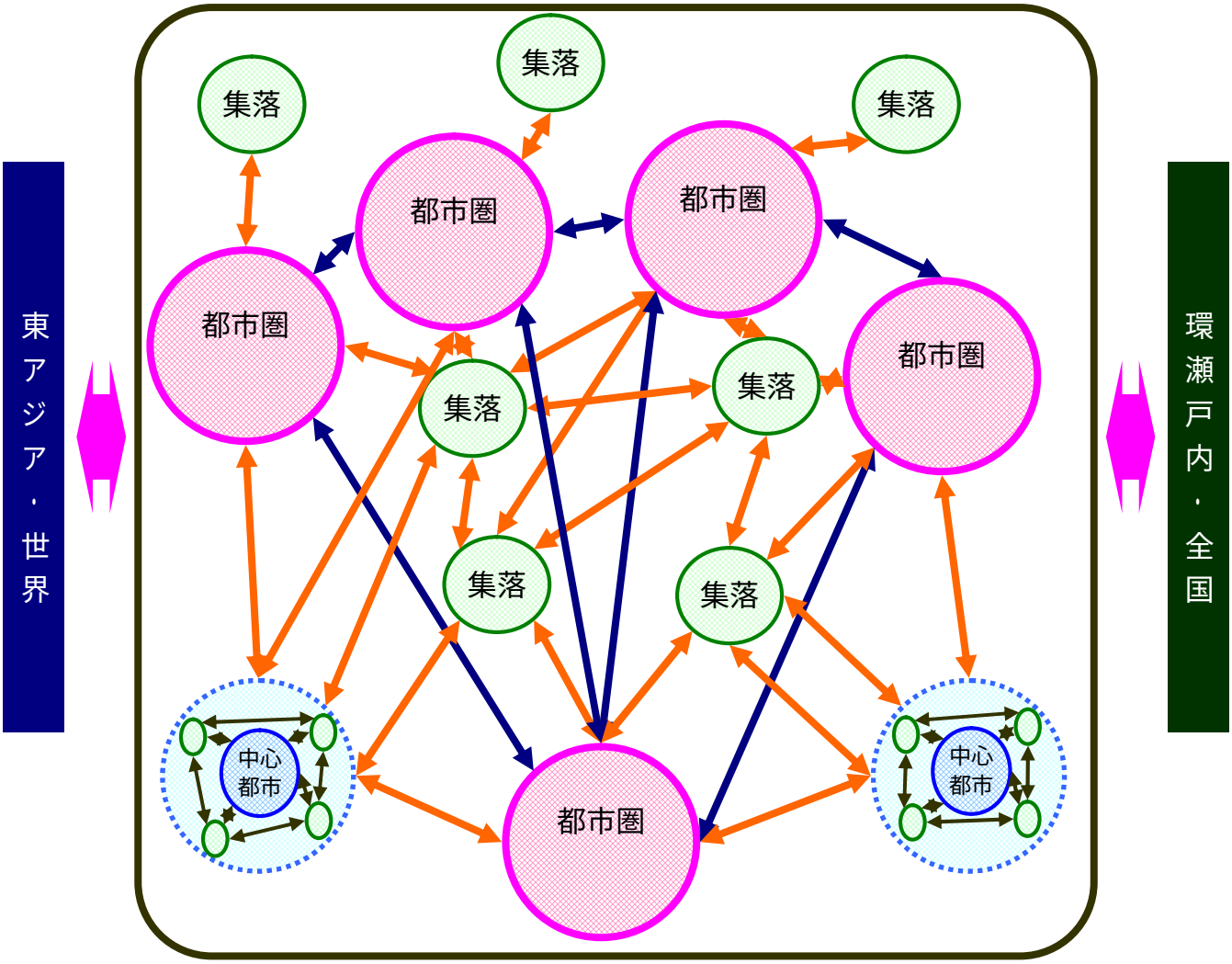
個々の地域毎では、全国や世界にアピールする力に限界があることから、四国内で認知し共有化し一体化を図ることにより、高い付加価値を生み出していくとともに、集積した力を活かして、広く四国外に知られるように仕掛けていくことが必要である。

(3) 心の癒しや、自己鍛錬・人材育成の場としての活用

これからの四国においては、時代を先取りし、未来から現在を見据えることもできる開放的な人材が必要であり、未来の四国を支える世代がそのような人材に育つよう、人材育成の場が重要であるといえる。

四国の「お遍路」が、現代社会における精神のリフレッシュ、心を洗う精神修養の場として、都会人に支持され、人気を博しているように、四国の優れた歴史・文化は、「心の癒し（ヒーリング）」、「自己再生」、「自己鍛錬」の場としての新たな魅力の形成につながるものである。このような優れた歴史・文化を、四国全体で一体化し、その魅力を一層向上させていくことが求められている。

また、地域における人材育成において大学の果たす役割が大きいものとなっており、これからの四国の大学には、自らの価値を見出し、独自色のある教育を展開するとともに、四国全体で大学相互が教育の場として連携し、一体化を図ることで、他圏域と差別化した展開を図っていく必要がある。



交流・連携を活かした一体化により、地域の価値を高める　概念図

2．四国における国土形成のコンセプト

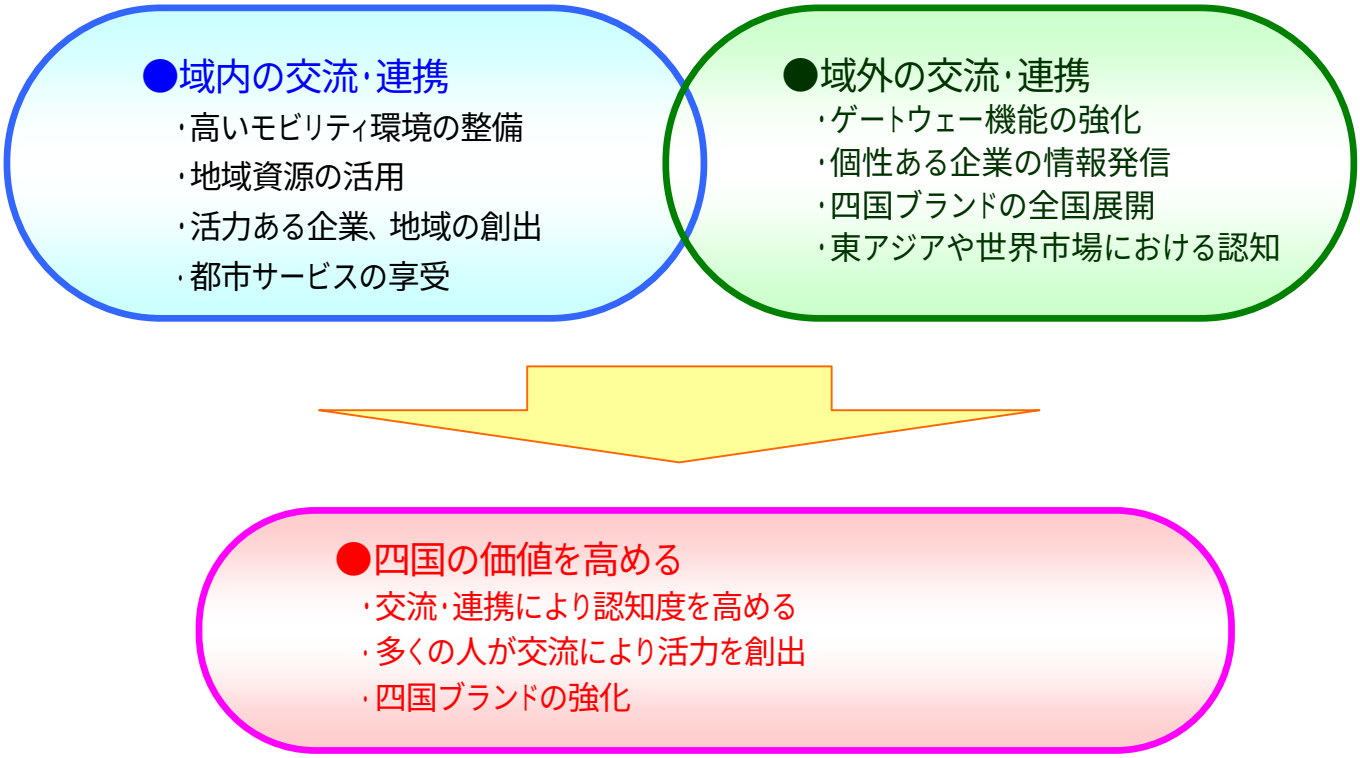
四国は、人口や産業等の国内に占める割合が小さい圏域である。また、人口の減少や高齢化が、全国に先駆けて進行している。

一方、近年は、田舎暮らしやマルチハビテーション等のニーズが高まり、付加価値の高い農・林・水産品が見直されているとともに、ＮＰＯや地域コミュニティレベルでの活動の活発化、団塊世代の大量退職等による人的資源の新たな活用可能性を有していること、東アジアの経済成長に伴う海外交流の進展、情報化等の進展により、四国と世界との時間や距離を解消する事が可能になっていることなど、四国の飛躍のきっかけとなる社会情勢の変化が期待される状況にある。

さらに、四国は、多くの地域で、産業集積の高い都市圏と中山間地域の距離が近く、マルチハビテーションや田舎暮らしを行う「理想の空間」としてのポテンシャル向上を図りうる可能性を有する国内有数の圏域と捉えることができる。

このような状況から、四国における未来を見据えた圏域の形成のためのコンセプトを「交流・連携を活かし、輝く個性の創造」として、圏域内外の交流連携を活かした一体化により地域の価値を高めることを目指す。

このためには、高いモビリティ環境の整備等による「圏域内の交流・連携」、ゲートウェイ機能の強化や個性ある企業の情報発信等による「圏域外との交流・連携」を進め、四国ブランドの強化により、四国の価値を高めるための取り組みを進めることが重要である。



３．国土形成に向けての目標

⑴ 安全･安心の実現

急峻な地形条件にある四国中央の山間部の一体では、地すべり危険箇所が多数存在し、その面積は全国の地すべり危険箇所の２０％を占めるものとなっている。

また、四国地域の年間降水量は、北四国の約１，１００mmに対し、南四国では約２，６００mmと２倍以上の格差があることに加え、四国地域全土の７６％が台風常襲地帯に指定されており、比較的短時間に狭い地域に降雨が集中する「集中豪雨」が発生しやすい状況にあることなどから、瀬戸内海側における渇水被害、そして四国全域における水害、土砂災害など、気象条件のアンバランスに起因する様々な災害が頻発している。今後の投資余力が限られる中で、早期に安全性を高め、被害の最小化を図る必要がある。

さらに、今後３０年以内に南海地震が発生する確率は５０％程度と予想されており、その想定震度は、四国の太平洋、紀伊水道沿岸地域で震度６強を上回り、地震による津波は、高知県の室戸市から土佐清水市にかけての一帯で最大１０mを超える規模になるなど、甚大な被害発生が想定されている。

このような巨大地震に対しては、被害を軽減するための予防や、災害発生後の救援活動の円滑化等の対策の強化が必要であるとともに、住民一人ひとりの防災に対する意識の醸成と、近隣各県との相互連携を含めた救援体制の構築が必須である。
現在、四国４県及び中四国９県で応援協定を締結しており、今後いくつかの被害想定に基づき、応援体制を実際に機能させるマニュアルづくりが必要である。

⑵ 中山間地域の魅力の保持･創造

四国の中央には、傾斜の著しい四国山地が広がっており、四国の住民の半数以上が急峻な地域に暮らしている状況にある。四国の人々が享受している安心・安全・豊かな生活の源は、このようなところに位置する中山間地域の恵みによってもたらされており、この中山間地域の恵みは、そこで人が汗を流し、営みをしてこそ守られているものである。

しかし、今、その四国の中山間地域では、台風による土砂災害などの自然災害が発生しやすい状況にあるとともに、著しい高齢化の進行による田畑の耕作、山の管理等の担い手が失われ、国土保全等の面から、四国全体として危機的な問題に直面している。

また、中山間地域では、医者の減少が進むなど、人々の命や健康を守る医療サービスが低下しており、健康な暮らしを営んでいくことでさえ難しい状況になっている。

このような状況から、四国の国土形成にあたっては、中山間地域の問題を四国全体で共有し、ＮＰＯやボランティア等の活用により地域コミュニティの再生、地域資源の活用や文化の創出等による地域活力の再生、ナショナルミニマムを考慮した社会インフラの確立の観点から、暮らしの安全・安心や地域活動の利便性等に配慮した集落間や都市との道路や公共交通、情報等のネットワークの充実等を図り、厳しい条件にある中山間地域の生活や経済を支えていくことが必要である。

さらには、変化に富んだ美しい自然や景観、歴史、文化、食文化、祭り等の中山間

地域が有する豊かな資源を活かし、地域住民等が中心となって、コミュニティビジネスなど、地域の自立に結びつく取組みを行っていくことが必要である。

(3) 特色ある地域を活かした四国の独自性の創出

四国では、豊富で多様な自然資源や歴史文化等を有し、様々な個性を有する地域が形成されてきた。

四国における国土形成にあたっては、四国の各県・各地域がもつ多様な地域資源を、競い合いながら、地域が誇りうる個性として再発見し、活用することが求められる。

そして、その個性を光り輝くものとして磨き、互いに共有し合い、相乗的に価値を高めていくことで、四国の独自性を発揮し、四国外にアピールし、内外の活発な幅広い交流・連携を高めていくことが必要である。

①瀬戸内エリア

瀬戸内の高い集積を踏まえ、都市化の進展に伴う交通事故や渋滞、渇水被害の多発等の問題に対応しつつ、既存ストックを活用した、四国を代表する集積エリアとしての競争力向上を図ることが重要。

②山間部エリア

急峻な地形により、インフラ整備や、人口･産業等の集積が難しいものの、豊富な自然、個性的な地場産業等の存在、地域活動に対する意識の高さ等の特色を有する地域であり、社会トレンドを先読みしつつ、集積型ではなく、地域資源を活かした特色ある発展を目指すことが重要

③南四国エリア

【高知圏】
瀬戸内エリアと比較して、高速道路等のインフラ整備が遅れ、相対的に産業集積が低いため、インフラ整備等の推進と、それを最大限活かした地域活力の向上を図っていくことが重要

【半島部】
インフラ整備等の推進に応じた、地域資源を活かした特色ある発展地域の活性化を図っていくことが重要

４．目標の実現に向けた提言

⑴ 安全･安心の確保

①安全･安心を支える社会基盤の確保

四国では、急峻な四国山地が中央に存在しており、台風による土砂災害などの自然災害や渇水被害が発生しやすい状況にあるとともに、今後３０年以内に東南海地震が６０～７０％程度*、南海地震が５０％程度*の確率で発生すると予想されており、住民が不安を抱えている状況にある。

このため、台風・豪雨や地震等による洪水、高潮、津波等の水害や土砂災害等の頻発箇所もしくは被害想定箇所において、無堤部対策をはじめとする治水事業の強力な推進、砂防えん堤、湾口防波堤、防潮堤などの構造物の整備、災害を想定した都市や集落の相互の道路ネットワークの強化、緊急物資等の海上輸送機能の強化、避難拠点の確保、構造物の耐震化、渇水に強い地域づくりを目指した取組み等、住民の暮らしの安全・安心を支える社会基盤の確保を推進することが重要である。

(*　出典；地震調査研究推進本部[長期評価]、基準日 2007 年１月１日)

②自然との調和

これまで災害対策に資する整備など、様々な社会基盤の整備が進められ、住民の暮らしの安全・安心への寄与を果たしてきた。また、四国地方の土木遺産に見られるように、暮らしを支えるために作り上げてきた人工構造物も、自然と融合し、自然とのコントラストを見せて、風景と調和した人工の美を醸し出してきた。

このため、これからの四国の社会基盤の整備においては、四国の誇るべき自然環境や景観を重視し、周辺の自然や景観にとけ込んだ整備となるよう配慮するとともに、生活様式の変化や都市化の進展等により失われつつある自然環境等についても、本来の自然に近づけるよう再生を図り、さらに、水源から河口・海岸まで水系全体でバランスのとれた総合的な土砂管理を推進することにより、地域住民が憩い、安らぎ、交流を深めることができる空間の形成を図っていくことが重要である。

③地域との相互連携

住民の暮らしの安全・安心を支える社会基盤の確保を着実に推進していくものの、このようなハード対策だけでは対応が難しい大規模災害の対策に対しては、被害を最小限にする減災の考え方が重要である。

このため、ハザードマップの整備・普及、避難経路の確保、防災意識の啓発、防災教育の充実、コミュニティの形成等の事前対策、防災情報の伝達、コミュニティの連携による広域防災・危機管理体制の確立等の事中対策、そして、被災情報や安否情報の提供、被災者の保護・移送、医療、帰宅体制の整備等の事後対策等、自助・公助・共助のバランスのもとに、地域との相互連携による減災を目的としたソフト対策の推進を図る必要がある。

⑵ 人の交流･連携（開かれた知の創造･人材育成）

①時代を先取りするライフスタイルの創出

四国の人口の減少や高齢化は、全国に先駆けたものであり、地域の担い手については、四国の未来を見据えて、計画的・重点的にその育成を図っておく必要がある。

このため、四国における生活者に対し、四国外との開かれた交流を積極的に促し、幅広い意識や視野を有していくように呼びかけ、その交流を通じて自らが地域を担う上で「大切なもの」を学び、それをライフスタイルに反映させていくような仕掛けを図っていく必要がある。

第一には、社会インフラ整備により、四国内外におけるモビリティや情報ネットワークの向上を図るとともに、情報交流の場を形成し、従来型のライフスタイルのように、内向きの活動にとどまるものではなく、様々な人と人との交流を積極的に行うよう促していく必要がある。

その一つの姿として、近年、マルチハビテーションのニーズが高まっており、そのような新たなライフスタイルを支援する社会環境づくりを行っていく必要がある。このためには、都市と中山間地域の地理的な近さを活かした連携強化、相互の活性化を図ることにより中山間地の活性化を図ることが重要である。

また、第二に、地域が主体となった、新たなライフスタイルの確立やコミュニティの形成が重要である。四国における事例としては、徳島県神山町で、地元のＮＰＯが中心となって、世界中から芸術家や愛好家が集う「神山国際芸術家村」を創りあげ、地域住民が一緒になって、新しいコミュニティの実現をめざす動きが進められている。

このように地域が主体となって、自らの地域のこれからの姿をイメージしながら、新たなライフスタイルを提案し、地域に人を呼び込むような創意工夫を図っていくことが、未来を見据えた四国の形成を図っていく上で特に重要であると捉えることができる。

②知の創造拠点としての独自色のある開かれた教育の場の展開

大学は、本来、単に知識を授けるところではなく、弘法大師空海が創設した「綜芸種智院」の建学の精神にあるよう、「人間とは何かをみずから学ぶ道場」であり、「自己鍛錬・自己再生の場」、「総合的な人間教育を図る場」と捉えることができる。

例えば、アメリカのアパラチア山脈の西側の麓に位置するブリヤ・カレッジは、山地に生き続ける人のために設立された大学であるが、実学主義で、キャンパスの中に牧場やホテル等を設けて、学生と教員で運営するなど、地域ならでは人材育成に重きを置いた、ユニークな運営を行っている。

一方、四国においても、大学ではないが、ＮＰＯ法人等が高知県や周辺市町村、教育委員会等と共に、不登校の児童、生徒、あるいは特殊な事情で学校に行けない未成年者等の生活自立の促進と学業支援を行っている四万十学園など、地域に根ざした新しい人材育成の場を確立する動きが見られている。

また、地域の産業育成の面では、大学に対し、企業や行政と連携して、産業クラスターを形成していくことにより、四国の産業を牽引する新たな産業の育成や産業の高付加価値化に寄与することが求められている。

このように大学においては、地域や社会から何が求められているのか、何を売りにしていけばよいかなど、将来的なニーズを見据え、人的な投資を行うことが求められている。

したがって、これからの四国の大学においては、自らが、四国もしくは自らの地域ならではの価値を見出すとともに、アジア等の地域言語を重視した独自色のある教育の場の変革を図るなど、四国全体が連携しながら独自性のある展開を図っていく必要がある。そのうえで、四国内の大学における単位互換などの相互機能連携を通じ、四国内外における大学間の交流と競合のなかから、未来を見据えた「知の創造拠点」として、開かれた人材の育成・供給の場を形成していくことが重要である。

なお、「知の創造拠点」の形成に当たって、大学の質の向上を図っていくことが不可欠である。このような観点から、優秀な教師の確保を図っていくことも重要である。

③新しい価値観・開かれた考え方を持った「新たな公」の育成

市町村における地域づくりは、これまで行政主導で進められてきた。

しかしながら、近年は、自治組織や商工会議所・商工会のみでなく、ＮＰＯや住民個人など、多様な主体による地域づくりの重要性が高まっている。

四国においては、遍路文化やボランティアなどの地域活動が根付いており、今後の地域づくりにおいては、住民一人ひとりが、新しい価値観・開かれた考え方を持った、地域づくりの新たな担い手としての役割を担っていくことが重要である。

このため、ボランティア活動などの住民活動をさらに拡大し、「自らの地域のことは地域で取り組む意識・姿勢」を醸成し、地域の多様な主体がそれぞれ意見を出し合い、直接的に相互調整を図り、自ら実行していく、「新たな公」の担い手となる人材を育てることが重要である。

行政は、このような「新たな公」による自由闊達な活動を促すとともに、社会インフラの整備などを通じて、個々の主体の活動を支援する役割を担っていくことが重要である。

⑶ 地域資源の交流・連携（地域資源の再発見と活用）

四国は地域資源としての素材は豊富に存在するが、まだ活かしきれているとは言い難い。四国の誇れる地域資源である文化遺産、歴史的地域資源は、一体化によって共有し、四国ブランドとして、地域力を高めることにつながってくる。

①美しい風土としての自然資源の価値の再発見

四国の風土は、長い年月が築きあげた貴重な自然・文化財産であり、この文化的価値の重みを持つ多様かつ豊富で、美しい自然が四国の魅力であり、中山間地域は、その宝庫である。

四国の面積の 75%を森林が占めており、国土の保全、自然環境の保全、地球温暖化防止のための二酸化炭素の吸収・固定、人に優しい循環型資源としての木材供給など多面的機能を有し、様々な形で四国の住民の生活に役立っている。

その恩恵を後世の人々が享受できるよう、長期的視点にたって森づくりを進めていかなければならない。

この森林を背景に中山間地域に暮らす人々がいるからこそ、森が守られ、美しい自然の風景が守られているのだということを理解することが大切である。水源地、河川、森林、棚田など良好な景観や自然の維持管理が中山間地での生業によって支えられ、

それによって、四国の原風景、ふるさとの美しい景観がいつまでも受け継がれてきているということを忘れてはならない。

遍路道や、旧街道など、独自の文化が息づく「みち風景」にも、美しい自然景観とそれをささえる生業や地域の暮らし、生活文化があることを理解し、自然資源の価値を歴史・文化的価値と結びつけて再発見することが重要である。

特に近年の中山間地域における急激な人口減少、少子高齢化は森の維持管理の担い手不足を招いており危機的状況にある。流域を単位とした下草刈りなどの上下流域交流など、下流都市と上流農山漁村の住民の協働によって、森林保全に取り組んでいく活動が活発になってきていることは、住民の方々が森林を大切にしたいとの表れである。

都市と農山漁村の交流は、様々な交流・連携を呼び込み、大都市住民のボランティア体験参加や、グリーンツーリズムなどによって農山漁村の自然や営みに親しむ機会を拡大してきている。

こうした交流･連携が、自然資源の新たな価値を創出し、再発見につながっており、今後も多様な交流・連携に係る活動を進めることが重要である。

一方、人々の様々な営みの近代化や開発により、四国全体の山、川、海等の自然環境や景観が失われつつあり、自然や景観を次世代に継承していくために、保全・再生していくことが重要である。

さらには、自然とのふれあいを通して、人々がその価値を見出していくことも重要である。

河川等が本来有している生物の良好な生息・生育環境及び美しい景観を保全・再生するため、自然共生型の事業や水環境の改善を進めていくことのほか、自然とふれあう場づくりなどを進めていくことが求められる。

②歴史的･文化的な地域資源の価値の再発見

四国は、「歴史」の宝庫であり、「文化」の結晶体である。人口や産業等の規模の小さい四国において、進展する国際化や高度情報化等を背景とするグローバルな地域間競争に勝ち抜き、四国の自立性、独自性を高めていくためには、四国の強みである歴史、文化に焦点をあて、小さくても特色ある資源を見出し、共有化し、結びつけることにより、高い付加価値を生み出していくことが重要である。

「遍路道」「札所」や「お接待文化」など優れた資源に歴史文化活動情報、地域の生活情報など隠れていた部分にも光を当て、新しい価値を再発見し、特色を高めていく努力が必要である。現代人のストレス社会において、精神のリフレッシュ、心を洗う精神修養の場として、「お遍路」が都会人に支持され、人気を博しているように、新しい「心の癒し（ヒーリング）」、「自己再生」、「自己鍛錬」の場として魅力･環境づくりを進めることも大きな価値向上につながる。

また、四国は、美術館が多く、現代美術の宝庫でもある。大塚国際美術館、イサムノグチ庭園美術館、臥龍美術館等は、海外からも高い評価を得ている美術家の作品がまとまって鑑賞できるということで、多くの外国観光客も訪れている。また、大方町の砂浜美術館は、砂浜を美術館にみたてた世界ではじめての美術館でもある。若者を含めた美術愛好家をターゲットとした現代美術のネットワーク化など、テーマ性を有

する個々の地域資源を結びつけ、それに応じた関連施設整備やＰＲを行うことにより、新たな文化的な魅力を高めていくことも望まれている。

このように四国においては、様々な歴史的・文化的な地域資源が埋もれている可能性があるため、各県・各地域が埋もれている地域資源の価値を見出していくことが必要である。

ただし、その価値は、四国内への内向きに目を向けているのみでは気がつかず、四国外から四国を振り返って気づくことも大事であり、四国外との積極的な交流が重要である。

一方、四国外から評価される個々の地域資源は、四国外の人々をひきつける魅力となる可能性を高く有しているため、一つひとつの資源を結びつけ、一体化した総称として「四国ブランド名」をつけることにより、観光・文化面から、四国外にアピールしていくことが重要である。

③地域資源を活かした特色ある産業･コミュニティビジネスの展開

四国には、一企業が工場群を構え、それが複数集合する程度で、裾野の広い産業連関を構成する産業集積にまでは至っていない。

むしろ、四国は、企業規模としては中小企業クラスで、地域資源を活用した特色ある産業に、産業の特徴を見出すことができる。また、それらの中から技術的優位性において日本を代表する企業や、世界的に市場優位性を誇る企業が輩出しているところに特徴を見出せる。

昨今、食の安全に関わる事件や問題が続発しており、大きな関心を呼んでいる。食に対する安全性、信頼性の向上や付加価値等が求められるなか、四国においては、豊かな農･林･水産品で、地域それぞれが独自の特産品づくりと独自の食文化を活かし、地産地消の取り組みを推進している。

今後、各地域では、自らの特色ある産品に対して、生産、製造・加工、販売・関連サービスの連携強化を図った６次産業化（１×２×３次産業）等、様々な創意工夫による高付加価値化を図っていくことが重要である。都市と農山漁村の交流を通じて、第１次産品や、加工の第２次産品に付加価値をつけることが重要である。

特に、四国の豊かな自然や食、祭り、遍路等の文化は、日本のみならず、世界に対しても、十分にアピールできる資源であり、海外のニーズ等を踏まえて、付加価値の向上を図っていくことが重要である。

また、四国においては、コミュニティビジネスが重要である。地域づくりの担い手が不足し、高齢者が多い地域においては、コミュニティを維持していくためのコミュニティビジネスを活性化していくことが重要である。コミュニティビジネスは、単なるボランティア、慈善行為とは異なり、参加者の生きがいづくりにも貢献するものと捉えることができる。多様な世代間の交流や、都市と農山漁村の地域間交流、異業種間の交流を通じて、例えば１次産品づくりと環境保全や、観光レクリエーション、福祉などと連携することにより、新しい地域ビジネスを創出する機会になってくると考えられる。

地域のコミュニティが主体となって、地域の祭りや様々な資源を活かした観光、福祉、教育、環境等様々な面において創意工夫したコミュニティビジネスを創出すると

ともに、行政が社会インフラ整備や公的支援等を推進することにより、官民一体となってコミュニティビジネスの育成・発展を図っていくことが重要である。

⑷ 域内の交流･連携（多様な地域間の交流･連携の強化）

①都市間連携の強化

四国においては、多様で特色ある都市が存在するとともに、中心都市と周辺都市が結びついた徳島、香川、西条・新居浜、松山、高知等の都市圏が存在しているが、100万人都市圏が存在せず、高度集積のメリットを享受できない状況にある。

四国における高度集積のメリットを享受できないというデメリットを補うためには、現状では、個々の存在である都市圏の連携を深めることにより、大きな力を発揮していくことが重要である。

このため、隣接都市間における機能分担等による都市圏レベルでの機能強化を図るとともに、経済・観光・暮らしを支えるネットワークの戦略的な整備や交通の快適性・利便性の向上により、都市間及び都市圏相互の結びつきを強化することが重要である。

特に、都市部においては、自動車交通の集中等により、交通事故や渋滞、沿道環境への悪影響等の問題が顕在化しているため、環状道路、バイパス道路等の道路整備や交差点改良等によるボトルネックの解消、ＴＤＭの推進、歩道の確保や安全な通学路の確保、自転車走行空間の確保等による交通事故の削減、低騒音舗装等の対応により、道路交通問題への対応を図っていくことが不可欠である。

さらには、四国の一体化に向けては、遍路文化を支援する歩き遍路危険箇所の対策や、四国アイランドリーグなど、県間・地域間における新たな文化を創造し、交流・連携を促進することも重要となっていることから、都市間・都市圏間・県間のネットワークの強化等により、そのような文化を創出しやすい環境の形成を図っていくことが重要である。

②中山間地域における活力の向上

中山間地域においては、人口や産業、生活サービスに係る各種機能の集積が低く、特に、少子高齢化や人口減少の進展等が著しい状況にある。

一方、急峻な地形により、インフラ整備や、人口・産業等の集積が難しいものの、豊富な自然、個性的な地場産業等の存在、地域活動に対する意識の高さ等の特色を有する地域であり、人口や産業等の高い集積を目指すのではなく、「資源」、「ひと」、「交流」、「支援」を重視した地域独自の取り組みにより、地域の保持・創造を図っていくことが望まれる。

資源；中山間地域の豊かな資源を再認識し、また、潜在資源を発掘し、新たな発想で活用することで、地域の活性化に向けた展開を図る。

ひと；自らの地域のことは地域で取組む意識・姿勢を醸成し、地域づくりを牽引する人材の育成を図る。

交流；地域活動に係る新たな発想や課題解決方法等を見出すとともに、活動の周知を図るため、他地域と幅広く交流し地域活動に係る情報を共有・発信する。

支援；地域活動の創出及び継続を下支えするインフラ（情報インフラ、道路インフ

ラ等）の充実等を図るなど、地元行政等が取組みを支援する環境づくりを図る。

具体的には、都市部住民等をターゲットに、自然資源、地場産品等の地域資源や人材等を活用し、新たな付加価値を高めた特色あるコミュニティビジネスモデルの創出・展開を図るとともに、田舎暮らしやマルチハビテーション等のニーズに基づき、独自のライフスタイルを提供できる仕組みを構築していくことなど、地域の創意工夫により、独自の魅力の保持・創造を図っていくことが重要である。

また、中山間地域内の中心的な地区における基本的な生活サービス機能の確保と、集落間のネットワークの強化を図ることによって、ナショナルミニマムとしての身近な利便性を高めるとともに、都市圏との連携・交流を強化し、都市的機能の享受と、地域活動のターゲットとなる都市部住民等の誘引を図ることが重要である。

さらに、中山間地域における利便性の向上のため、公共交通の情報提供、災害情報、すれ違い困難な箇所での対向車接近情報など日常生活を支える情報の提供を積極的に行っていくことが重要である。

特に、中山間地域内のネットワークの強化に当たっては、地域特性に応じた効率的な道路整備を推進するとともに、子供や障害者、高齢者等、自ら自動車を利用できない住民の移動を支えるため、コミュニティバスやデマンド型乗合タクシー等地域の状況に応じた公共交通サービスの維持、向上等を図っていくことが重要である。

さらには、中山間地域の誇れる自然資源等の保全、自然を活かした地域魅力の創出を都市と山村、河川の上下流域交流を通じて推進するとともに、土砂災害等の最小化による安心できる環境づくりを進めていくことが重要である。

③都市と中山間地域における連携の強化

中山間地域の活力向上にあたっては、都市と中山間地域の交流・連携を促し、一体的な圏域としての活力を高めることが重要である。

四国には、従来から「お接待」や「普請」に代表される地域風土があり、都市と中山間地域の間は、時間距離や感覚的に遠いと感じる距離抵抗感に課題があるものの、地理的距離は全国と比べても近く、都市と中山間地域の交流・連携とを考えた場合、都市と農山漁村の両方の生活環境や都市的環境を理想的な関係で実現できるトップランナーに四国は位置している。

このため、中山間地域の経済・観光・暮らしを支える、都市と中山間地域との交通や情報のネットワークの戦略的な整備により、都市における各種都市サービスの提供、中山間地域における豊かな自然によるゆとりや潤いの提供という役割分担を明確にし、相互の交流を促していくことが重要である。

特に、都市と中山間地域を連携する道路交通ネットワークの強化に当たっては、地域特性に応じた道路整備等により、地域特性や交通需要等を勘案した効率的な道路整備を推進するとともに、道路利用者の円滑な移動を支援するため、携帯電話を利用した道路情報及び災害情報の提供や地域情報を発信する施設等の整備、ＣＣＴＶ等既存ストックの有効活用を推進し、相互に移動しやすい環境の確保を図っていくことが重要となる。

また、高次医療施設が都市部に集中しており、中山間地域では、高次医療サービス

を享受しにくい状況にあるため、都市部と遠隔に位置する南四国の半島部を中心に、高規格幹線道路網の形成を推進し、地域住民の健康な暮らしを支える環境の確保を図っていく必要がある。

さらに、子供や障害者、高齢者等、自ら自動車を利用できない住民の移動を支えるため、都市と中山間地域を連携する路線バス等の公共交通サービスの維持や向上等を図っていくことが重要である。

一方、中山間地域においては、下流部の都市に対して、国土の保全等の機能を担っていることから、都市の住民が、中山間地域の山々を守るための様々な支援を行っていくよう意識を高めていく必要がある。

さらには、四国全体としての移住・定住の促進を図っていくため、都市と中山間地域が連携し、二地域居住や田舎暮らしなどの様々なライフスタイルニーズの向上に応じた空間形成を図っていくことが重要である。

⑸ 域外の交流･連携（環瀬戸内や世界との交流の促進）

①環瀬戸内圏での連携強化

本四三架橋の完成により、瀬戸内海を挟んで、本州等とのアクセスは飛躍的に向上した。

また、瀬戸内海は優れた景観、豊富な水産資源等を有しており、その環境を周辺圏域が一体となって維持・保全、活用が求められるところである。

四国においては、このような環瀬戸内の一体性を踏まえ、環瀬戸内圏での連携強化を図っていくことが求められる。

このため、単なる拠点都市間の交流に留まらず、本四三架橋等を活用した交流のネットワークの強化を図るとともに、物流・貨物形態に応じた港湾間の役割分担による効率的な物流の実現を図り、中国、近畿、及び九州を含めた連携強化を図ることが重要である。

また、こうした密な連携を実現するため、行政間の連携、公共交通アクセスの充実、本四間通行の促進など、交流を支援・促進する環境づくりが重要である。

②全国との交流促進

人口減少・少子高齢化の先進地域であり、島国という地形条件を有する四国において、経済活動力の向上、地域を担う人材の量・質の増大・向上等を図るため、全国との交流の促進を図ることが重要である。そのためには、四国外の人が期待する四国の役割が何か、必要なコンテンツを考えていく中で、四国の独自性を活かした他地域との差別化を図ることが重要であり、これにより、他に過度に依存しない自立した圏域を形成することが望まれる。

観光においては、お遍路や食文化といった知名度の高い資源を最大限に活用し、四国全体で捉えたスケールメリット、多様性を踏まえ、四国が一体となって集客の向上を図る必要がある。また、こうした資源のみならず、暖かな気候を活かした別荘地としての可能性や特徴的な魅力を持つ現代美術等、全国的視点では顕在化していない資源を発掘・ＰＲし、新たな資源として活用する必要がある。

産業においては、四国が誇る日本一・世界一企業に学び、競争力ある企業の育成を、

産学官が協働して推進する必要がある。また、農業・林業等の現在停滞傾向にある特性についても、長期的な視点でその価値を見極め、将来的な交流の要素として、維持・向上を図るべきである。

また、温暖な気候、豊かな自然資源、ゆっくり流れる時間等、四国の生活基盤は、高齢者等の生活の場としても、高い魅力を有している。このため、人々の移住の地、マルチハビテーションの地として捉え、他地域との居住の交流を促進すべきである。

こうした交流を後押しするため、本四三架橋等を活用した交流のネットワークの強化、空港のバリアフリー化や機能向上による航空サービスの高度化、港湾機能の強化やフェリー航路の充実等の交通ネットワークの強化を図るとともに、四国の魅力を最大限にＰＲする情報発信力の強化等により、他圏域から求められているニーズ等を把握する情報収集力の強化を図るべきである。また、高付加価値化を図るブランド化の推進、助成・特典などの他圏域から訪れやすくする工夫等について検討することも重要である。

③東アジア、世界との交流促進

経済社会のグローバル化が進む中で、アジア域内の人・物・情報が、あたかも国内のように緊密で高頻度に行き来するアジア域内交通、情報通信の「準国内化」は今後ますます進展するものと考えられる。このような中、東アジアの経済成長を四国の活力として取り込み、国際社会の中で自立的に発展するためには、国内に留まらず、近接する東アジア諸地域と直接四国が交流する取り組みの強化が求められる。

世界との交流促進に向けては、四国に不足する港湾、空港の国際ゲートウェイ機能の強化が不可欠であり、本四三架橋を活用した中国、近畿等との連携による役割分担を図り、交流の増大を図ることが重要である。

特に、港湾については、東アジア物流の準国内輸送化に対応した外貿コンテナ貨物の取扱いや、地域産業を支えるバルク貨物等の取扱いに対応し、施設の再編・機能強化による既存施設の活用や多目的国際ターミナル等の整備を図るとともに、瀬戸内諸港を支える国際基幹航路の開発・保全、国際フェリーや国際ＲＯＲＯ船の就航、港湾の情報化の推進等による国際物流の効率化を図ることが重要である。

さらに、四国内の道路交通ネットワークにおいて、空港・港湾へのアクセス強化や、国際標準コンテナ車通行支障区間を解消し、国際コンテナ輸送への対応を図っていくことが重要である。

また、文化・芸術等にターゲットを絞るなど、戦略的な情報発信・ＰＲが重要である。

加えて、国際競争に打ち勝つ人材、海外からの人材を迎え入れる環境づくりを担うコミュニケーション能力を備えた人材の確保・育成も重要である。

参考資料-2

新四国創造研究会　これまでの意見整理

項目	小項目	研究会での主な意見	ＷＧ会議での主な意見
(1) 安全･安心の確保	①安全･安心を支える社会基盤の確保	・ 四国の住民の絆を活かした、行政と住民が一体となった防災のモデル地域としての位置づけが重要。(柏谷) ・ 少子高齢化や災害への危機感を反映したディフェンスプランの議論が必要。(朝倉) ・ 幹線、国土の確保上重要な箇所における防災対策に集中投資すべき。(柏谷)	
	②自然との調和	・ 自然、歴史･文化、人情等地域特性を踏まえた独自の魅力のある地域づくりが重要。(局長) ・ 山を守るという観点が重要。(局長) ・ 四国の豊富な木材を活かし、木製砂防による防災施策が重要。(伊藤)	
	③地域との相互連携		・ 限界集落を保全しうる豊かさが重要。(土井)
(2) 人の交流･連携（開かれた知の創造･人材育成）	①時代を先取りするライフスタイルの創出	・ 四国は全国共通のものさしでは比較できない豊かさを持つ。(局長) ・ 豊かさ、ライフスタイルへのニーズに対する対応が重要。(局長)(那須)(井原　理) ・ 四国は、高齢者等にとって最高の環境を有する“住みよい土地”。(丸山) ・ シビル･ミニマムではなく、いわばシビル･マキシマムの方向での考えが重要。(井原　理) ・ 少子高齢化や災害への危機感を反映したディフェンスプランの議論が必要。(朝倉) ・ 全国に先駆けた少子高齢化のモデル（高齢者がいつまでも生きがいと満足感を持って参加できる社会）づくりが重要。(局長) ・ 生活重視、文化重視という生活形態では、地方はポテンシャルが高い。(望月) ・ 教育、少子高齢化対策なども一つの四国の課題。(竹内) ・ 四国外へ働きに出た人達が祭り等で戻り、地元とつながりが持てる関係作りに取り組むことが重要。(秋岡) ・ 少子高齢化や国土保全の問題解決にはボランティア活動や地域コミュニティの再生が重要。(局長) ・ 高齢化は高齢者の人材が豊富な時代。力を終結すれば原動力とすることが可能。(望月) ・ 人口の減少について、「量が落ちれば質も落ちる」ことに留意することが必要。(梅原) ・ 全国的に先がけたマルチハビテーション（二地域居住）の取り組みが重要。(井原　健) ・ 現在から将来、将来から現在の視点（時間軸）で考えるべき。(岡村) ・ 「四国は、産業集積の高い都市圏と中山間地域の距離が近く、マルチハビテーションや田舎暮らしを行う「理想の空間」としてのポテンシャルの向上を図りうる可能性を有する国内有数の圏域と捉えることができる」というのがウリになるのではないか。(岡村)	・ 四国は、人口縮小･経済縮小の先進地域としてのモデル的な姿勢が必要。(朝倉) ・ 経済圏と生活圏が一致しているイタリア型の圏域をめざすという発想が必要。(土井) ・ 豊かさには、「輝かしい豊かさ」と「ひなびた豊かさ」があり、前者のみの価値観からの脱却が不可欠。(井原　理) ・ イタリアのライフスタイルや産業構造は、小さいモノの集合であり、参考にすべき面がある。(廣田) ・ 中山間地域では、職住近接で小さな産業基盤･生活基盤が整うことが重要。(廣田) ・ イタリアのような「生活の質へのこだわり」を四国においても考えるべき。(廣田) ・ 田舎から都市に出る最大の理由として教育があり、居住の観点からは教育への着目が不可欠。(豊田) ・ ライフスタイルについては、企業と結びついた形と企業から切り離された形（マルチハビテーション）の両面からの観点が重要。(羽藤) ・ 高齢者の移動手段としての公共交通の確保という観点が重要。(豊田) ・ 四国には、東京や大阪等とは異なる生活の質がある。(轟) ・ 地域に対してインフラ整備のアナウンスメントは重要。(羽藤) ・ 四国の地域スタイルを考える上で、住む人の生活と移住者の生活の観点から考えていくべき。(山中)
	②知の創造拠点としての独自色のある開かれた教育の場の展開	・ 大学における四国外に出ても戻ってくる人材育成、やりがいのある仕事づくりにより、人口が減少しても支えられる地域づくりが可能。(秋岡) ・ 教育、少子高齢化対策なども一つの四国の課題。(竹内) ・ 地域でリーダーとなれる人材の確保の問題が深刻（量より質）。(秋岡) ・ 人が、その地に根付くには、どうしていくべきかという、インフラ整備とは逆の発想が重要。(今井) ・ 大きな力になるのは、若い人を育てること。つまり大学であり、そのネットワークが大切。(今井) ・ 中山間地域では、6～12 歳の子供の教育が不可能になりつつある。このような層が生きていくための考え方が必要。(岡村) ・ どうやって、人を集めるのか、良い人を集めるためにどうやったら良いのかということを考えないといけない。(岡村) ・ 「人材特区」ということを考え、「災害の研究」、「過疎で空いている家を生かす」など、人が集まりやすいような取り組みを行えないか。(望月) ・ 四国が自立していくためには、コミュニケーション能力の高い人材を作らないといけない。(秋岡) ・ 四国に住み続けられるための大学があっても良い。(小川) ・ 学生が四国にとどまってもらう方法を考えるべき。(竹内) ・ 学生が戻ってくる道も作らなければならない。(本庄) ・ 親が子どもに「四国に残って、自分の国を作ってくれ」という環境を作らないといけない。地域の再生のキーになるのは、二代目、次代の人の知のネットワーク。大学や NPO の活性化を考えると良い。(今井)	・ 今は元気でも 20 年後には頑張れないという点に留意した考え方が重要。(山中) ・ 担い手の問題がある中山間地域では、エコライフという考え方を示していくなど、人を呼び込む上での工夫が重要。(山中) ・ 限界集落では、高齢者が 6 割以上であり、人材育成まで至らないのが現状。(豊田) ・ 限界集落を保全しうる豊かさが重要。(土井)
	③新しい価値観･開かれた考え方を持った「新たな公」の育成	・ 地域づくりでは経済･人的･社会関係･文化･環境等の資本の観点からの個性発揮が重要。(小川) ・ 人材の発掘が重要。(情報発信力、実行力、コーディネート力)(伊藤) ・ 四国には熱心なボランティア活動の風土がある。コミュニティの価値を見直すことが重要。(局長) ・ 地域と行政が一体となった圏域づくりが重要。(局長)(小川) ・ 「自立」のみではなく「自律」も重要。住民自らが地域社会の実現について自己決定するという考えが重要。(小川) ・ 四国において、地域住民の自律に基づくコミュニティの形を提示することが重要。(小川) ・ ボランティアを自己増殖する活力と捉え、官は場を提供することが重要。(今井) ・ 官民協働の活動支援のための資金の流れ（地域内循環、地域ファンディング）が重要。(小川)(廣田) ・ NPO やオーソリティ等、権限を持った民間組織の構築により、行政との連携が可能。(望月) ・ コミュニティのエネルギーが高いところから、新しい後退局面のあり方を打ち出すことが重要。(西村) ・ ボランティアなど四国の先進的な特性を重視し、依存の意識から脱却すべき。(廣田) ・ ソフト先行の意識に目覚めれば、ハードが高い威力を発揮することが可能。(梅原) ・ モノ（道路･橋）、人（人材、知識）等をデッドストックにしないことが重要。(伊藤)	・ 地域経営モデルの観点から、経済効果を高めるための公的支出のコントロールが重要。(廣田) ・ コミュニティビジネスを拡大するには、サポーターやコーディネイター等のネットワークが重要。(山中) ・ 産業は、集積のみでなく、ソーシャルネットワークの観点も重要。(土井) ・ 集落レベルで頑張っているところに投資するという発想は重要。(羽藤) ・ 地域を結ぶのは、ハードのみでなく、ソフトもある。(土井) ・ 現在は弱いが、産官のつながりが重要。(廣田)

項目	小項目	研究会での主な意見	ＷＧ会議での主な意見
(3) 地域資源の交流・連携 (地域資源の再発見と活用)	①歴史的・文化的な地域資源の価値の再発見	・ 自然、歴史・文化、人情等地域特性を踏まえた独自の魅力のある地域づくりが重要。(局長) ・ 食、景色、風土、人間性など、四国の持つ資源の掘り起こしが重要。(望月) ・ 自分達の宝物(地域資源)に気付いて磨くことが必要。(梅原)(竹内) ・ 四国の魅力は立場、立場で異なる。(井原 理) ・ 四国をつなぐのは、お遍路さん、お接待の文化。(梅原)(本庄) ・ 八十八ヶ所の世界遺産申請など、他の県を意識し、連携するような動きが見られ始めるなど、良い方向に向かっている。(梅原) ・ 四国の中で、お互いを競争相手としていくことが重要。(秋岡) ・ リーダーとして、地域に残り、貢献する人を育てることが重要。(梅原) ・ 四国の何が魅力か、土地に対する愛着を自覚することが重要。(井原 健) ・ 県内で消費をしない、魅力を感じられない若い者が多いなど、四国に対する認識が低い。(本庄) ・ 大学は、地元と密着した、スポーツ、芸術等の発信基地としての機能が重要。(望月) ・ 夏祭りは、よさこいと阿波踊りが先行して、他は陰に隠れている。春夏秋冬楽しめるようにならないか。(竹内)	・ 四国に残りそうなものを支える体制を整えることが重要。(朝倉) ・ 四国の農業においては、アメリカ型の大規模農業ではなく、イタリアのスローフード、スローライフ型の農業が重要。(井原 理) ・ 景観に配慮した地域はマーケットで高い評価を受ける時代が必ず来る。(井原 理) ・ 外から見た四国の魅力はスローライフ、スローフードだが、来てもらうためには最低限のインフラが必要。(廣田) ・ 中山間地域は農産品を中心とした産業に力を入れるべき。(那須) ・ 地域で、農産品等の付加価値を高めることができれば、地域での生活を確保することができる。(那須) ・ 中山間地域でも、地域資源を活かしてプラスに転じられる地域と、難しい地域があり、見極めが重要。(羽藤) ・ 歴史的な道のネットワークは四国のアイデンティティとして重要。(羽藤) ・ 優秀な人が大企業ではなく、地元に残ってビジネスを発展させているという面も重要。(羽藤) ・ 四国では、文化面ではお遍路など、一体性の観点が重要。(羽藤)
	②美しい風土としての自然資源の価値の再発見	・ 自然、歴史・文化、人情等地域特性を踏まえた独自の魅力のある地域づくりが重要。(局長) ・ 食、景色、風土、人間性など、四国の持つ資源の掘り起こしが重要。(望月) ・ 自分達の宝物(地域資源)に気付いて磨くことが必要。(梅原)(竹内) ・ 四国の何が魅力か、土地に対する愛着を自覚することが重要。(井原 健) ・ 今後の四国は、豊富な水を利用した食の再生が重要。(伊藤)	・ 地域を結ぶのは、ハードのみでなく、ソフトもある。(土井) ・ 景観に配慮した地域はマーケットで高い評価を受ける時代が必ず来る。(井原 理) ・ 担い手の問題がある中山間地域では、エコライフという考え方を示していくなど、人を呼び込む上での工夫が重要。(山中)
	③地域資源を活かした特色ある産業・コミュニティビジネスの展開	・ 学と官が強い方向性を示すことにより産官学連携が可能。(伊藤) ・ 1・2・3 次産業の融合が重要。(伊藤) ・ ものづくりに原点を置くことが重要。(伊藤) ・ 地産地消が重要。(伊藤) ・ 四国を社会実験地域として、新しい取り組みに対して寛容で、官・学・民一体で後押しする地域にすべき。(望月) ・ 四国が率先して、外国人が働けるオープンの場所を提供すべき。(望月) ・ 大学を一つの産業と考えた、総合的なマネジメントが重要。(望月) ・ 諸資本を効率的に動かす工夫が重要。(小川)	・ 四国は、人口縮小・経済縮小の先進地域としてのモデル的な姿勢が必要。(朝倉) ・ 地域ごとの強みを見出して、周囲がそれを支援するという連携の仕組みが必要。(廣田) ・ 中核的な都市のない四国では集積自体に意味はない。(土井) ・ 経済圏と生活圏が一致しているイタリア型の圏域をめざすという発想が必要。(土井) ・ 小さい企業の集合体である四国では、小さい企業がその特性を発揮して頑張るという発想が必要。(井原 理) ・ 地場産業は小さい存在だが、個々の存在を広域的に見れば大きいものとなる。(那須) ・ 地場産業は、モノを売るのみでなく、人が来ることも含めて考える必要がある。(那須) ・ 高知においては、港湾周辺の工業用地の坪単価が高い等のデメリットがあり、他との競合関係を踏まえた産業集積の戦略が必要。(土井) ・ 四国の農業においては、アメリカ型の大規模農業ではなく、イタリアのスローフード、スローライフ型の農業が重要。(井原 理) ・ 地域間で競走して独自に発展する際に、不足する部分を連携で補うという「競走ありき」の連携が必要。(轟) ・ 88 ヶ所も個々は弱い企業であり、資源を組合せ機能分担することにより、商売が成立する。(那須) ・ 高知では、世界一やチャンピオンがなくても、少しだけ儲かる付加価値の高い企業があれば成立する。(那須) ・ 四国ではホームランバッターとなる企業が少ないが、コンパクトにヒットが打てるバッターを多数創出していくべき。(廣田) ・ イタリアのライフスタイルや産業構造は、小さいモノの集合であり、参考にすべき面がある。(廣田) ・ フェラガモのように、小さいが質の良いモノを出していけば、世界的な企業となりえる。(井原 理) ・ イタリアのような中小企業が産業クラスターを形成しているという姿を目指すべき。(廣田) ・ 産業は、集積のみでなく、ソーシャルネットワークの観点も重要。(土井) ・ うるさい消費者が産業を育てたという観点が重要。(土井) ・ 優秀な人が大企業ではなく、地元に残ってビジネスを発展させているという面も重要。(羽藤) ・ 地域に対してインフラ整備のアナウンスメントは重要。(羽藤) ・ 外から見た四国の魅力はスローライフ、スローフードだが、来てもらうためには最低限のインフラが必要。(廣田) ・ コミュニティビジネスを拡大するには、サポーターやコーディネイター等のネットワークが重要。(山中) ・ ライフスタイルについては、企業と結びついた形と企業から切り離された形(マルチハビテーション)の両面からの観点が重要。(羽藤)

項目	小項目	研究会での主な意見	ＷＧ会議での主な意見
(4) 域内の交流･連携 （多様な地域間の交流･連携の強化）	①都市間連携の強化	・ 県単位ではなく、生活圏という観点が重要。（岡村） ・ 四国の現状は１つ１つだが、連携を深めることで、大きな力が発揮できる。（局長） ・ 四国は１つ１つで互いを知らない。知らないが故に交流がない。（梅原） ・ 四国内で身近に一体感を感じるための観点が重要。（本庄） ・ 四国 88 ヶ所のように各々が自立しつつ、連携するという計画論が必要。（西村） ・ ハンディキャップを良い方向につなげることが重要。互いを知らないことは、今後知ることであり、ブーム創出が可能。移動の不便さは、ゆっくりした時間消費を楽しむ取り組みにつなげることが可能。（秋岡） ・ 四国 4 県の連携が必要。（梅原） ・ 四国を一つにするという考えではなく、動きを応援できるようなシステムづくりが重要。（望月） ・ 多様性を前提にしつつ、全体としての相乗効果を高めることが重要。（井原　健） ・ 「他の地域には負けられない」という敵対心を有しているように感じる。（本庄） ・ 8 の字ネットワーク等、人々の活発な活動を支える仕組みづくりが重要。（柏谷） ・ 高速道路のＥＴＣ割引（通勤割引）等の交流促進の取り組みが重要。（柏谷） ・ 四国の many to many の地域構造における望まれる方向性を明確にすることが重要。（朝倉） ・ 行政、産業と大学の距離が非常に近く、有機的に結びついているなど、過疎、小規模、島国であることを利点と捉えることが重要。（望月） ・ 四国の特徴は、「田舎と都市が近い」、「都市間が近い」こと。田舎から複数の都市に行けるような地域像を描きたいというのが WG の考え。（山中） ・ WG では、四国がメガ都市を持たない特徴の中で、四国の姿が描けるのではないかと考えた。（山中） ・ 「四国は一つ」と言いながら、県間の流動は非常に少ない。「それは何故なのか？」という視点も重要。（山中） ・ 四国は歴史的、地理的背景もあり一体化には時間がかかる。（梅原） ・ 四国には多様性がある。この多様性･違いを認めることで、互いに繋がっていくことができる。（梅原） ・ 市町村に考えろと呼びかけながら、市町村のよい所を競って探していくようなことが必要。（伊藤） ・ 四国の一体化においては、遍路道という特徴を生かすことが大事。（小川） ・ 他地域では、高速道路、新幹線などの「軸」が存在するのに対し、四国は高速道路があっても軸として捉えるのではなく、リージョンがあってそれをつなぐもの。自立分散型のリージョンがあり、つなごうと思えばつながり、リダンダンシーも確保できる。「一つ」というより、「多様な」もの。（西村） ・ 四国の人が、四国を訪れる環境が出来ないだろうか。割引や特典など、“お得”に訪れるような仕組みがあればよい（本庄） ・ 四国の居住者のライフスタイルには、地域の違いが見られる。違いを違いとして認めないと四国らしさはありえない。（井原　理） ・ 四国の一体化に向けて、何が困っているのか、具体的に連携して、何を目指すのかがないといけないと思っている。（局長）	・ 中核的な都市のない四国では集積自体に意味はない。（土井） ・ 二次医療等は中心都市に行けばサービスを享受できるなど、機能的なコンパクトを発揮できる圏域形成が重要。（那須）
	②中山間地域における活力の向上	・ 市町村の活力のためには、税制、財源の確保が重要。（伊藤） ・ 自立している個の経済というのを大切にしながら発展させなければいけない。（望月） ・ 中山間地域の問題が最も厳しいのは、四国である。山はどうなるのか、何らか全国に発信して行きたい。（局長）	・ 頑張りたくても頑張れない地域に投資するという発想が重要。（豊田） ・ 中山間地域でも、地域資源を活かしてプラスに転じられる地域と、難しい地域があり、見極めが重要。（羽藤） ・ 地域の活力がないまま、道路を整備しても、ストロー化が生じるだけであり、地域活力の向上が第一に重要。（土井）
	③都市と中山間地域における連携の強化	・ 1･2･3 次産業の融合が重要。（伊藤） ・ 都市部の問題と、地方部の農山村の問題を分けて考えるべき。（柏谷） ・ 農山村は、都市部への通勤圏（都市部での産業、雇用を支援する地域）とそれ以外の地域（特色を活かした活動を行う地域）に分けるべき。（柏谷） ・ ヨーロッパで郊外以遠の地域で住む人々が増加している状況を踏まえ、四国において、豊かな農山村の文化、自然などを享受しながら交通等が便利で快適に利用するモデル地区を設けるべき。（柏谷） ・ 四国の特徴は、「田舎と都市が近い」、「都市間が近い」こと。田舎から複数の都市に行けるような地域像を描きたいというのが WG の考え。（山中） ・ WG では、四国がメガ都市を持たないという特徴の中で、四国の姿が描けるのではないかと考えた。（山中） ・ 四国には多様性がある。この多様性･違いを認めることで、互いに繋がっていくことができる。（梅原） ・ 四国のことを、都市的な発想だけで語ることは難しく、都市へのアクセスに時間がかかる地域をどうするかという考えが大事。集落と集落のネットワークをどうするのかという考え方も重要。（小川） ・ 四国の一体化においては、遍路道という特徴を生かすことが大事。（小川） ・ 他地域では、高速道路、新幹線などの「軸」が存在するのに対し、四国は高速道路があっても軸として捉えるのではなく、リージョンがあってそれをつなぐもの。自立分散型のリージョンがあり、つなごうと思えばつながり、リダンダンシーも確保できる。「一つ」というより、「多様な」もの。（西村） ・ 四国の居住者のライフスタイルには、地域の違いが見られる。違いを違いとして認めないと四国らしさはありえない。（井原　理） ・ 「四国は、産業集積の高い都市圏と中山間地域の距離が近く、マルチハビテーションや田舎暮らしを行う「理想の空間」としてのポテンシャルの向上を図りうる可能性を有する国内有数の圏域と捉えることができる」というのがウリになるのではないか。（岡村）	・ 四国は、都市と田舎が近く、2 つの生活がしやすい条件にある。（羽藤） ・ 担い手の問題がある中山間地域では、エコライフという考え方を示していくなど、人を呼び込む上での工夫が重要。（山中） ・ 四国の地域スタイルを考える上で、住む人の生活と移住者の生活の観点から考えていくべき。（山中） ・ “30 万人都市圏域”と“それ以外の山間地域”を分けて、生活や経済を考えるべき。（羽藤） ・ 地域の活力がないまま、道路を整備しても、ストロー化が生じるだけであり、地域活力の向上が第一に重要。（土井） ・ 二次医療等は中心都市に行けばサービスを享受できるなど、機能的なコンパクトを発揮できる圏域形成が重要。（那須） ・ 地域を結ぶのは、ハードのみでなく、ソフトもある。（土井）

項目	小項目	研究会での主な意見	ＷＧ会議での主な意見
(5) 域外の交流･連携 (環瀬戸内や世界との交流の促進)	①環瀬戸内圏での連携強化	・ 環瀬戸内の考え方が重要。(伊藤) ・ 関西･中国･九州との協働を考える必要がある。(柏谷) ・ 都市側から沿岸域を考えることが重要。(西村) ・ 他の財源確保による橋の無料化等、仕組みの転換による地域イメージの変革が重要。(西村) ・ 海の八の字ルートという考え方が大事であり、環瀬戸内のあり方を考えないといけない。(伊藤)	・ 交流の観点からは、環瀬戸内での交流の観点も重要。(羽藤) ・ 中山間地域でも四国外とのつながりは必要であり、空港や橋等のアクセスが重要。(廣田) ・ 三洋電機の組合が徳島への移転に合意したのは、神戸-鳴門ルートの開通により神戸にすぐ遊びに行けるようになったという面が強い。(那須)
	②全国との交流促進	・ 交流をキーワードに、人口の質の向上、経済活動力の向上を進めることが必要。(小川) ・ 交流人口を増やすためには、名の通った食べ物が重要。(丸山) ・ 陸、海、空の交通網の活用により、四国は足下から良いものとなる。(伊藤) ・ 四国のブランドの創出とその発信が重要。(丸山) ・ 社会資本の整備は、ハードの他、人々の力の結合としても考えることが重要。(今井) ・ 人材の発掘が重要。(情報発信力、実行力、コーディネート力)(伊藤) ・ 四国は情報発信能力が弱い。情報発信によって情報収集能力は何倍にもなる。(伊藤) ・ 他県の人に、知っていただく努力を、官民上げてやっていくことが重要。(梅原) ・ かつて「青い国･四国」という素晴らしい言葉があった。マスメディアをうまく使うことが大事。(伊藤) ・ どういう産業があるからどう交流するのか、という視点が大切。(丸山) ・ 四国外の人が、四国に何をやって欲しいのかということを考え、そのために必要なコンテンツを考えないといけない。(丸山) ・ 四国の観光について、お遍路さんの次の新しいものが出てきていない。様々な年齢層に対して、各地域が自ら魅力を発掘し、それぞれの特徴を生かして PR すべき。(秋岡) ・ 四国の観光ではお金を使うところが無い。(秋岡) ・ 対外交流の面では、四国は、他県に「飲み込まれない」ということが重要。(秋岡) ・ 四国では、四国なりの規制緩和の姿勢を考えていくことが必要。(秋岡) ・ 四国が自立していくためには、コミュニケーション能力の高い人材を作らないといけない。(秋岡) ・ よさこいと阿波踊りだけでなく、祭りを春夏秋冬楽しめるようにならないか。(竹内)	・ 中山間地域でも四国外とのつながりは必要であり、空港や橋等のアクセスが重要。(廣田) ・ 地域を結ぶのは、ハードのみでなく、ソフトもある。(土井) ・ 島国である四国ではゲートウェイを特徴付けることも重要。(羽藤) ・ 良質のものを産み出すことが四国の強みだという姿を目指すべき。(廣田) ・ 四国の農業においては、アメリカ型の大規模農業ではなく、イタリアのスローフード、スローライフ型の農業が重要。(井原 理) ・ 景観に配慮した地域はマーケットで高い評価を受ける時代が必ず来る。(井原 理) ・ 外から見た四国の魅力はスローライフ、スローフードだが、来てもらうためには最低限のインフラが必要。(廣田) ・ 地域で、農産品等の付加価値を高めることができれば、地域での生活を確保することができる。(那須) ・ フェラガモのように、小さいが質の良いモノを出していけば、世界的な企業となりえる。(井原 理)
	③東アジア、世界との交流促進	・ 陸、海、空の交通網の活用により、四国は足下から良いものとなる。(伊藤) ・ 人材の発掘が重要。(情報発信力、実行力、コーディネート力)(伊藤) ・ 国際競争に勝るための人々の知恵と力の活用という視点が重要。(今井) ・ 地域でリーダーとなれる人材の確保の問題が深刻(量より質)。(秋岡) ・ 人口の減少について、「量が落ちれば質も落ちる」ことに留意することが必要。(梅原) ・ 四国には、豊かな農産品がある。世界に向けた高級志向を提供できる可能性がある。(丸山) ・ 四国外の人が、四国に何をやって欲しいのかということを考え、そのために必要なコンテンツを考えないといけない。(丸山) ・ 四国のよさを活かした国際交流ということがあっても良い。(小川) ・ 「四国だけで国際化ができるのか」ということについて、考えておかないといけない。港湾は多分に神戸に拠っている。本四の活用という視点も必要。(柏谷)	・ 島国である四国ではゲートウェイを特徴付けることも重要。(羽藤)